



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大都市近郊農村から見たデカセギの意味：サンパウロ州スザノ市福博村を事例として
Author(s)	小内, 透; 小野寺, 理佳
Citation	「調査と社会理論」・研究報告書, 24, 15-77
Issue Date	2007-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28291
Type	departmental bulletin paper
File Information	24_P15-77.pdf



大都市近郊農村から見たデカセギの意味

——サンパウロ州スザノ市福博村を事例として——

小内 透・小野寺理佳

序 章 問題の所在

第1節 ブラジル人のトランスナショナルな生活世界

就労を目的とする日系ブラジル人の来日は、1980年代後半から始まった。当初、彼らは短期的な「出稼ぎ」労働者と捉えられていた。何年か働いて目標とする一定額の貯蓄ができれば、ブラジルに帰ると考えられていた。

ブラジル側から見れば、彼らはたんに経済的に困窮し日本に稼ぎに行くのではなく、自らのルーツの国を見聞し、文化や技術を学びに行く目的もあわせもっていた。そのため、ブラジルの日系人社会では否定的で暗い響きのある「出稼ぎ」でなく、「デカセギ」という言葉を用いるのが一般的であった。

ところが、日本での滞在は長期化し、幼少時に帯同した子どもや日本で生まれた子どもが義務教育年齢をこえる家族も現れるようになった。学校教育を終えた子どもたちは、来日1.5世代目あるいは2世代目として日本社会の中で生活するようになっていく。今でも、帰国願望を強く持つ者は少なくないが、それでもかつてと比べると、定住や長期滞在の志向性は強まっている。なかには、一戸建ての住宅を購入し、地域社会の「正式な」メンバーとなる者も現れている。

一方で、新規に来日する日系ブラジル人も少なくない。今では、来日のためのノウハウはブラジルの日系人社会では知れ渡っており、日本で世話になれる人々もいる。わざわざ、旅行業者に高いお金を払わずに日本へ行くことができる。日系ブラジル人が経営する人材派遣業も数多くあり、日本の景気も上向きのため、かつてほどコストをかけずに仕事を見つけることが可能になっている。学生の身でありながら休学して来る者や中途退学して来日してくる若者も後を絶たない（浅川 2007）。

反対に、一定の期間、日本で就労し、やがて帰国する者もいる。その数も決して少なくない。そのため、帰国した者をターゲットにした新卒のビジネスもブラジルで生まれている。日本でやり残した税金の還付を代行する会社を立ち上げた者もいるし、起業のコンサルタント業で帰国者を顧客とする例もある¹⁾。

ところが、いったん帰国しても仕事が見つからず、日本で稼いだお金が底をつき、再び日本に働きに来る人々もいる。ブラジルに帰国した後、貯蓄したお金を元手に起業したが、経営が軌道に乗らず、日本に舞い戻るケースも見られる。それ以外にも、日本とブラジルを二度、三度と行き来する者がいる。彼らはいわゆる出稼ぎの「リピーター」といわれる（飯田 2006）。

新規来日者、リピーター層、帰国者など、国を越えた移動をする者たちの動きをとめないながら、その底流に定住化傾向を強める人びとが出現しているのが現実である。

だが、日本に居住するブラジル人は、どんな立場の人であれ、ブラジルとのつながりを何らかの

形で持ち続けている。新規に来日した人やリピーター層はもちろんのこと、15年以上に渡って日本に居住し定住化傾向を強めている人でも、その例外ではない。

ブラジルとのつながりは、多様な形で存在している。日系ブラジル人が増加し始めた当初、送金による経済的なつながりとたまに利用する国際電話での会話がほぼ唯一のつながりであった。しかし、ブラジル人たちが増加すると、レストラン、衣料店、理美容店を始めとするエスニックビジネスが現れ、ブラジル式の生活様式を享受できるようになった。ブラジル人だけのイベントも催されるようになり、様々な形でブラジル文化を維持できるようになった。エスニックメディアも発達し、ポルトガル語の新聞やブラジルのテレビ放送を利用できるようになっている。インターネットの発達により、母国にいる家族や友人とのつながりも維持しやすくなった。地球の裏側に里帰りするのも、24時間で可能になったため、ブラジルと日本を往復するのもむずかしくない。

かつて、日本からブラジルへ渡った者たちがおかれた状況とはまったく異なっている。日本からの移民もその多くは、一旗揚げて帰国しようとする意志をもっていた。その意味では、現在の「デカセギ」と変わらない。だが、かつては日本との経済的なつながり、人と人のつながり、文化的なつながりはほとんど断ち切られていた。物理的な距離とともに、社会的な距離もはるかに遠かった。海をわたり、国境を越えるということは、別の世界に移動することに他ならなかった。

ところが、現在では、地球の裏側にある母国とのつながりが、様々な形で維持されている。日本に居住するブラジル人たちの生活世界がトランスナショナルなものになっているのである。

第2節 デカセギ研究の新たな課題

近年、ニューカマー研究の一環として、日本に居住するブラジル人を対象にした研究が確実に増加している²⁾。

だが、日本に居住するブラジル人たちを対象にした従来の研究は、ブラジル人たちのトランスナショナルな生活世界にほとんど注目してこなかった。初期の頃は、外国人労働者問題の一つとしてブラジル人がとりあげられ、滞在が長期化するにともなって、外国人の受入政策や行政の問題、子どもの教育の問題、そして地域社会での日本人との共存や葛藤の問題が取り上げられてきた。しかし、定住化傾向を強めている者たちを含め、日本にいなながらも、母国とのつながりを持ち続けているブラジル人の生活世界について、深く検討されることはなかった。

いうまでもなく、日本の中で生じている現象を理解するためには、ホスト社会とブラジル人たちの関わり方を検討するだけでなく、その背後にあるブラジル人のトランスナショナルな生活世界にも光をあてる必要がある。トランスナショナルな生活世界のあり方によってホスト社会での生活の仕方が左右されている側面もありうるからである。

これに対し、デカセギ者を送出する側の実情を実証的に把握しようとした調査研究はそれほど多くない³⁾。そのうち、代表的なものとして、喜多川・藤木・嶋(1992)、喜多川(1993, 1996)とサンパウロ人文科学研究所(2002)があげられる。前者は、日本でのブラジル出身デカセギ者調査と並行して実施されたものであり、日本とブラジル双方の実情を調べた先駆的なものである。ブラジル現地調査を通して、日本への出稼ぎの中から「分居型」「出稼ぎ型」とともに「永住型」が生まれつつある点が指摘されている。だが、調査時期がデカセギ現象の初期の段階に限定されるとともに、調査結果がデータの提示にとどまり詳しい分析が課題として残されたのが惜まれる。後者は、

サンパウロ人文科学研究所が実施したブラジルの日系社会実態調査の報告書である。調査項目として、デカセギに関する事項が一つの柱として位置づけられており、いくつかの興味深い事実が報告されている。本稿でも、そこで示されたデータのいくつかを参考にしている。だが、あくまでもブラジルにおける日系社会の実態を明らかにするのが主眼であり、デカセギ者の日本での生活や彼らのトランスナショナルな生活世界にまで視点は広がっていない。

もとより、ブラジル人のトランスナショナルな生活世界を明らかにするといっても、簡単なことではない。日本とブラジルの双方の視点から、ブラジル人のトランスナショナルなつながりを把握しなければならないからである。理想的に考えれば、日本に居住するブラジル人と彼らがつながりをもつブラジルの留守家族・親族・友人等を対象にした調査研究を行う必要がある。そのためには、ブラジル人と同様、研究者も日本とブラジルの各地を歩き来しながら、トランスナショナルな調査を行う必要が出てくる。だが、実際には、このようなことは時間的にも資金的にも困難であり、また時間と資金に見合った成果が生み出される保証もない。

われわれは、これまで、日本のブラジル人集住地の実証的研究を行ってきた⁴⁾。日本で多くのブラジル人が居住する地域で、日本人との関係を含め、ブラジル人の労働や生活に関する調査を実施してきた。これに続いて、2006年に、ブラジルで日系人集住地のデカセギ留守家族やデカセギ経験者の調査、サンパウロ市のデカセギ帰国者の調査、帰国子女等を含めた日系人親子を対象とする教育調査を行った。

ただし、日本での調査とブラジルでの調査は、必ずしも直接結びついた形で実施されたものではない。日本での調査で対象となった方々の出身地をブラジルでの調査対象地として選んだわけではない。ブラジルでの調査対象地の出身者を日本で調査の対象としたわけでもない。日本での対象者とブラジルでの対象者は、つながりがある者どうしではない。だが、それでも、日本側、ブラジル側の調査をつきあわせることにより、ブラジル人のトランスナショナルな生活世界の一端を浮き彫りにする上で、少なからぬ成果を得られるであろう⁵⁾。

第3節 本稿の課題とねらい

本稿では、こうした事情にもとづき、ブラジル側からブラジル人のトランスナショナルな生活世界の一端にせまることになる。具体的には、サンパウロ州近郊のスザノ市郊外にある日系人集団地・福博村を事例とし、デカセギ経験者とデカセギ留守家族を対象にした聞き取り調査を通じて、デカセギの実態、デカセギ者と留守家族とのつながりとそこにある問題を検討する。

その際、本稿では、二つの点に注意を払った。一つは、日本へのデカセギ者を送り出す地域の実情をできるだけ詳しく把握することである。日本に居住するブラジル人については様々な議論がされているものの、彼らを直接の対象にした研究は、意外なほど少ない。ましてや、彼らがブラジルのどのような地域でどのような生活をしていたのか、という点について詳しい情報が得られていない。

日本にいるブラジル人は「治安が悪化」しているので、帰りたくても帰れないという表現が使われることがある。たしかに、各種のアンケート結果でこのような意見をよく見かける。だが、われわれには現状はよくわからないし、地元の人たちが現状をどう受けとめているのかも理解できない。

われわれにとっては、日本に住むブラジル人のブラジルでの過去の生活も、現在の出身地の実情も定かではない。この点を斟酌し、対象となった福博村の歩みと現状について、比較的詳しく叙述

した。

二つめに、家族という視点を重視した。デカセギにともなって形成されるトランスナショナルな生活世界は、母国との様々なつながりによって形成されるが、本稿では、とりわけ家族とのつながりを重視した。なぜなら、今回の調査の場合、デカセギ留守家族を中心的な対象にしているためである。

デカセギ留守家族を対象にした調査は、必然的にデカセギ者との家族的つながりの内実を把握することが中心的なテーマとなり視点となる。逆にいえば、デカセギ者と家族としての関係をもつがゆえに調査の対象となるのである。

今回の調査ではデカセギ経験者に対する聞き取り調査も実施した。彼らにも、個人としてのデカセギ経験とともに、それを通じた母国とのつながりの実態を、家族との関係を中心に過去にさかのぼって語ってもらった。

デカセギ者個人には、年齢、性や母国での職業等、個人そのものの属性とともに、家族の中での位置や家族成員との関係性という点にも差異がある。そうした違いが、デカセギの理由、現状や将来に何らかの影響を及ぼしている可能性は無視できない。この点も、デカセギ経験者に対する調査結果の分析の際に、家族の視点を重視した根拠となる。

以下、調査対象となった日系人集住地スザノ市福博村の歴史と現状を把握した上で、デカセギ経験者と留守家族を対象に、デカセギに行くまで、行ってから、帰国後といった時間の流れにそって、デカセギの実態、デカセギ者と留守家族とのつながりとデカセギが抱える問題について、検討していく。

第1章 スザノ市と福博村の歴史と現状

第1節 スザノ市の概況

福博村はサンパウロ市の東方34キロに位置するサンパウロ州スザノ市の中にある（図1-1）。

福博村があるスザノ市は、1875年頃、サンパウローリオ・デ・ジャネイロ間の鉄道、セントラル線の開通を契機に開発が始まった。鉄道が横断することになったスザノの原野は新天地を求める人びとの目にとまり、1879年にブラジル中央鉄道会社の管理人、アントニオ・マルケス・フィゲイラがこの地に居を構えた。その後、次第に集落が形成され、1908年には汽車の停車場が建設された。その時の建築家ジョアキン・アウグスト・スザノ・ブランドンの名にちなんで、集落は正式にスザノ（SUZANO）と呼ばれるようになった。人口の増大にともない、スザノはモジ・ダス・クルーゼス市付属の「管区」、さらに「教区」となり、1949年には自治権を持つ「市」となった。

1970年代に入ると、サンパウロ市に通じる高速道路の建設にともなって海外の企業が進出し、人口が飛躍的に増加した。1970年代初頭、8万人程度だった人口が、2005年現在、27万人を超えるまでになっている⁶⁾。

現在、スザノ市はサンパウロ首都圏に位置する39市の1つで、北側でイタクアケセトウーバ、南側でセント・アンドレーとリオ・グランデ・ダ・セーラ、東側でモジ・ダス・クルーゼス、西側でポア、フェラス・デ・ヴァスコンセーロスおよびリベロン・ピーレスの各市と接している。面積は

206平方キロメートルで大阪市（約220平方キロメートル）よりやや小さく、50.7%の市街地と49.3%の農地からなっている。

スザノ市の産業は1970年代以降の企業進出により工業が中心になっている。2005年現在325企業が立地し、約17,000人を雇用している。スザノ市に立地する企業には、比較的大規模なものが多い（Secretaria Municipal de Comunicação Social 2006）。表1-1のように、スザノ市を含む周辺8市町村の中で、人口規模は3位であるにもかかわらず、従業員500人以上規模の企業は12と、もっとも多くなっている。その結果、全産業従事者にしめる工業従事者の割合は49.4%（2003年）にのぼる。サービス業従事者が9,292人、商業従事者が6,327人と工業に続くが、全産業従事者に占める割合はそれぞれ27.2%、18.5%にとどまっている⁷⁾。

工業の業種は薬品、セルロース、機械、ベアリング等、多岐にわたり、このうち約30社が日本精工（ベアリング・1970年設立）、コマツ（建設機械・1973年設立）、ミットヨ（精密測定機器・1974年設立）等の日本企業およびGyoutoku（セラミック）を始めとする日系企業（経営者が日系人）である（Secretaria Municipal de Comunicação Social 2006）。スザノ市の基幹産業である工業にとって、日本や日系人のもつ意味は大きい。ちなみに、コマツの建設を契機に、本社がある石川県小松市と1972年に姉妹都市協定を締結している⁸⁾。

スザノ市は農業も盛んで、市の南部に農業地帯が広がっている。農家は約540戸で、野菜、果物、花卉を中心とした近郊農業が特徴である。なかには、10万羽を越える養鶏場やブラジルーのレタス栽培農家、また大きな規模で人工キノコ栽培を行う農家もある。農家の約半数が日系人であり、農業の場合も日系人の占める位置が大きい。

図1-1 スザノ市の位置



表1-1 都市別従業員規模別事業所数（製造業）（2004年）

都市名	従業員規模				計
	10人未満	10人～	100人～	500人～	
ピリチバミリン	5	8	-	-	13
フェラス・デ・ヴァスコンセーロス	120	92	5	2	219
グアラレマ	28	15	5	-	48
イタクアケセトウーバ	154	227	28	3	412
モジ・ダス・クルーゼス	297	188	26	6	517
ポア	87	56	17	1	161
サレゾポリス	10	6	-	-	16
スザノ	181	110	24	12	327

資料：スザノ市役所資料（2006年8月入手）より作成。

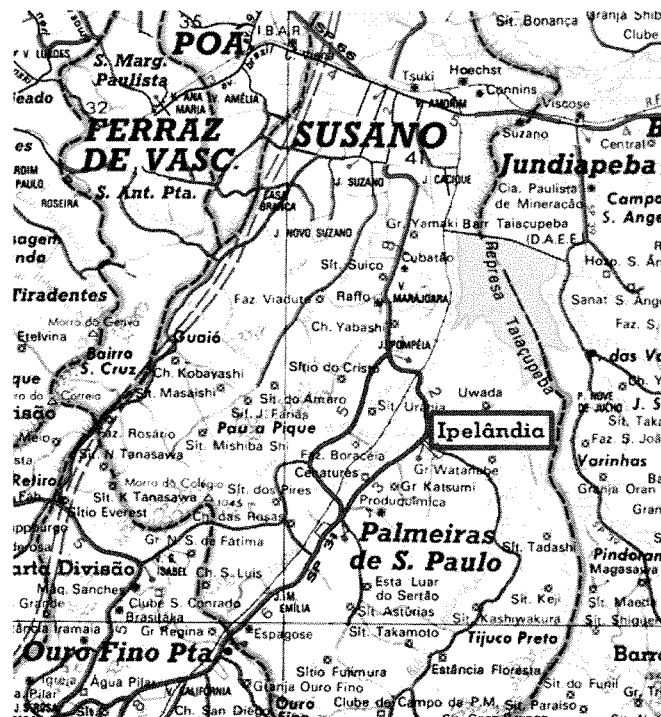
日本人が最初にスザノ市に入植したのは1921年で、1930年代以降、従来コーヒー農場等でのコロンノ（契約家族労働者）として農業労働に従事していたサンパウロ州奥地の日本移民が自営農として転入し、第二次世界大戦後には日本移民がもっとも集中する地域の一つになった。1958年の時点で、スザノ市の日本人・日系人（以下、原則として日本人と日系人を区別せず日系人とする）の世帯数は1,043世帯、人口6,825人、うち一世が2,336人、二世が3,570人、三世が860人となっていた（サンパウロ人文科学研究所 2002：24）。

1950年代には、スザノ市に約12ほどの日系人集団地があり、それぞれの集団地で相互扶助組織が形成されていた（大野・宮崎 1957：283）。1964年には、スザノ市全域の852世帯からなる汎スザノ文化体育農事協会も結成された。この協会は日系農家による「農産展」を行い、そこで得た収益と日系企業の協力によって会館・運動場・学校の整備が進められた。1997年には汎スザノ文化日系クラブに名称を変更し、個人会員900人余のスザノ市最大の日系人組織となった。2001年現在、スザノ市の日系人の割合は8～10%といわれている（サンパウロ人文科学研究所 2002：24）。

第2節 福博村の組織と歴史

福博村はスザノ市の中心部から南へ13キロの地点にあるイペランジャ地区（Vila Ipelândia）に位置している（図1-2）。福博村は、「村」という呼び名がついているものの、行政地区の名前ではない。イペランジャ地区に居住する日系人が作り上げた地縁的な相互扶助組織である。正確には「福博村会」（Associação Nikkei do Bairro das Palmeiras）という（図1-3参照。以下、福博村会の会員が居住する範囲を福博村とする）。

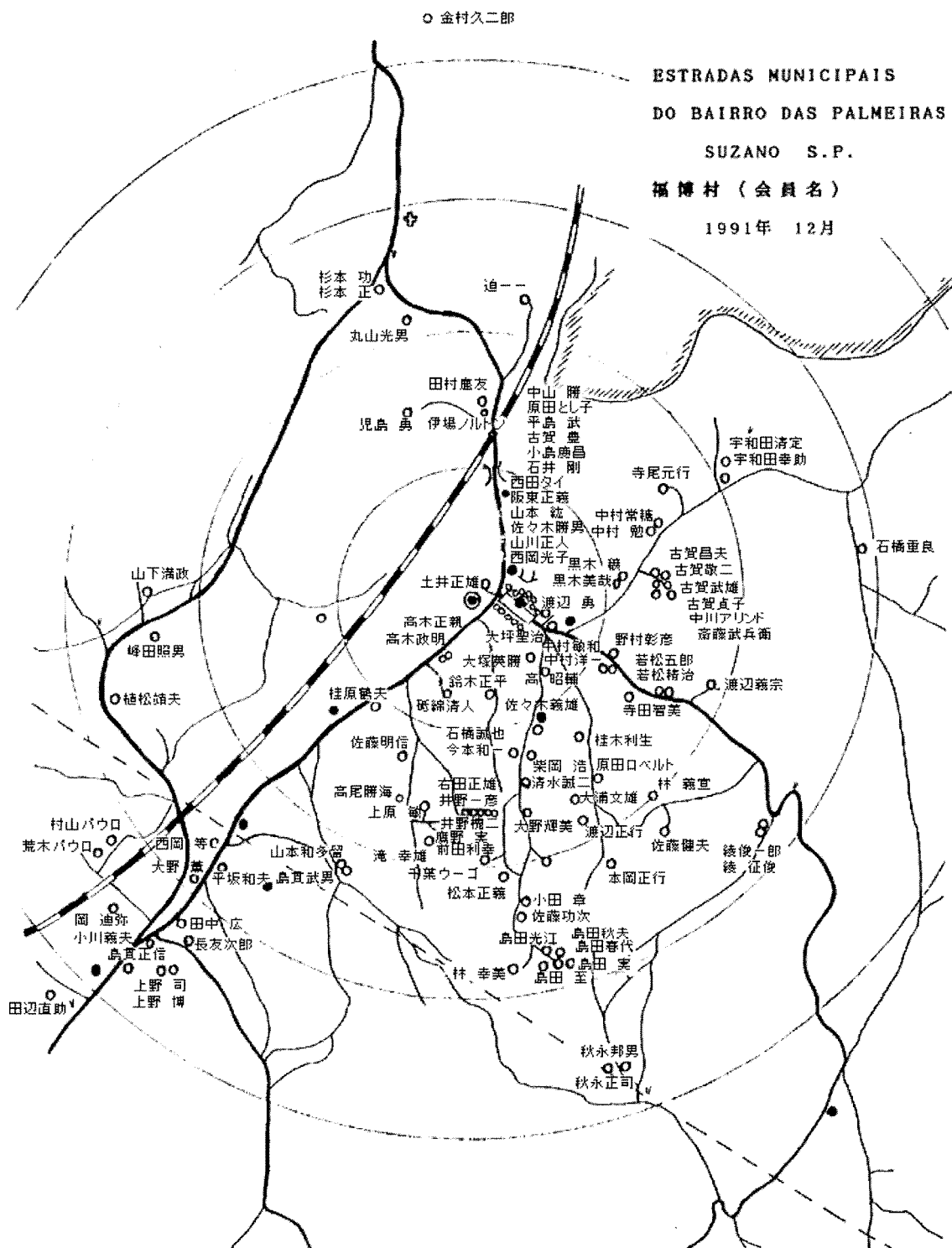
図1-2 福博村の位置



資料：http://www.100nen.com.br/ja/fukuhaku/000056/20040625000500.cfm

（福博村会のホームページ）より。

図1-3 福博村会の会員地図 (1991年12月当時)



資料：http://www.100nen.com.br/ja/fukuhaku/000056/20040625000501.cfm (福博村会のホームページ) より。

かつて日系人集団地には多くの相互扶助組織があった。しかし、入植者の移動等により相互扶助組織が機能しなくなったり、解体したりすることが少なくなかった。福博村に隣接するチジユク・プレット地区にあった日系人集団地もそれにあてはまる。同地区はかつて福博村と同様、独自の相互扶助組織をもっていたが、戸数の減少等のため1997年から同地区に居住する日系人が福博村会に加入するようになり、翌1998年には同地区が福博村会の新しい「区」として位置づけられるようになった。それにともない、それまで11区に分かれていた福博村会の組織は12区体制になった⁹⁾。2001年の段階では、パルメイラス地区、バルエリ地区の住民も同会に加入し、10区体制となり(浅野 2003:21)、2004年にはさらに8区体制に再編されている¹⁰⁾。

なお、福博村の範域に住む日系人でも福博村会の会員でない者もいる。2006年8月調査時点で、この地域の日系人のうち約100戸が会員、約30戸が非会員である¹¹⁾。あくまで任意参加による自主的な団体だからである。また、同地域には日系人以上の数のブラジル人も住んでいる。その多くは、日系人農家の家付き雇用者(カマラーダ)と不法占拠により地区内に住みついたファベラ^マの住人(後述)である。

福博村がある地域一帯の土地は、歴史をさかのぼると、もともと自給自足経済を営むカボクロ(インディオと白人の混血人種)が所有していたものである。しかし、次第に商品経済が浸透する中で、イタリア人の商人ロベルト・ピアンキが、先住民カボクロに商品を高く売り、お金を高利で貸し付け、その代償に土地を取り上げるやり方で、土地を集積していった。アドリアーノというポルトガル人も同様な方法でカボクロから土地を略奪した。彼らのねらいは、後に続く入植者への土地の転売・転貸にあった(大野・宮崎 1957:290-1)。

イペランジャ地区に初めて入植した日本人は福岡県出身の原田敬太と古賀貞敏・茂敏兄弟の二家族である。「原田敬太は1913年に、22歳で、17歳の妻を伴って渡伯している。草創期の日本移民の宿命的な辛酸をなめ、しかも奥地植民事業で挫折を味わい、40歳で、心機一転、原始林の残る、400アルケール(1alquire=24,205m²) [注一約970町歩]の土地をロベルト・ピアンキから買い取り、理想の村づくりをめざし」(喜多川・藤木・嶋 1992:104)て、1931年3月11日に入植した。これが後に福博村誕生の日とされる。福博村の名は原田敬太の出身地、福岡県の「福」と博多の「博」からとったということである。

入植初日の原田の日記には、以下の言葉が記されている。

朝八時、着聖。一同と自動車でノルテ^マ駅に出て十時半の気車で無事乗替えスザノ^マ駅に十二時半に安着

果樹園に午後一時亦安着

一同と晩食す

安着祝いに一杯のピンガ^マだった

※「聖」はサンパウロ、「ピンガ」はブラジルの蒸留酒。

この言葉は、福博村会の会館前にある入植記念碑に刻まれるとともに、移民百周年記念事業の一環として開設された同村会のホームページの冒頭にも原田の写真とともに掲載されている¹²⁾。

原田は入植と同時にビアンキや彼以外の商人の所有地を販売する手伝いを始めた。この辺一帯で彼の息のかからない土地はないほどであり、彼が扱った土地は800アルケールに及んだという（大野・宮崎 1957：291）。

原田が入植した2年後の1933年には12、3家族が入植した。原田は彼らに続いて入植した日本人とともに、1933年3月、8名の会員で日本人同士の親睦を目的にした「日曜会」を結成、8月には「恵比寿会」と改め、その会長となった。さらに、1935年1月、福博日本人会が会員14名によって誕生した。その間、1933年6月に13名の会員により青年会が結成され、1934年10月には日本語学校が開設、14人の生徒が入学している。また、1938年10月には女子青年会も結成されている。着実に日本人（日系人）のコミュニティが形成されていったのである。それは、原田がめざした村づくりの理想にもとづいたものであった。

しかし、第二次世界大戦が近づくとつれ、日本人を始めとする外国人は厳しい生活を余儀なくされるようになった。1938年には、日本人学校を含むブラジル国内の外国人学校が閉鎖され、日本語新聞を含む外国語の出版物が発行禁止となった。

福博村でも1940年9月にはブラジル政府の外国人の活動禁止命令により日本人会が解散され、日本語学校も閉鎖された。翌1941年3月には青年会も休会に追い込まれた。形成され始めた日系コミュニティが戦時下に解体されたのである。

しかし、戦争が終わると、1947年2月に青年会が復活、同年3月には日本語学校が再開された。同年4月には壮年会が結成され、翌1948年に戦前の福博日本人会の名を改め福博村会が創設、日系コミュニティが再建された。その後、構成メンバーは入れ替わったものの、福博村会は現在でも生き続けている¹³⁾。

第3節 農業の推移と離農化の進展

福博村を構成する家は、もともとそのほとんどが農家であった。入植当初の農業は、野菜、米、桃など各種の作物の栽培から始まった。次第に、トマト中心に作物が絞られていくと同時に、1936年には養鶏を取り入れる農家が現れ、1939年にはスザノ産業組合が発足している。1941年に養鶏専業農家も誕生し、ユーカリの植林も行われた。1948年には花卉栽培も始まり、サンパウロ市のグラジオラス市場を支配するまでになった。1950年代には、レモン栽培（1952年）、イタリアブドウ栽培（1954年）も始められた。なお、1954年5月に戦後初めての日系人移住者が入植している。さらに、1960年には日系人の野菜栽培者が低地に借地農として大量に入植した。

1960～1970年が農業最盛期で、葉野菜が始まり、借地農を含め最大50余戸により低湿地で大量に栽培された。しかし、1976年8月になると、政府による貯水湖建設計画にともない、イペランジャ地区周辺の低地の接収が始まり、それによって、葉野菜栽培農家は5戸に激減した。また、戦中に始まった養鶏も1960年代半ばに「養鶏の村」と呼ばれるほどの隆盛を見たが、奥地の大型養鶏に押されて、1970年代に次第に衰退していった。1960年代半ばに68戸あった鶏卵農家が1981年には9戸にまで減少し、農業は野菜・花卉を中心としたものになった（喜多川・藤木・嶋 1992：104-7）¹⁴⁾。

このような経緯の中で、1980年頃には交通網の整備等の事情もあり、野菜・花卉の栽培を中心とした近郊農業の価値が高まり、「経済的にきわめて裕福で、農業の機械化が進み、生活に多くの電気器具を取り入れ」「教育にも大いに力を入れている」「近郊一の文化農村」といわれるまでになっ

た¹⁵⁾。また、現在では、多くのブラジル人労働者を雇って、10万羽を超える養鶏場や大規模な人工キノコ栽培を行う者も現れている。

しかし、この間、次第に離農の傾向も進行し、表1-2のように、戦後直後の1948年に91%であった農家率は1970年には70%になっていた。1980年代に入ると、「大都市と隣接する、福博村は、スザノの町からリベロンピレスの方からと、せめられこの80年代中にはベッドタウンとなることであろう¹⁶⁾との見方もされるようになった。1988年には、非農家の構成員の増大にともなって、福博村会の産業部が文化部に衣替えされ¹⁷⁾、2001年には福博村の農家率は6割を切り57.5%になった。離農した構成員の中には、スザノ市内やリベロンピレス市内の職場に通う者もいる。

表1-2 農家比率の推移

	農 家	非農家
1948年	91%	9%
1960年	89%	11%
1964年	87.8%	12.2%
1970年	70%	30%
2001年	57.5%	42.5%

資料：2001年はサンパウロ人文科学研究所『日系社会実態調査報告書』サンパウロ人文科学研究所、2002年、p.56、それ以外の年は福博村各種資料より作成。

第4節 人口の減少と高齢化

しかし、近年、福博村における離農傾向は、1980年代初頭に考えられたベッドタウン化につながらず、人口減少をもたらすようになってきている。

表1-3は、1931年に原田らがこの地に入植して以降の、人口の推移を見たものである。ここから、1931年の時点で2戸14人であった住民は、1936年には40戸・239人、1948年には153戸、1,008人と着実に増加したことがわかる。さらに、1950年、1960年には人口がやや減少したものの、1970年には戸数（214戸）が200戸を越え、人口（1,512人）が1,500人を越えるまでになっている。この時点では、前述したように、一定の離農傾向が始まっていたが、それが人口減少と結びついていなかった。

しかし、それ以降、さらなる離農の進展が人口減少につながるようになった。事実、1981年には、戸数が144、人口が886人と激減している。しかも、その勢いはとどまることなく、2001年には128戸、499人にまで減少している。

表1-3 戸数と人口の推移

年	戸 数	人 口	男	女
1931	2	14	—	—
1936	40	239	—	—
1948	153	1,008	—	—
1950	142	960	496	464
1960	167	967	493	474
1970	214	1,512	784	728
1981	144	886	444	442
1991	147	681	321	360
2001	128	499	242	257

注) 1. 単位：戸、人
 2. 複数の資料で異なる数値があった場合、原則として年次の新しい資料に依拠した。
 3. 数値には、福博村の地区内に居住する日系人も含まれる。
 資料：福博村ホームページ、福博実態調査委員会「福博村実態調査統計図表」1981年、他福博村各種資料より作成。

こうした人口減少は、年齢別に見ると、老人以外の層が少なくなることによって生み出されている。表1-4からわかるように、0～17歳の子ども、18～59歳の労働人口は、それぞれ1970年の601人、777人をピークに減少に転じ、2001年で95人、279人にまで低下している。これは、これらの年齢層の人たちが福博村の地域から近隣の都市やサンパウロ市へ転出することによって生じている。

それに加え、近年では日本へのデカセギによって人口減少に拍車がかかっている。福博村の場合、日本へのデカセギ者（1人）が初めて登場したのは1985年である。1986・1987年はいなかったが、1988年に3人、1989年に10人、そして日本の入管法が改定された1990年には一挙に49人がデカセギ経験者になった¹⁸⁾。その後の詳しい経緯は把握できないが、2001年には福博村人口の13.1%にあたる67名が日本へのデカセギ経験者になっている（サンパウロ人文科学研究所 2002：85）。1970年から始まった離農を契機とする子どもや労働人口の転出先が、1990年代以降、国内にとどまらなくなってきたのである。

これに対し、60歳以上の老人は1970年から1981年にかけて134人から91人まで減少するが、それ以降再び増加に転じ、1991年、2001年と増加傾向を示している。その結果、2001年現在、60歳以上の老人は125人で全人口の25.1%を占めるに至っている。ブラジル全体の60歳以上人口比率が8.6%なので¹⁹⁾、福博村の場合、高齢化水準の高さが際だっている。一人暮らしの高齢者世帯や高齢者のみの夫婦世帯も生み出されている。

表1-4 人口構成の推移 単位：人、%

	子ども 0～17歳	労働人口 18～59歳	老人 60歳以上	合計
1950	453(47.2)	457(47.6)	50(5.2)	960(100.0)
1960	454(46.9)	461(47.7)	52(5.4)	967(100.0)
1970	601(39.7)	777(51.4)	134(8.9)	1,512(100.0)
1981	344(38.8)	451(50.9)	91(10.3)	886(100.0)
1991	180(26.4)	392(57.6)	109(16.0)	681(100.0)
2001	95(19.0)	279(55.9)	125(25.1)	499(100.0)

注) ()内は合計に対する割合。
資料：福博村ホームページ他福博村各種資料より作成。

第5節 治安の悪化とファベエラの拡大

1970年以降の高齢者比率の高まりをともなう人口減少は離農だけが原因ではなかった。治安の悪化とファベエラの拡大による居住環境の悪化も無視できない要因になっている。

治安の悪化は1980年頃から目立ち始めた（治安の悪化について、詳しくは本章補節を参照）。盗難、強盗が目につくようになり、住民は番犬を飼い、サイレンを備え付け、村会でも防犯対策本部や防犯部を設置するなどして、個人的集団的に自衛の手段を講じるようになった。一時期、小康状態になったものの、1990年代に入ると、ふたたび治安の悪化が顕著になり、2002年には福博村会の一人暮らしの老人が強盗に殺害される事件も発生している。

治安の悪化と同時に、1990年頃から、福博村周辺ではファベエラが拡大する動きも進んだ。ファベエラはブラジルの都市部に見られるスラムを示す言葉である。ところが、農村地帯の福博村周辺にファベエラが急増している。ファベエラの急増は、前述した政府の貯水湖建設計画による周辺の低地の接收（1976年8月）をきっかけにしている。接收された土地のうち水没を免れた低地に不法に住みつく者が現れ、それが拡大したのである。1995年頃には、表1-5のように、福博村会の会館の周囲にまで、不法占拠による小屋が建ち始め、「境界の内に入らないように敷地周囲にセルカ

〔注一欄〕 をする事」（「1995年12月6日合同役員会」より）になった。ファベエラには教会がわりの小屋まで建てられるようになって²⁰⁾。

表1-5 ファベエラをめぐる動き

年	内 容
1995年	・ 会館の周囲に家が建ち始めている（ファベエラ〔注一スラム街あるいは不法占拠により形成された貧民街〕）、境界の内に入らないように敷地周囲にセルカ〔注一柵〕をする事に決まる、一部は既に設置済み。（12月6日合同役員会）
1996年	・ ファベエラ（DAE〔注一上下水道課〕の土地への不法入居者達）を除去する様、市役所及びDAEに訴える必要があるので渉外部で交渉して頂きたい。（2月14日役員会） ・ 市役所に陳情（不法入居家屋撤去の件）H〔注一以下、人名はイニシャルで表す〕、S〔が〕、ヘケリメント（請願書）を書いて、スザノ市役〔所〕、DAE及びSABESP〔注一サンパウロ州水道公社〕に提出する。（3月22日役員会）
1997年	・ DAEの土地への不法入居者の問題：市役所の推薦でDAEに行き交渉したが不法入居者の除去は現段階では程んど不可能（会長）。（1月19日第48回定期総会） ・ 不法入居者の件。DAEに交渉した処、裁判で敗訴したマニクラフト工場が2年後に撤去されるので不法入居者の家もその時撤去する予定との事（S）。（1月19日第48回定期総会） ・ 不法入居者問題（K） 明日午後4時、市庁舎へ行きE市長に陳情する事になっている。（4月9日役員会）
1999年	・ ファベエラの問題でDAEの係に頼んで立ち退きしてもらおうよう交渉中。（11月11日役員会）

資料：『福博村村会議事録』（1980年～2005年）より作成。ただし、2000年は入手できなかった。
また、それ以外にもすべての記録が完全な形では入手できない年がある。

福博村では、ファベエラを撤去するため、1996～1997年に市役所・市長やSABESP（サンパウロ州水道公社）等に何度も陳情や請願を行っている（「1996年2月14日役員会」「1996年3月22日役員会」「1996年5月23日役員会」「1997年1月19日第48回定期総会」等）。1997年には「市役所の推薦でDAE〔注一周辺の土地を接収した機関〕に行き交渉したが不法入居者の除去は現段階では程んど不可能」との報告が福博村会の会長からなされている（「1997年1月19日第48回定期総会」）。その後も断続的にファベエラ撤去のために関係機関と交渉を続けているが、問題は解決していない（「1997年4月9日役員会」「1999年11月11日役員会」）。

このように、治安の悪化と並行してファベエラの問題が深刻化してきた。ファベエラの拡大は、治安の悪化と無関係ではないが、直接的な因果関係は明確ではない。たしかに、ときおり犯罪者が逃げ込んだり、ファベエラの住民の中に大きな罪を犯す者もいる。だが、ファベエラは必ずしも治安を乱す犯罪者の巣窟ではない。ファベエラは公有地の不法占拠者たちの居住区であるが、そこから福博村の農家の労働者として通う者もいる。

治安の悪化はむしろ、「失われた80年代」といわれるブラジル経済の混乱を背景としたブラジル国内全体のより大きな現象の一環である。治安の悪化は、福博村に特有な現象ではない。サンパウロを始めとする大都会では治安の悪化が著しく、福博村の状況はサンパウロに近いことの影響があると考えることもできる。

福博村では、治安の悪化とファベエラの拡大が生活環境の悪化をもたらしてきた。こうした現実が、より安全な場所を求めて転出する動きを促すことは必然的である。しかも、ブラジル経済の混乱が続いていた1990年に日本での入管法が改訂されたため、多くの人びとが安全に確実な所得が確保できる一時的な転出先として、日本に注目するようになった。その後、ブラジル経済の混乱はある程度解決してきたが、ブラジル全体も福博村周辺も治安はなかなか好転しないままである。したがって、2001年に日本へのデカセギ経験者を対象にして行われた調査結果を見ると、福博村の場合、ブラジルへの再適応に関する困難なこととして、「治安の悪化」をあげる者がもっとも多くなっている（サンパウロ人文科学研究所 2002：98-9）。そのため、一度帰国しても、再び日本へデカセギに行く者も少なくない。こうして、当初一時的な転出先として考えられていた日本での滞在が結果

的に長期化する傾向が強くなっている。

以上のように、福博村は1970年代以降、離農の増加にともなう転出者の増加によって過疎化、高齢化が進み、ブラジル経済の混乱と治安の悪化が進む中で1990年の日本での入管法改訂を契機に日本へのデカセギが増加した。それによって、さらなる過疎化と高齢化が進展し、一人暮らしの高齢者や高齢者の夫婦家族も生み出されるようになってきている。これが、福博村の現状である。

デカセギ者にとって、村を離れ遠い日本で生活することは、様々な葛藤や悩みをもたらすはずである。それは、福博村に残された留守家族も同様である。また、その実態は時代によって変化しているかもしれない。

そこで、以下、第2章以降、デカセギ経験者と留守家族を対象にして、デカセギがもたらす現実について、より詳しく検討していく。

なお、『福博村村会議事録』に治安の悪化への対応が克明に記録されているので、参考のため、補節として記述しておく。

〔謝辞〕長時間お話しを聞かせていただいた福博の方々に、深く感謝の意を表します。調査にあたっては、対象者のリストアップ、対象者のお宅への送迎等、福博村会の大浦文雄、林義宣、井野一彦、中島静雄、高木政親、林幸美の各氏にお世話になりました。また、『福博村村会議事録』（1980～2005年）を始めとする各種資料も快く提供していただきました。厚くお礼を申し上げます。

補節 治安の悪化への福博村会の対応

福博村では1980年頃から、治安の悪化が目につくようになった。それに対し、福博村会では、様々な対応を行ってきた。ここでは、それらの現実を福博村会の議事録を通して、見てみよう。

表1-6は、1980年以降の福博村会の議事録から治安の悪化をめぐる記述を抜粋したものである。これを見ると、1980年3月に、一ヶ月で「福博地区において四件、未遂一件、チジユクプレートにおいて三件の強盗、暴行事件が発生し」（1980年3月18日合同役員会）ている。3月20日には防犯対策のための「村民集会」が開催され、3月30日には村会内に「防犯対策本部」が設置された。村会では番犬、サイレン、武器等の即時入手等の自衛手段が議論され、派出所の設置等を行政に要請することが決められた。にもかかわらず、なかなか事態は改善されず、9月10日の議事録には「本年3月より今日まで、強盗強姦事件が22件（内未遂9件）あった。防犯本部もすでに12回防衛会議を行ない当局とも折しょうし努力して来たが、ひとつとして実が上らない。強力な自己防衛手段を講じなければならないものか……等の発言あり。対策の促進を考えさせられる」との記録が残されている（9月10日合同役員会）。

治安の悪化は、福博村に特有の問題ではなかった。「失われた80年代」といわれるブラジル経済の混乱を背景として、ブラジル国内全体に生まれた現象である。とくに治安の悪化が目立つ大都市サンパウロに近いため、福博もその影響を受けたとの見方もできる。

その後、努力の甲斐あってか、1981年から1983年には、やや治安問題は沈静化したようである。少なくとも、議事録を見る限り、この3年間は治安問題の記録は残されていない。

1984年に入ると、「社会不安と警備力の弱体化により最近又、事件が頻発しているの村会としても何とかせねばならないのではないかと云う事で役員会が招集され」（1984年11月5日防犯関係

役員会)、駐在所の設置を要請し、パトロールのための警邏車を村会から寄付することが決められた。1985年には村会会員を中心とした募金により防犯車を購入した。また、駐在所あるいは派出所のための土地を提供したいとの会員の申し出もあった。1987年には、初めて村会に防犯部長がおかれるようになり、駐在所の建設が議論されている。

しかし、この段階では、「一応事件もないし、平和な部村のように見えるが、気を付けて欲しい」(1月25日第38回定期総会)との記述からわかるように、1980年のような緊迫感は見られなくなっていた。

表1-6 治安の悪化をめぐる動き(ファベラ問題を除く)

年	内 容
1980年	<p>・ピライペランジャでは外敵に備えて警備体制を整えた。午後八時より十二時まで、ラジオパトロールを請願。配置されることとなった。緊急の時は、連絡してほしい。以上の報告がIよりなされた。ついで、一週間前にあった菓子製造所強盗事件から発し、村内の警戒体制をより強化する話が話し合われ、結論として、各自がより注意し、未然に防ぐよう要望がなされた。(3月10日合同役員会)</p> <p>・本日の役員会は、強盗、暴行事件の防衛対策緊急役員会となった。即ち本月にはいり、福博地区において四件、未遂一件、チジクプレートにおいて三件の強盗、暴行事件が発生したのである。</p> <p>外敵が単なる金銭泥棒でなく、婦女子に暴行を加える悪質強盗であることから、断固とした防衛対策をたてる必要がある。廻状を会員に廻した(1980年3月14日付で村会長名義で廻覧用「会報」速報第1号が発行された)くらいでは不徹底である。早急に村民大会を開いて諸々の問題を促進するとともに、各自の防衛のなんたるかを、この際自覚徹底したい旨発言あり。</p> <p>共議の結果、対策として、1. 家の廻りを明るくする、2. 番犬をたくさん用意する、3. 武器をすぐに用意する、4. 村民集會を3月20日午後1時より会館で開く、以上が決議された。</p> <p>村民集會の提案事項として、番犬、サイレン、呼鈴、武器等の協同購入と射撃訓練、サイレンの連絡法の研究が決められた。(3月18日合同役員会)</p> <p>・本大会は、村会行事をはなれたものであるが、会議のうちに警備配車コンビ【注一軽自動車】10台分費用として村会会計より支出することに決議されたことにより、会議の概略を参考までに記すにとどめる。……現在までの外敵侵入状況説明と各自の自覚心の高揚を促す、体験談発表、ピライペランジャの警備状態の報告と更に強固な巡邏体制を要望される。このとき、コンビによる村内巡邏と経費支出が決議された。村会提案の番犬、サイレン、武器等の即時入手について、それぞれにわたり討議、決定した。以上、出席者約80名、3時間半にわたり、熱のある質疑応答がくりかえされ、村民の、防衛に対する自覚心が喚起された実に意義のある集會であった。(3月20日村民集會)</p> <p>・コンビにより巡邏は10日間で打ち切る。以後は一日おきにパトロールを配置することを確約して来た。等説明あり。</p> <p>警備費予算について、サイレン 地形に左右され聞きとれる範囲が距離に関係ないことが判明した。使用については、全体でなく、部分的に、区、或はグループ単位に連絡。あるいは威嚇用に効果があると思われるので、この方法を系統たてる必要がある。コンビによる巡邏 住民に与える安心感から云えば大いに効果があったと思われる。……恒久的にはラジオパトロールの長期配置の請願、巡査派出所(サブ・デレガシア)設置の請願の案が出され決議された。</p> <p>警備費予算について。現在までの必要額として、10日間のコンビ代10台分 10,000,000クルゼイロ、謝礼カピトン【注一軍警隊長】 5,000,000、ピライ夜警【注一地区の夜警】 3,000,000、巡邏刑事三人 5,000,000、計23,000,000を計上し、更にラジオ・パトロール、その他の経費を毎月1万クルゼイロを予定する。向こう3ヶ月を目標に予算総額を10万クルゼイロとし、これは村会と別途会計にし寄附をつることとする。等の案が出、これを議決した。</p> <p>警備費計上、別途会計の議題から防犯対策本部を村会内に設ける案が提出されこれが決定された。(3月30日役員会)</p> <p>・本年3月より今日まで、強盗強姦事件が22件(内未遂9件)あった。防犯本部もすでに12回防衛会議を行ない当局とも折しょうし努力して来たが、ひとつとして実が上らない。強力な自己防衛手段を講じなければならないのか……等の発言あり。対策の促進を考えさせられる。(9月10日合同役員会)</p>
1984年	<p>・青年会の音響装置一式が盗難に遭う。管理人住宅にサイレンを設置する必要がある。——承認。(10月12日合同役員会)</p> <p>・社会不安と警備力の弱体化により最近又、事件が頻発しているので村会としても何とかせねばならないのではないかと云う事で役員会が招集された。その結果、村の警備力を強化する為に、当村にもポストポリシアル(駐在所)を造り警備車を常駐させる事に決定。車は寄付を募って購入。ポストの規模や夜の巡邏など具体的な事をU会長、I、S両渉外係に調査して貰う事になった。(11月5日防犯関係役員会)</p> <p>・U会長、I、Sの三氏がスザノ軍警支部を訪問(六日)した結果、車の寄付は新車のみ受付ける(中古車は不可)、ポストの建設援助は可能である、警邏車の購入については満場一致でこれを承認す、寄付の型で会員外や会社等からも募金する、寄付集めは趣意書を(日葡両語)を添えて区長と防犯委員と一緒に各戸を廻る</p> <p>アセアス【注一スザノ市にある汎スザノ文化日系クラブ】を通じて市役所に働きかけ、スザノ郡全域の防犯体制、治安維持を計って貰う様、福博村会が口火を切って動いたらどうかと云う意見があり、U会長がこれをアセアスに提言する事に決定(11月13日合同役員会)</p> <p>・警邏車購入寄付の件につき票決す(出席者40名、委任状提出者28名 計68名……有効票67票)賛成38票、反対29票で可決す。(11月25日臨時総会)</p>
1985年	<p>・臨時総会で決まった警邏車寄付の件はどうなっているのか。駐在所の土地選定を進めているのが現状である。(第36回定期総会)</p> <p>・ポスト・ポリシアルの件。中央区の空き地を物色、交渉してみる。W氏より、土地提供の申出あり。警察の派出所を造る予定地は、O木工所の下側でW氏私道入口の下側に在く。アスファルトに面しておるとの事。早速、会長自らベルフェーツラ(市役所)に出向きトラクターによる整地をお願いする事に決す。(3月15日役員会)</p> <p>・先週K氏のバル【注一飲食店。お酒、食事、コーヒーのいずれも飲食できる】に強盗が入った(5月1日役員会)</p> <p>・派出所は……車購入費、派出所家屋建築費、並に整地問題もあるので、市役所に、U会長と渉外が、出向き、家屋建築を市役所に造って貰う様交渉一任す。(5月22日役員会)</p> <p>・防犯の件。スザノ地区に近々12台の警邏車が来るので、ポストを先に造れば、車を配備して来れると、カピトン……が話したとの事。早速ポストを優先して、……申請書を作製、市役所に提出、ポスト造りに交渉することに決す。(6月19日役員会)</p>

1985年	<ul style="list-style-type: none"> ・ポストポリシアルの件、駐在所の建物は、カピトンの説明によれば、市役所が建てるように承認済みであるが、ポリシア・ミリタリー [注一軍警] は車が不足しているため、福博ポストへの配車は不可能で、警邏車は植民地で寄附するのが望ましく、若し寄附して貰えば、車は非常の場合外は他所へは置かないと、カピトンが言明す。趣意書を書いて、大口寄附を募り次は工場関係、最後に小口を巡ることにす。(8月31日役員会) ・防犯関係募金活動中、IN氏及び工場等大口2610万クルゼイロス、現在、募金目標は約4000万クルゼイロスとする。チジュッコ、大和[注一スザノ市の日系人相互扶助組織]も連絡して協力して貰う。一搬は区長と防犯委員で巡る。 ・緊急事態以外は、この村に駐在し、車が故障した場合は部品代は村会で負担し手間賃は警察署で負担する。(9月17日役員会) ・防犯の件に就いて、防犯車購入す。29,203,129クルゼイロス。防犯会計はI氏委任す。残高300万クルゼイロス電話架設に約1000万クルゼイロス、70㎡の建築物で4000万クルゼイロスの予定(駐在所)。村会会員の寄附集めは来年度初めとす。(12月16日役員会)
1986年	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の防犯委員会は1980年に組織されたものなので新たに現村会役員を中心にして委員会を作る。(2月19日合同役員会) ・3月5日に役員会を開き、新防犯委員を選出する。駐在所をできるだけ早く建てるようにする。スザノ市長としては今の駐在所予定地をもっと広くして一緒にポストデサウーデ[注一診療所]を作りたいとのこと。防犯特別会計は9万クルゼイロスの赤字になっている。(2月25日防犯委員会) ・6月6日、N氏宅に泥棒が入りました。(6月11日村会、婦人会、青年会合同役員会) ・ポストポリシアル予定地を8月13日測量にくる。(8月12日合同役員会) ・ポストポリシアルの件、市長としては会館入口の牛小屋の所へポストデサウーデと一緒に作りたいとの事。土地が狭いのが問題なら、W氏が土地をもう少し寄附されるとの事。村会としてはできるだけW氏の土地に建ててもらうように交渉する。(10月8日合同役員会)
1987年	<ul style="list-style-type: none"> ・防犯部長を村会役員とする。(1月25日第38回定期総会) ・(I防犯部長)駐在所の件、市役所に予算は取ってあるのだが、場所の問題もあり中々進行しない。一応事件もないし、平和な部村のように見えるが、気を付けて欲しい。(1月25日第38回定期総会) ・警察権を福博で何名かとはどうかとの話がG氏[注一行政関係者]よりあった。希望者は申し込む事。1万クルゼードスかかる。(6月23日役員会)
1989年	<ul style="list-style-type: none"> ・防犯に付いて、NI市議にポスト・ポリシアルの件に付き係りの人が話し合いに行くとの弁。(7月3日合同役員会) ・八月に入ったらNI市議に働きかけ、ポスト・ポリシアルの建設の件をはっきりしたい。(7月26日合同役員会)
1990年	<ul style="list-style-type: none"> ・6月22日N氏宅に四人組強盗侵入。内一人を殺害した為、犯人家族より脅迫を受けている。このような治安悪化に対処するため防犯部長下に防犯委員を組織し防犯部の強化を計りたい。委員を各区より後日入選。(7月14日合同役員会)
1994年	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年は強盗事件が二件発生した、外灯をつける事が防犯上効果的と思われる。(2月1日新旧引継合同役員会) ・2月13日パウメイラス[注一隣接する地区]のHK宅に強盗侵入、警戒を怠らないように。線路脇にジブシーが移り住んでいる。注意をするように。(3月5日合同役員会) ・3月23日、NY敷地内のI宅に泥棒、同26日16時頃、M宅(パウメイラス)に五人組強盗、車家電製品等の被害。(3月29日合同役員会) ・SM防犯部長、警察権所有のKM、SK、ITの四名で警察、市、AJ衆議も治安強化に付き、近日中に話し合いに行く予定でいる。(5月19日合同役員会) ・9月6日、NH(十一区)に夜半、泥棒が侵入しようとしているところ家人が気が付き隣家のUT宅に電話、侵入を未然に防ぐ。ACEAS[注一スザノ市にある汎スザノ文化日系クラブ]食堂、管理人宅で電気製品等盗難にあう。大和会館[注一スザノ市の他地区にある日系コミュニティの会館]が泥棒に放火され全焼、会より見舞金R\$50,000[注一R\$はリアル]を出す。(9月14日合同役員会) ・防犯の為に会館に外灯を付ける、承認。(12月9日合同役員会)
1995年	<ul style="list-style-type: none"> ・94年度中(11月24日迄)スザノ管内で2744件の事件発生。防犯に関しての外部との折衝は常に同一人が良い為、SMに涉外として防犯部に協力してもらおう。(1月31日新旧引継合同役員会) ・H農場でカミィオン[注一トラック]二台盗難に遭う、スザノ警察直通の電話番号は476-1010。(4月18日合同役員会) ・ボ語校[注一村内にあるブラジルの学校]盗難に遭う、鍵も盗まれた為取り替え村会が一時費用を立て替える。(5月26日合同役員会) ・大和のA宅に朝7時頃、五人組強盗侵入、現金、電気製品、車、等盗まれる人的被害無し、逃走中の二人は逮捕される。チジュコプレットのK(パール)も五人組強盗の被害に遭う。必ず下調べをしていると思われるので不審者を見たら直ちに警察に通報する。村内外に文書で警戒を呼びかける。(8月16日緊急役員会(防犯)) ・11月13日夜、SH宅に六人組強盗侵入、車金品の被害に遭う、幸い人的被害無し。(12月6日合同役員会) ・11月29日、大和のH宅強盗被害、犯人は縁戚関係の二人組。12月2日大和のKパールに三人組強盗、今年二度目の被害。(12月6日合同役員会) ・12月11日夜八時から十分間、テストと警戒を兼ねサイレンを一齐に鳴らす。(12月6日合同役員会) ・12月1日、会館に泥棒侵入管理人が気付いたため何も盗まざり逃走。(12月6日合同役員会)
1996年	<ul style="list-style-type: none"> ・アルンジ氏宅(前・M氏宅)に昨年暮より2回強盗侵入。老夫妻は後事を恐れて、リペロンペーレス[注一スザノ市に隣接する市]に引越された。ガンソ[注一ガチョウ]やアンゴラ[注一アンゴラ山羊]を飼うと犬より効果がある。サイレンの点検と鳴らし方を再確認する。(3月22日役員会) ・ファペーラ撤去の請願、I会長、O副会長、W・S両渉外でDAEに申請す。(5月23日役員会) ・チジュコのシャカラ[注一別荘]でトラトール[注一トラクター]を取られる(明け方、4人組強盗)(5月23日役員会) ・去る7月29日夜、AS留守宅に空巣侵入。予防法①便所に電気を付けておき、②低音でラジオをかけておく。(8月28日役員会) ・MJ(チジュコ)宅に3人組強盗。10月26日(土)夜7時頃、金品や車盗難。(10月29日役員会)
1997年	<ul style="list-style-type: none"> ・防犯の件(S) 使用人を雇う場合、3年位前からの履歴書を提出させる事ができる(身元調査)……用紙見本は沢山ありますとの事。(2月12日役員会) ・会館周囲に自動点灯装置が必要(2~3箇所)。(3月19日役員会) ・防犯(S) 使用人を雇う時記入する用紙……をコピーして各区に配る。(4月9日役員会) ・8区のTY(留守宅)泥棒が3度入り色々盗られたとの事。対策として、警察の車に巡邏してもらう様、交渉する。予め下調べを防犯委員をお願いする。(9月30日役員会) ・16:00より会館に於いて、防犯に関する村民集会を催す。軍警隊長TE、市警察署長、AR市議、及び新聞記者を招く。(11月8日防犯に関する村民集会)

1998年	・村会でNさん宅に取り付けた大サイレンを試してみる。(8月18日5時から2、3分の間)。(8月10日役員会)
1999年	<ul style="list-style-type: none"> ・最近盗難事件が多発、防犯部で警察にBLITZ [注一取り締まり] を依頼。(1月28日新旧役員事務引継ぎ役員会) ・防犯部報告一最近又特に危険になり全会員に注意通知を出す。(3月29日役員会) ・現在の強盗は人質をとるようになって非常に危険になった。これからは集団防衛の方法を考えてゆかねばならない。(6月3日防犯対策集会、出席70名) ・午後4時デレガード [注一刑事] の来場、質疑応答に入る。(デレガード談) 現在は警察側も警官が足りず、又、州政府の予算の関係で思うようにゆかない。この外色々質問と応答がなされたが詳細を省く。又、防犯のために必要な資材はH会長の奔走により販売所及び値段が当日会場に掲示された。(6月3日防犯対策集会、出席70名) ・最近又泥棒が方々で入って居る。防犯部より報告あり。(8月25日役員会) ・O氏より依頼されて小型サイレンの見本品をH会長持参、希望者は注文のこと。強盗が入ってその後逃げた場合でも一応会員に通報、その場所に集合する事に決議した。(10月1日役員会) ・最近また強盗が村内を動き回っている。(11月11日役員会) ・強盗事件がおこる度に防犯部に対して一部の人から批判の声がある。防犯部としてはできる限り力を注いでいるが部としての行動には限界があり、その点ご理解をお願いする。(12月9日役員会)
2001年	<ul style="list-style-type: none"> ・会館の音響装置一式盗難に合う。盗まれた物は今回購入した740Wの音響装置のほかテープ・デッキ、マイク2個、ケーブル2本、ミキサー、レーザー・デッキ、拡声器3個、テープ・レコーダー、電線など。(3月7日合同役員会) ・カンボ [注一原野、畑] の裏側から侵入したと思われる、使用出来ない物は草むらに放っていた。保険に入っているのでデレガシア・シヴィル (民警) のBO (事件発生届) を済ませ保険会社と交渉中 (注記: ポリシア・ミタール (軍警) のBOでは保険会社には通用しない)。保険会社から今回で4回目の盗難事件とのことで対策依頼を受ける。(3月7日合同役員会) ・1区内でコンビ車が襲われた。後で車は見つかった。(3月7日合同役員会) ・今回の会館の音響装置の盗難の件は防犯部長に連絡がなかった。(3月7日合同役員会)
2002年	<ul style="list-style-type: none"> ・警察で泥棒を逮捕しても20日以内で司法局が釈放している。盗難を目撃したら電話会社に告発して欲しい……。色々な意見が出されたが具体的な対策に結び付く結果論は無し。(3月14日電話用ケーブル盗難対策会議及び3月度役員会) ・電話用ケーブルの盗難がまた増えた。(7月10日7月度役員会) ・I氏、A氏乗用車の盗難に遭う。(8月14日8月度役員会) ・各家庭常備のサイレンの試し鳴らし: 8月22日午後8時一斉に鳴らす。防犯委員は8時30分まで会館に集合。(8月14日8月度役員会) ・軍警のバルメイラス バゼ コムニターリア [注一バルメイラスにある軍警組織] は24時間体制でアテンド [注一警戒にあたる]。(8月14日8月度役員会) ・I氏殺害に対し村会としての対応策検討。(9月11日9月度役員会) ・I氏殺害事件の早期犯人逮捕協力の資金カンパ承認。(9月16日臨時役員会) ・犯人逮捕協力の資金カンパは78名の方々からRS\$4,410,000集まる。パトカー修理用にRS\$600,000軍警へ寄付。主犯と推定される容疑者は民警と撃ち合い殺される。(10月9日10月度役員会)
2003年	<ul style="list-style-type: none"> ・何か事故があった場合は被害届をし、B.O.を取る (陳情に行くにもそれがないと重視しない)。(1月29日1月度役員会) ・U氏畑のアスペルソール [注一スプリンクラー] 盗まれた; チジュコのO氏宅家財盗まれそうになった (車が動かず助かる) (4月9日4月度役員会) ・ACEAS防犯会議 (5月22日) の内容説明: 郊外パトロール用にオートバイ4台配置、警察が分かりやすいように各住宅の前に住所を記入した縦20センチ幅50センチのプレートを立てる。(6月11日6月度役員会) ・防犯関連の諸問題検討、7月31日午後8時一斉にサイレンを鳴らす。(7月9日7月度役員会)
2004年	・HY氏、井戸のポンパ [注一ポンプ] と電線とられる。WI氏でも送水管ぬすまれる。又フェイランテ [注一個人商店] も方々で強盗にあっている。(11月役員会)

資料: 表1-5と同じ。

しかし、1990年に「N氏宅に四人組強盗」が入り、そのうち「一人を殺害した為、犯人家族より脅迫を受け」る事件がおきたのを契機に、ふたたび治安の悪化が目につくようになった。そのため、「このような治安悪化に対処するため防犯部長下に防犯委員を組織し防犯部の強化を計り」「委員を各区より後日人選」することにした (1990年「7月14日合同役員会」)。1993年には強盗事件が二件発生、1994年には福博村だけでなく、周辺地区、またスザノ全域で強盗や放火が発生し、スザノ管内で2,744件の事件が発生している (1995年「1月31日新旧引継合同役員会」)。福博村会では、これに対応して、外灯をつけたり、各戸にサイレンをおいたりしている。

それでも強盗事件はなくなり、同じ家に二度、三度と強盗に入るケースも目につき始めた。時には、使用人が事件を起こすこともあったようで、1997年には、防犯の件として「使用人を雇う場合、3年位前からの履歴書を提出させる事ができる (身元調査)」(1997年「2月12日役員会」) ので、その「用紙……をコピーして各区に配」(1997年「4月9日役員会」) っている。また、同じ年、「軍警隊長TE、市警察署長、AR市議、及び新聞記者を招」いて、「防犯に関する村民集会を催」している。警察に取り締まりの強化も依頼しているが、盗難事件・強盗事件は多発する一方で、1999年に開かれた防犯対策集会では、「現在の強盗は人質をとるようになって非常に危険になった。こ

れからは集団防衛の方法を考えてゆかねばならない」との発言がなされている。その背後に、「警察側も警官が足りず、又、州政府の予算の関係で思うようにゆかない」という事情もある。事態が深刻化する一方なので、「強盗事件がおこる度に防犯部に対して一部の人が批判の声が」あがることもあった。しかし、「防犯部としてはできる限り力を注いでいるが部としての行動には限界があり、その点ご理解をお願いします」とのやりとりも見られる（1999年「12月9日役員会」）。さらに、「警察で泥棒を逮捕しても20日以内で司法局が釈放している」ので「色々な意見が出されたが具体的な対策に結び付く結果論は無し」（2002年「3月14日電話用ケーブル盗難対策会議及び3月度役員会」）といった状態のまま推移した。

そして、とうとう2002年9月5日、福博村会会員（当時86歳）が殺害されるという痛ましい事件が発生した。殺害された会員は、5人の子どもがいるが全員が転出し、10数年前に妻が亡くなってから一人暮らしだった。子どもたちは安全面を心配し、一人暮らしを解消し同居するように促していたが、意に介さなかった。この会員は柔道6段の猛者で、以前留守宅に強盗が入ったことがあったが、「今度来たら返り討ちにしてやる」と言っていたほど、気丈な人だった。その彼が殺されたことは、一人暮らしの老人や老人夫婦だけの世帯が増加しているだけに、福博に住む人びとに大きな衝撃を与えた²¹⁾。

われわれが2006年8月に現地調査した際、ほぼすべての家に鉄製の門が設置され、何匹もの犬が飼われていた。なかには、遠隔操作の鉄門がある家や16匹の犬を飼う家もあった。だが、福博村会のある会員の話では、多少の犬を飼っても次第に効果がなくなるとのことで、16匹の犬を飼っている家以外は泥棒に入られたのでは、とのことであった。彼自身も、ピストルをもった強盗に入られたことがあるそうで、強盗が入ってきたら抵抗してはだめで、抵抗しなければ殺されることはない、と体験にもとづいて説明してくれた。

われわれの感覚からすると、とても危険な場所で、悲壮感に満ちた日常生活を想像しがちだが、住民の様子を見聞きする限りでは、必ずしもそんなことはなかった。一時期より、多少犯罪が少なくなってきたのかもしれないし、ある意味で、多発する犯罪に一種の「なれ」が生じ、対応の仕方を学んでいるのかもしれない。また、治安の悪化に耐えられない人たちはすでに転出してしまったという見方も可能である。いずれにしても、現在、治安の悪化は福博村の人びとにとって日常生活を決定的に規定する要因ととらえることはできない。

しかし、未だに治安の面から見て、安全な状態になったとはいえないことも事実で、治安問題はファベラの問題とともに、早急に解決しなければならない深刻な課題であり続けている。

第2章 デカセギ者を送り出す/デカセギに行く

第1節 調査内容

滞日中のデカセギブラジル人およびその家族への調査はこれまで数多くなされてきたが、デカセギを送り出すブラジル国内の家族やデカセギから帰国した人々のおかれている状況が取り上げられた研究蓄積は決して十分とはいえない。そこでこの度「デカセギ留守家族」と「デカセギ帰国者」を対象として調査をおこなった。

まず、福博村の協力を得て、現在日本でデカセギ中の家族をもつ人々、および、デカセギを経験して帰国した家族をもつ人々、即ち「デカセギ留守家族」を選び出し、デカセギ状況を確認したうえで、インタビューあるいは質問紙への回答を求めた。さらに、デカセギから帰国した家族、一時帰国中の家族、即ち「デカセギ帰国者」が在宅であった場合には、彼らにも、インタビューあるいは質問紙への回答を依頼した。また、家族が今まさにデカセギ中として不在である場合には、出来る限り留守家族からそれに関する情報や、デカセギ者への思いなどを聴き取ることとした。

その結果、留守家族とデカセギ帰国者・デカセギ者は、そのほとんどが、向老期の親世代とその子世代という親子関係にある人々であることが判明した。親子関係以外にも、「夫と、夫のデカセギ中ブラジルに残った妻（あるいは妻と子ども）」という組み合わせが想定されたが、本調査の対象者にそのようなケースは見られなかった。従って、以下においては、主に親子関係に焦点をあて、世代間の関係性に関心を寄せながら分析する作業が中心となろう。

さて、本調査においては、それぞれの立場（親として、子として、デカセギ「帰国者」として、年長世代として、若い世代として、など）からのデカセギに関する語りあるいはデータを得て、それをもとに、日本へのデカセギをブラジル側から見直し、そこに浮かび上がるデカセギ像や日本像をとらえることを課題とした。それを通じて、デカセギ者のトランスナショナルな生活世界の一端が把握できると考えたからである。インタビューに際しては、日本語の質問紙とポルトガル語の質問紙の2種類が用意され、対象者が選択した質問紙が提示された。設問を双方で確認のうえ、対象者には、デカセギにまつわる家族、仕事、地域などについて自由に語るよう求めた。インタビューの録音は許可を得られた場合のみおこなわれた。

質問紙の内容の概略は次の通りである。まず、留守家族に対しては、はじめに、デカセギへの賛否などデカセギの経緯をたずね、それをふまえて、デカセギ者からの送金の有無を含めた経済生活、日本への好感度、家族や周囲の人々のデカセギ観など、現在の留守家族の生活状況に関する質問をした。デカセギ者との関係については、連絡の手段・頻度、デカセギ者と留守家族に関わって心配されていることを確認し、さらに、デカセギ者の子どもが留守家族に託されている場合には、その子どもの学業や将来への関心・悩み・期待を問うた。最後に、デカセギ者の帰国後の仕事や再デカセギの可能性にまつわる思いや期待、留守家族としての経験からもたらされるアドバイスなどをたずねている。

一方、デカセギ帰国者に対しては、デカセギ前の就業状況をたずねた後に、デカセギの回数・期間・職種・収入の他、ブラジルへの送金、日本での生活についての満足度、帰国意志、日本への好感度の変化など日本でのデカセギについて具体的に問うた。学齢期の子どもを帯同したデカセギ者に対しては、学校選びや日本での学校生活についての悩みをあげるよう求めた。続いて、デカセギ中のブラジルの留守家族との関係については、連絡の手段・頻度、留守家族について心配だったことをたずね、留守家族への質問と対応させた。帰国後の仕事や生活については、デカセギの成果、現在の就業状況、帰国後の子どもの様子、子どもの進学や将来への期待を問い、最後に、再デカセギの意志とそうのように考える理由、デカセギ希望者へのアドバイスなどをたずねた。

以下においては、このような手続きを経て得られたデータを使用する。考察はデカセギの流れ（日本へ行く→働く→帰国する）にそっておこない、それぞれのステージについて、留守家族とデカセギ帰国者（あるいは留守家族の語るデカセギ中の家族）がそれぞれどのような状況にあるのか・

あったのかをみていく。そのなかで、両者の生活と彼らが築いている家族関係を把握し、そこに明示的あるいは非・明示的に存在する諸々の思惑や感情（選択、決断、迷い、期待、安心、諦め、など）を探る。これらの検討を通して、留守家族とデカセギ者というトランスナショナルな関係からデカセギを見直し、そこで問題になっている諸点を抽出する。

具体的には、まず本章第2節以下では、デカセギに行くことになった事情、デカセギに行くあるいはデカセギを送り出すにあたっての当事者や家族、周囲の人々の期待や思いを考察する。第3章では、日本におけるデカセギ者の就労状況とブラジルでの留守家族の生活を確認し、トランスナショナルなコミュニケーションの密度や、デカセギがもたらした日本観への影響を考える。第4章では、帰国の契機とデカセギの成果、帰国後の生活への展望と現実、再デカセギをめぐる態度をみる。最後に第5章では、留守家族とデカセギ帰国者（あるいは留守家族の語るデカセギ中の家族）をめぐって重要と思われる論点あるいは具体的検討課題を整理して、まとめとする。

第2節 基本属性とデカセギ状況

はじめに、基本属性を示す。対象者は54人である。複数の対象者が同一世帯に属しているのはごくわずかなケースしかないため、2006年における全世帯数を130戸前後と考えるなら、デカセギ経験者（帰国者および現在デカセギ中の者）を含む世帯は約4割ということになる。サンパウロ人文科学研究所『日系社会実態調査報告書』（以下、2002年「報告書」）における当該比率はおよそ3割であることから（サンパウロ人文科学研究所 2002：40）、デカセギがより浸透しつつあることがわかる。現在デカセギ中の家族がいると回答した34人についてみると、子世代を送り出しているのが29人、そのうち、23人が息子を、17人が娘をデカセギに送り出している。複数の子どもをデカセギに送り出しているのは18人であった。

では、対象者はどのような人々なのだろうか。留守家族は43人、デカセギ帰国者は27人である。留守家族とデカセギ帰国者の合計が対象者より多いのは、デカセギ経験をもつ留守家族がいるためである。彼らにはそれぞれの立場からデカセギを語るよう求めた。留守家族、デカセギ帰国者それぞれの年齢構成、性別、有配偶者率、世代構成、教育歴は以下の表の通りである（表2-1～10）。

まず、留守家族についてみてみよう。留守家族は50代以上が92.1%にのぼり、高齢化が進んでいる。中心をなすのは60～70代であり、この年齢帯だけで7割に達する。性別では、男性が約7割である。8割は有配偶者であるが、女性のなかには、配偶者と死別した者もいる。世代構成をみると、一世が3割、二世が5割である。最終学歴は「小学校」「中学校」あわせて7割である。農業およびその周辺の仕事（農地の貸地など）に就く者が過半数を超える。

一方、デカセギ帰国者は、30代が中心で、20代、40代をあわせると6割以上となる。20～40代の合計が6割に達するのは2002年「報告書」における調査結果と同じである（サンパウロ人文科学研究所 2002：85）。ただし、年代毎にみると、「報告書」では20代が4割であるのに対して、本調査では30代が4割となっており、上の年代にシフトした構成となっている。性別はここでも男性が7割を占める。デカセギ時には、1回目では7割弱、2回目では約5割が独身で、8割が単身であった。子ども帯同のデカセギを経験した者は2人、子どもをブラジルに残してのデカセギを経験した者は4人のみである。現在の有配偶者率は4割ほどで、9人が子どもをもつ。配偶者と離別または死別が2割いるが、年齢がまだ若いことから死別ではなく離別が多いことが予想され、実態として

の未婚独身者の比率はもう少し下がることも考えられる。

世代構成をみると、二世が半数を占める点は留守家族と変わらないが、一世は1割に過ぎず、そのかわりに三世が3割に増える。世代比率は2002年「報告書」におけるものと変わらない。教育歴をみると、高校以上の教育を受けた者が7割である。大学・専門学校・大学院の卒業者に限ると3割という数字であり、親世代である留守家族に比較すると、圧倒的な高学歴となっていることがわかる。

留守家族の続柄は、先に述べたように、デカセギ帰国者の親世代が中心である。従って、デカセギ帰国者は、一家の唯一の稼ぎ手としてデカセギに送り出されたのではなく、それは現在のデカセギ者についても同様である。その意味では、留守家族のデカセギ者への態度には、自立した一人の大人としての我が子への対応という側面がある。

ここで、デカセギ前の生活水準に関する認識（表2-11～12）を確認しよう。どの水準の認識がデカセギと結びつくのだろうか。留守家族は、「中の中」5割弱、「中の下」3割弱であるが、「中の上」「上」も計2割を占める。「中の下」との回答者は、「ブラジル社会のなかでは上、でも、日系人社会のなかでは下かもしれない」（25）、「一番下とはいえない」（13）、「不自由と思ったことはあまりない。（しかし）ここ10年ほど、暮らしがだんだんと難しくなってきた」（3）、「車は持っているけれど、やっと買ったものだし」（4）といった説明を加えており、「上でも下でもなく、なおかつ下り坂」である現況をこの語で表現しているようである。「中の中」については「雇用者がたくさんいたから」「文化階級は高い。学校は出ていないが本をたくさん読む」（1）、「中の上」については「大きな土地があるから」（54）といった発言があり、所有地の大きさと教養レベルがその根拠とされている。これに対して、デカセギ帰国者は、「中の上」「上」がほとんどゼロに近く、「中の中」6割弱、「中の下」3割超であり、やや下方にシフトしている。留守家族の方が生活水準についての自己評価が若干高い傾向があるとはいえ、留守家族、デカセギ帰国者ともに中程度との認識が最多となっている²²⁾。

さて、デカセギ留守家族の具体的イメージをつかむために、インタビューのデータを加えて、現在のデカセギ状況を家族構成、デカセギ史なども含めて家族単位にまとめてみよう。一部を以下に列挙する。

デカセギ状況（一部）

対象者番号	種類	現在の同居家族（子どもの数と性別）	デカセギ者・デカセギ帰国者について 〔帰〕は帰国者、それ以外はデカセギ中 未婚・既婚単身・帯同（家族帯同）はデカセギ時、ただし（現） を冠したものは現時点	留守家族の職業	その他 年齢、日系何世など
(1)	留守家族	本人=夫、妻 (娘3息子1)	長女:1996~2005, 2005~現在、神奈川でヘルパー、帯同 次女:1989~2005に5回。東京の弁当屋、未婚 長男:1999~2003, 2003~現在、東京の部品工場、未婚 三女〔帰〕:1992~1994、(現)既婚	苗木販売業(長男に継がせたい)	77歳(一世)
(2)	留守家族	本人=夫、妻 (息子4)	次男:1992~2001, 2002~現在、コンピュータソフト開発、帯同 三男:2002~現在、建築技師、帯同	農地を売却し、農業からは引退	67歳(二世)、長男と四男は歯科医
(3)	留守家族	本人=夫、妻、長男の妻と孫3 (息子3娘1)	長男:2005~現在、既婚単身、静岡のラーメン屋 次男:1993~1998, 2004~現在、岐阜でコンピュータ部品製造、帯同 長女〔帰〕:1993~1998、弁当屋、現在は長女の夫がデカセギ中	フェーラをしていが10年前から農業	69歳(一世)、三男がスザノ市在住、デカセギ前職はフェーラ
(4)	留守家族	本人=夫、妻、三男、四男(息子4)	長男:1995~現在、単身で行き日本で結婚 次男:1992~現在、1995一時帰国、単身で行き日本で結婚	フェーラ	62歳(一世)、デカセギ前職は長男・次男ともフェーラ

(5)	留守家族 本人もデカセギ経験者	本人=夫、妻、娘2 (息子3娘3)	本人 [帰] と長男:1991~1993、電器部品製造のライン 長女 [帰]:1992~1994、所沢、弁当屋 長男:1991~現在、徳島 次男:1993~現在、徳島 次女 [帰]:2003~2006、姫路、かまぼこ屋 三男:2005~現在、姫路、かまぼこ屋 三女 [帰]:2004~2005、姫路、かまぼこ屋 妻 [帰]:2005~2006	苗木栽培・販売	61歳 (二世)、30年くらい前までは養鶏、その後20年トラック運転手
(7)	留守家族	本人=夫、妻、子ども2、弟 (独身)	弟 [帰]:1990~1996、1996~1997	野菜卸売	38歳 (三世)、農地はひとに譲った
(9)	留守家族 本人もデカセギ経験者	本人=夫、妻 (息子2娘1)	長女:2003~現在 長男:1999~現在、結婚のため一時帰国中 次男:1998~現在 本人 [帰]:1989.3~1989.12、1990.4~1991.4、既婚単身	1989までは農業、現在は土地を弟に任せ野菜卸売	58歳 (一世)
(10)	留守家族	本人=妻、夫と死別、長男 (息子3)	長男 [帰]:未婚、(現) 未婚 次男:1993~10ヶ月間は茨城県の機械部品加工、1994~1996は栃木のコンピュータ部品製造、1996~は愛知県でフォークリフト運転、帯同 三男:1996~10ヶ月間は神戸市のビルの清掃・管理、1997~2000栃木県のコンピュータ部品製造、2001~三重県のタイヤメーカー、未婚	商店・Bar 自営	62歳 (一世)
(12)	留守家族 本人もデカセギ経験者	本人=夫、妻、子ども2、義母	本人 [帰]:1990~1996、富士市で自動車メーカーの下請け2年、山梨のメッキ工場、日本で妻と知り合い結婚、1992年に妻が帰国、本人は1996帰国 本人の弟と妹が栃木と浜松で1996からデカセギ中	帰国後は農業を手伝い、1年間職探し、今はいとこの店で働く	37歳 (二世)、デカセギ前職はベアリングメーカー
(13)	留守家族	本人=夫、妻、息子 (息子1娘2)	次女:大学受験うまくゆかずデカセギへ。2年4ヶ月、ソーラーシステムの組み立てライン、未婚 長女 [帰]:電機メーカーで部品チェック、未婚、職探し中	苗木栽培・販売	64歳 (二世)、息子和家業
(14)	留守家族	本人=夫、妻、長男一家 (孫2) (息子1娘5)	長男 [帰]:1990~1991	農業	78歳 (一世)
(17)	留守家族 本人もデカセギ経験者	本人=夫、妻、父、母 (息子5)	本人 [帰]:1989に半年間跡物の会社、1990に半年間住宅設備の会社、帯同 長男:1990に父に同行、帰国後1992に大学中退して1回目と同じ会社、現在は茨城で友人とコンピュータ関係の仕事立ち上げる準備、二世と日本で結婚 次男 [帰]:1回目は1997~、現在は福博在住 三男 [帰]:大学中退して1994~1996埼玉県電機メーカー 現在はモジで電気工事の会社、(現)既婚 四男:1999~2000山梨県、2002~愛知県自動車部品製造 五男:2005~愛知県のシートベルトの工場	ヒバの栽培・販売	61歳 (二世)、デカセギ前職はヒバ(クリスマスツリー)の栽培・販売
(19)	留守家族	本人=夫、妻 (息子1娘3)	長男:1989~現在、2回一時帰国、帯同 長女:2回行っている、2回目は6年前から 次女:日本人と結婚して日本在住	フェーラを引退して野菜栽培卸	73歳 (二世)、三女は近隣在住
(22)	留守家族 妻はデカセギ経験者	本人=夫、妻 (再婚) (先妻との間に7、現妻には息子1)	現妻の息子:1992~現在、一度も帰国せず、未婚 先妻との四女 [帰]:1990年代初め~1995一時帰国~2001、帯同 先妻との六女:日本人と結婚して平塚在住 現妻 [帰]:1990~1992、東京と名古屋の病院、一時帰国して再び日本へ行き、半年で帰国	理髪業は廃業	74歳 (一世)
(24)	留守家族	本人=妻、夫と死別、長男 (息子1娘3)	長男 [帰]:高卒後1991~1993、未婚、(現) 未婚、帰国後は薬局後継のための勉強中	亡夫は薬局経営	71歳 (二世)、長女は医師、次女は薬剤師、三女は市役所勤務
(25)	留守家族 本人もデカセギ経験者	本人=夫、長女、孫2 (息子2娘1)	次男:1990~現在、1回も一時帰国せず、群馬県大泉の電機メーカーを経て溶接の仕事、離婚 (子あり) 妻:1990~現在、群馬県大泉の電機メーカー、横浜や長野の病院で老人の世話 長女 [帰]:1990~2002、2回ほど一時帰国、離婚 (子あり)、現在は化粧品会社勤務 本人 [帰]:1989~1996、群馬県大泉の建材会社、2年に1回帰国	フェーラ	69歳 (一世)、長男はクリチバで医師、日本留学の経験あり
(27)	留守家族 本人もデカセギ経験者	本人=妻、夫と死別、長男一家 (孫2) (息子1娘1)	本人 [帰]:1991.8~1992.4、(28) とヘルパー 長女 [帰]:大学のスタッフやめて母親に同行、布団工場、未婚、帰国後はサンパウロ大学勤務、現在博士課程に通う	農業	73歳 (二世)、クレソン栽培をしていたが今は土地を昔からいるブラジル人に使わせている。長男は医師
(28)	留守家族 本人もデカセギ経験者	本人=妻、夫と死別、次男一家 (孫2) (息子2娘1)	長男:1989から9ヶ月、2回目は4年間。3回目は帯同で3年目、福井県コンピュータ部品製造 長女 [帰]:高卒後すぐ静岡のアルミ部品製造工場、自動車メーカー、1年8ヶ月、未婚 本人 [帰]:53歳のとき東京で病院のヘルパーとして9ヶ月間、姉に同行	キノコ栽培卸	67歳 (二世)

(29)	留守家族	本人=妻、夫と死別、息子一家(孫2)(息子1娘2)	息子【帰】:15年前、名古屋の自動車メーカー、1年8ヶ月帰国後は病院で薬剤師 娘2人:息子と同時期に同じところで働き同時期帰国。2人とも5年前から愛知県の自動車部品製造、帯同	亡夫は野菜卸	74歳(二世)
(31)	留守家族	本人=妻、夫と死別(息子3)	長男:2006年で6年目、2006年に一時帰国、幹旋社社で通訳の仕事、帯同 三男:2006年で8年目、携帯電話のチェックの仕事、未婚	卵卸	61歳(二世)、在ブラジルの息子と家業
(32)	留守家族	本人=夫、妻、長男一家と孫3(息子4娘2)	三男:大学卒業後研修で群馬へ行くが、帰国後仕事が見つからず、新聞社を経てデカセギ。2006年で8年目、未婚 四男:3年前から群馬の精密工業、未婚 長女:造園設計の研修後、そこで働き、日本人と結婚して仙台在住 次女:デカセギ同僚と結婚して群馬在住 次男【帰】:デカセギ帰国後ブラジルで結婚	造園業	77歳(二世)、長男、次男とともに家業。長女、次女のために日本に家建てた
(34)	留守家族	本人=夫、妻、娘2、孫2(娘2)	長女・次女【帰】:1997.8~12、長野県のレストランや工場、1998~1999は滋賀県近江八幡の工場、未婚、(現)未婚	養鶏業	62歳(一世)
(38)	留守家族 本人もデカセギ経験者	本人=夫、妻、夫の両親	本人【帰】:1回目は1995~1998、2回目は2003~2005、愛知県、2回目は帯同 弟が現在デカセギ中	農業	30歳(三世)、デカセギ前職は農業
(46)	留守家族	本人=夫、妻(息子4娘4)	長女、次男、三男、四男、四女:同じ鉄工会社、全員日本で結婚し、日本で家建てた。 長男【帰】:1991~1994デカセギ、既婚単身、帰国後は水耕栽培の仕事	野菜栽培	75歳(二世)、長男のデカセギ前職はフェーラ
(54)	留守家族	本人=妻、夫、息子(息子1娘3)	息子【帰】:2005.6~2006.8、横浜のタイヤ工場、未婚、帰国後はスザノで販売業 末娘:17歳から2年間ホームヘルパー、2年前に帯同で日本へ	農業	61歳(二世)、現在は土地の大部分を貸している

表2-1 年齢構成(留守家族) (単位:人、%)

	30代	40代	50代	60代	70代	合計
実数	3	0	7	17	11	38
構成比	7.9	0.0	18.4	44.8	28.9	100.0

注)以下、全表において不明・無回答を除く。
資料:実態調査より作成。

表2-2 年齢構成(デカセギ帰国者) (単位:人、%)

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	合計
実数	3	9	3	1	6	2	24
構成比	12.5	37.5	12.5	4.2	25.0	8.3	100.0

表2-3 性別(留守家族) (単位:人、%)

	男性	女性	合計
実数	27	10	37
構成比	73.0	27.0	100.0

表2-4 性別(デカセギ帰国者) (単位:人、%)

	男性	女性	合計
実数	19	6	25
構成比	76.0	24.0	100.0

表2-5 有配偶者率(留守家族) (単位:人、%)

	独身	既婚	離別・死別	合計
実数	1	31	6	38
構成比	2.6	81.6	15.8	100.0

表2-6 有配偶者率(デカセギ帰国者) (単位:人、%)

	独身	既婚	離別・死別	合計
実数	7	11	8	26
構成比	26.9	42.3	30.8	100.0

表2-7 世代構成（留守家族）（単位：人、％）

	一世	二世	三世	合計
実数	11	18	7	36
構成比	30.6	50.0	19.4	100.0

表2-8 世代構成（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

	一世	二世	三世	日系ではない	合計
実数	3	15	8	1	27
構成比	11.1	55.6	29.6	3.7	100.0

表2-9 教育歴（留守家族）（単位：人、％）

	小学校	中学校	高校	専門学校	大学	大学院	その他	合計
実数	18	8	7	0	1	0	3	37
構成比	48.6	21.6	18.9	0.0	2.7	0.0	8.1	100.0

表2-10 教育歴（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

	小学校	中学校	高校	専門学校	大学	大学院	その他	合計
実数	5	2	9	3	3	1	0	23
構成比	21.7	8.7	39.1	13.0	13.0	4.3	0.0	100.0

表2-11 家族がデカセギに行く前あなたはどの階級に属していたと思うか（留守家族）（単位：人、％）

	上	中の上	中の中	中の下	下	合計
実数	3	5	19	11	2	40
構成比	7.5	12.5	47.5	27.5	5.0	100.0

表2-12 デカセギに行く前あなたはどの階級に属していたと思うか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

	上	中の上	中の中	中の下	下	合計
実数	0	1	14	8	1	24
構成比	0.0	4.2	58.3	33.3	4.2	100.0

第3節 デカセギの目的と留守家族の賛否

では、上で示した基本属性とデカセギ状況を念頭に、デカセギが選択されるに至った経緯をみてみよう。デカセギ帰国者のデカセギ前の職業をみると、最長職も直前職も、農業4割、学生・生徒3割、自営業2割という構成である（表2-13）。直前職に対する不満がデカセギを決意させたのだろうか。その旨問うたところ、賃金などへの不満があったと回答しているのは5割に満たず、36.8％は「不満なし」であった（表2-14）。それでも結果的にデカセギが選択されたということは、ブラジルの経済不況の影がそれだけ深刻に受けとめられたためであろう。農業や自営業の先行き不安、学校卒業後の職探しやマッチングへの不安などがデカセギに押し出す力となったと思われる。しかし、それだけだろうか。

デカセギの第1の目的が経済的なものであることは、これまで多くの先行研究が指摘してきたところである。デカセギを経験している者の現地収入は相対的に低く、それがデカセギのプッシュ要因のひとつになっているといわれてきた。デカセギの目的としては、「不動産を買うため」「日本を知るため」「事業資金を貯めるため」「生活費を貯めるため」「教育資金を貯めるため」などが挙げられてきた。「日本を知るため」以外は経済的目的である。

福博村の場合はどうであろうか。デカセギの目的が経済的なものである点においては福博村も例外ではないだろう。しかしながら、デカセギの目的がどのように説明され、何を強調しながら語る

れるのが重要である。そこで、デカセギの事情をデカセギ当事者に比して冷静かつ客観的にとらえていると思われる留守家族に対して、デカセギへの賛否を問うた。「反対する理由がみつからない」という意味での消極的賛成も含めると、賛成が7割超を占めるという結果であった(表2-15)が、賛成意見として語られたのは次のようなことである。なお、文中に掲げられるインタビューデータ末尾に添付された番号はいずれも対象者番号である。

デカセギに賛成する理由〈留守家族〉

◇日本を知るため

「親戚の話聞いて日本見てみたくなかった。勉強になった」(27)

「日本をみて日本を知るの嬉しかった。働くというより経験。私のお父さん、お母さん、日本なので。日本がよくなければブラジルがあるし、ブラジルがだめなら日本がある」(31)

「大学に行かないというので、日本を見ておいでと父が勧めた」(22)

「亡き夫は勉強しに行ってこいと言っていた」「息子がデカセギ行きたいと言ったとき、寂しかったが反対はしなかった。学歴に見合った仕事ない。日本をみたい(と言うので)」(29)

「子ども達も日本を知り尽くしている。進んだ国に行かないと取り残されてしまう。次男は日本の技術を身につけるため、子どもに日本を体験させるため。三男は日本が好きで、学生時代から長期休暇には日本に行っていた。子どもに日本を体験させるため」(2)

「ちょっとだけ行ってくると言ったから。自分も年だから。まだ娘もいたし、行ってこいという気持ち」(19)

「自分で行きたいと言ったから」(37)

◇稼ぐため・ブラジルの生活条件がよくないため

「町で娘が2回続けて強盗にあった。それでブラジルがイヤになった。金儲けのためではなくブラジルに嫌気」(1)

「行くなら行った方がいい。仕事の関係で」(4)

「大学へいくお金を稼ぐためで、(自分にはお金を)出せなかったので、仕方なく賛成」(13)

「賛成ではないが行きたいなら行けという感じ。高校を出て仕事を探していた。というよりニートみたいな感じ。日本に行ったら少しは苦勞するかなと思った」(34)

「暮らしがよくなかったから」(10)

「道を切り開くのはよいこと」(28)

「反対という訳ではない。ブラジルでなかなかいい仕事がない」(3)

一方、反対意見としては次のような発言がきかれた。

デカセギに反対する理由〈留守家族〉

◇屈辱的

「やだなあ、卑屈になるので。仕事みつからない(からしょうがない)。自分の仕事の規模が大きくなれば一緒にできる。でも、経済状況として難しかった(のでデカセギに行かざるをえなかった)」(32)

◇日本は遠すぎる

「一人で遠いところへ行って苦勞しなくても」(7)

「若かったから心配した。安心しなかった」(24)

このデカセギへの賛否は同一人において必ずしも一貫しているわけではない。例えば、親が娘と息子に対して異なる態度を示す場合がみられた(54)。息子のデカセギについては、「息子はわがままだったので少しもまれてきた方がいいと思った。勉強も仕事もひとのためだからとは言ってきた」と賛成し、娘のデカセギについては、「娘が最初行ったとき(高卒後)は、思いがけないことだったし、奉公にやるつもりだったので(反対した)」「(娘は)せっかくないい学校を出たのに、今更日本に行っても」と反対するというものである。息子については、その人生を親がコントロールすることの難しさゆえに、ある程度厳しい環境下で経験を積んで力をつけることを奨励する一方で、娘については、息子に比べればまだ自らの保護下にあるとの認識ゆえに、デカセギさせずに手許においておきたいという感情が働いているようである。

さて、デカセギに対する賛否の発言はこのようにさまざまであるが、これら留守家族の語りをみると、そこにはふたつの要素が含まれることに気づくだろう。即ち、ひとつは、デカセギを経済的手段としてとらえようとする視点である。これは経済的理由でデカセギすることを率直に認めるものである。そこにおいて、デカセギは生活程度上昇計画・老後計画のための手段としてとらえられる。

もうひとつは、日本を見聞する機会としての位置づけを強調しようとするものである。これは、働きながら日本を知ることが重視する視点である。2002年「報告書」をみても、4割がデカセギ目的として「日本を知る」をあげているが、本調査でも、留守家族の多くが何らかの言い回しで、日本行きが経済的理由だけではないことを語っている。このことは即ち、経済的目的を第一にあげることに對して何らかの心理的抵抗があることを思わせる。それなりの暮らし向きが維持されているとの自負がある場合、その子どもには「社会見学」としての日本行きが勧められるということである。

例えば、生活水準を「上」と回答したある留守家族(二世)(32)にとって、日本は稼ぎ場ではなく「心のふるさとのようなもの」である。デカセギとは、家族に自分のルーツをみせるための旅であり、そのことは、自分のこれまでの生き方を家族にあらためて承認させるという意味を帯びている。子どもを日本に行かせたい、自分の親の文化を見せたい、日本で働くのもいいだろう、でも、自分は日本には行かない、子どもも日本を経験したら帰ってくればよい、日本の経験を親子で共有することに意義がある、ということであろうと思われる。デカセギ者の多くを占める子世代がお金第一であることを隠さず、デカセギに込み入った理由付けを必要としないのとは対照的である。

表2-13 デカセギ前の最長職(直前職でもある)(デカセギ帰国者) (単位:人、%)

	公務員	教員	会社管理職	事務営業	技術職	工員	銀行員	医師	看護師	研究職	農業	店員販売員	自営業	主婦	失業	学生生徒	その他	合計
実数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	5	0	0	8	1	24
構成比	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	41.7	0.0	20.8	0.0	0.0	33.3	4.2	100.0

表2-14 デカセギ直前職について不満あったか(デカセギ帰国者) (単位:人、%)

	賃金	労働時間	仕事の内容	仕事の量	仕事の環境	休憩時間の長さや休日数	人間関係	全体として	不満なし	失業中だった	合計
実数	5	0	1	0	0	1	1	1	7	3	19
構成比	26.3	0.0	5.3	0.0	0.0	5.3	5.3	5.3	36.8	14.8	100.0

表2-15 デカセギに賛成だったか（留守家族） (単位：人、%)

	賛成	反対	どちらでもない	合計
実数	31	7	4	42
構成比	73.8	16.7	9.5	100.0

第4節 デカセギに対する周囲の態度

では、留守家族からみて、家族の他のメンバーや家族の周囲の人々はデカセギについてどのような態度を示しているのだろうか。

はじめに、家族の反応をみてみよう（表2-16）。7割が「外国での苦労への労り」と「日本での生活への関心」を示すが、「お金」や「技術習得」への期待を「かなり感じる」「やや感じる」の合計は約5割にとどまる。留守家族において「お金を持ち帰ってほしい」という期待はそれほど高くない。これは、デカセギ帰国者の話などから情報を得て、デカセギの経済的成果がそれほど期待できないことを既に知っているせいでもあろう。代わりに、社会経験としての側面が強調されているところがある。日本での仕事がデカセギ前職や学校で学んだ専門分野と適合することはほとんどないということは、おそらく周知のことであり、その意味においては、さらなる技術習得への期待はきかれなかった。しかし、それとは別の何か、帰国後役に立ちそうな何かを身につけてほしいとの願望は捨てられてはいない。日本人とのつきあいについては、仕事をするうえで彼らとの関係が支障とならないようにふるまうことが期待されるだけで、友人をつくり、交流を深めることまでは求められていない。日本を見に行くことや日本での生活を体験することに積極的な価値が与えられているにもかかわらず、日本人とのつきあいを勧める声はきかれぬのである。「日本語わかるが生活環境は違う」(13)ということばに表れているように、実際に日本人とつきあうことの難しさがあらかじめ認識されているからであろうと思われる。

家族がデカセギに対して示す態度は、このように、デカセギに行く者に過大な期待を負わせるようなものではない。むしろ、ある種の諦めを伴った見守り的な態度に見える。これは、留守家族の多くがデカセギ者の親であること、デカセギ者に経済的に依存する程度が低いことによるとと思われる。

デカセギに対する態度〈留守家族〉

「次男は帰ってこないと言っている。帰ってこないという前提ならいいが、ポルトガル語教えたなら私立。ひとり5万かかる。今は日本の公立の学校に行っている」(25)

「デカセギ友達がたくさんいる。日本で知り合ったのではなく、ブラジルでの仲よしで日本で再び会ってつきあっている。

日本人とはつきあっていない。日本語必要ないくらい。姪や甥ともしょっちゅう会って遊んでいる」(31)

「帰ってこいとは言えない。どうもこうもできない」(29)

母「技術を身につけてほしい」父「高学歴の人の仕事がない。独立してできる仕事がないとだめ。ある程度技術ないとだめ」(22)

「ブラジルの経済状態悪いので反対できない。仕事ないから仕方ない」(32)

「できることなら稼いでほしかった。お金の価値を知るために。ニートになってしまうくらいならお金がない方がまだいいのかも」「もっと日本の文化に関心をもってほしかった」(34)

「一度日本を見ておいで。特に最初の頃」(28)

「働く時間が長く残業が多い」(のはかなり心配)。「食べ物はよくなってブラジル食も食べられるし特に何も感じていない」(54)

「日本語わかるが生活環境は違う」(13)

「苦勞してもらいたい」(2)

「貯めてきてもらわないと。家も完成していないし」技術習得については「何をやってきても(役立たない)。(長男は)今ラーメン屋で働いている。それはこちらでは活かしようがない」(3)

「いいんだろうねえ、あまり不平を言わないから」(4)

「勉強してほしいけど、勉強するヒマはなかったらしい」(24)

続いて、留守家族からみた周囲の人々のデカセギへの反応をみると(表2-17)、家族の場合と比べてデカセギへの関心度は低い傾向にある。お金、技術習得、外国での苦勞、日本での生活などすべてに関して、「あてはまる」「ややあてはまる」の合計が3～4割台という数字である。下にあげたことばをみても、「干渉しない」「何も言わない」「とやかく言わない」といった無関心的、あるいは、遠慮的な態度が目に残る。これは、ひとつには、デカセギが珍しい現象ではないために、人々の関心を呼ぶ話題ではなくなっているからであろう。「もう情報はまわっているから」(13)ということばが示す通りである。もうひとつは、デカセギ者がいづれながしかの金銭を持ち帰ったときに犯罪の被害者とならぬよう、デカセギが意図的に伏せられることもあるからと考えられる。「(近隣の)デカセギのことは、知っていても話題にしない。何があるかわからないから」(31)との発言がまさにそれである。このように、家族周辺の人々がデカセギに示す態度は、その真意はともあれ、総じて控えめなものといえる。

デカセギに対する反応〈周囲の人々〉

「みんな行ってるから関心ない。給料の平均もわかるしね」(25)

「周りの人は興味なし。何も言わない。日本に行ってよかったねと言う人はいるけど」(31)

「まわりの人は干渉しない」「3、4世には祖父母の国に対する興味がある。これが強い」(32)

「帰ってきた人は皆無口になる。泥棒が多いのでデカセギに行くことは隠している。帰ってくるとすぐに泥棒に入られる」(54)

「ただ、よく聞くのは、娘が行っていると言うと、「今のブラジルなら仕方ない」(との反応がある)」「もう情報はまわっているから」「そこ(技術習得)までいけばたいしたものだが、往々にしてそうはいかない」(13)

「人のことをとやかく言わない。あまり関心はなさそう」「聞かれることはある」(2)

「デカセギに行く人の関心が変わった。最初はコソコソと行っていた」(1)

「あまり皆関心ないのではないか。ほとんどの家からデカセギに行っているのだから」(3)

「別に、どうってことはないのでは。かわいそうに日本に行って、ということもないだろう」「どうしているか、ぐらいいきくけれど」(4)

「デカセギがあたりまえで珍しくないから(関心もたれない)」「(昔は)飛行場へは正装して行っていた。今は半ズボン、サンダル」(19)

「(亡くなった主人の)親戚も日本に行っているのだから、珍しいことではない。(主人の)きょうだい7人とその子どもたち、日本の方が多い」(24)

「関心薄い。皆行っているから気にしていない」(37)

表2-16 家族の他の成員はデカセギをどのように考えているようにみえるか（留守家族）（単位：人、％）

		かなり感じる	やや感じる	あまり感じない	殆ど感じない	合計
お金への期待	実数	12	6	12	8	38
	構成比	31.6	15.8	31.6	21.1	100.0
技術習得への期待	実数	14	7	7	9	37
	構成比	37.8	18.9	18.9	24.3	100.0
外国での苦勞への勞り	実数	7	9	1	4	21
	構成比	33.3	42.9	4.8	19	100.0
日本での生活への関心	実数	13	12	3	6	34
	構成比	38.2	35.3	8.8	17.6	100.0
あまり関心なさそう	実数	3	3	11	6	23
	構成比	13	13	47.8	26.1	100.0

表2-17 デカセギに対する周囲の人々の反応はどのようなものか（留守家族）（単位：人、％）

		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	合計
お金への関心・羨望	実数	10	3	11	10	34
	構成比	29.4	8.8	32.4	29.4	100
技術習得への関心羨望	実数	6	7	11	8	32
	構成比	18.8	21.9	34.4	25	100
デカセギ情報への関心	実数	3	6	9	10	28
	構成比	10.7	21.4	32.1	35.7	100
外国での苦勞への同情	実数	6	6	8	9	29
	構成比	20.7	20.7	27.6	31	100
日本での生活への関心	実数	4	6	7	10	27
	構成比	14.8	22.2	25.9	37	100
日本文化への関心	実数	7	5	6	9	27
	構成比	25.9	18.5	22.2	33.3	100
あまり関心なさそう	実数	5	1	10	5	21
	構成比	23.8	4.8	47.6	23.8	100

第3章 デカセギ者をつながる/留守家族をつながる

留守家族の多くはデカセギに関して基本的には賛成する。しかしながら、このことは、留守家族がデカセギについて何も考えず、何も不安に思わないということの意味しない。このトランスナショナルな家族関係は、外国生活の詳細がわからないことへのもどかしさ、家族を外国に送り出すことへの思い、それもデカセギという形で日本へ行くことへの期待と不安あるいは諦め、デカセギ者不在の間の留守家族の生活不安、遠く離れて暮らさなければならないゆえの心配・悩み、あるいはデカセギ者が暮らす日本という国への好悪など、さまざまな思慮と感情をもたらすからである。そうした諸々の思いや感情が交錯するのはデカセギ者においても同様であると思われ、彼らもまた、デカセギという自分の選択を、留守家族との関係のなかで見つめざるをえない。

そこで、以下においては、留守家族とデカセギ者とのつながりを上記の諸点に関して整理していく。

第1節 日本でのデカセギ生活

まず、日本での就労状況を確認する。はじめに、デカセギ経験回数をみると、2回が最多で6割を占める。1回が3割弱で、デカセギを3回経験しているのは1割ほどであった（表3-1）。2002年

「報告書」では、デカセギ経験1回が6割、2回が3割、3回は4.6%となっていることから、複数回のデカセギ経験者が増加しつつあることは明らかである（サンパウロ人文科学研究所 2002：86）。この数値の動きにデカセギのリピーター化傾向をみてとることができよう。デカセギは1990年くらいから徐々に開始され、多くは1～2年毎に帰国するというパターンであるが、5～6年続けて滞日した経験をもつ者も8人いる。この滞日期間は、現在のデカセギ者においては長期化しており、1回の滞日が3年以上であるケースが主流になってきている。日本での就労地は、帰国者、現デカセギ者あわせると、東京都、神奈川県、群馬県、長野県、三重県、愛知県、福井県、静岡県、岐阜県、山梨県、茨城県、福岡県など広範囲にわたる。

日本における就労について指摘されることは3点ある。1点目は、先行研究においても指摘されてきたように、製造業が圧倒的に多いことである。全体の8割にのぼる（表3-2）。電機・自動車関連製品の生産・加工が大多数を占めるが（7割）、コンピュータなどの精密機械、ソーラーシステム、建設機械、エレベータなどの部品生産・加工もある。デカセギ前の職業や学校で学んだ知識・技術を活かせるような仕事とはいえない。たびたび職場を移ることはめずらしいことではなく、デカセギに行った家族が現在どこでどのような仕事をしているのかを十分に把握していない留守家族も多い。デカセギに行った子ども（きょうだい5人）が10年以上同じ会社で働き、現在は、きょうだい5人とその配偶者および孫の合計12人がそこで一緒に仕事をしているというケース（46）もあるが、こうした働き方は極めてまれといってよい。

しかしながら、帰国者だけではなく、現在のデカセギ者の仕事もあわせて検討するならば、わずかながら、コンピュータソフト開発や建築（2）、建材関係（25）、造園設計（32）の会社に職を得た者もあり、これらは、それぞれ、大学での専攻、デカセギ前職（大工）、家業（造園業）に直接つながる職業に恵まれた珍しいケースといえるだろう。この他、日本語通訳、弁当屋、ラーメン屋、布団工場、フォークリフトの運転手が各1ケースあった。

2点目は、「病院の家政婦」「病院のヘルパー」という女性のデカセギ職の存在である。若い世代のデカセギが多いなかで、この仕事の経験者3人、(25)の妻、(27)、(28)の仕事開始時の年齢は50代である。仕事の内容は、(25)の妻の場合は、老人の世話、(27)(28)の場合は、病院職員の食事づくりや、その他細々とした雑用をすることであった。この「病院の家政婦」「病院のヘルパー」とは留守家族やデカセギ帰国者当人が用いた呼称であり、おそらくは、先行研究における「付添婦」という職業分類に該当あるいは準ずるものと思われる。

付添婦はシニア女性のデカセギ職としてはよく知られているものである。老人人口の急速な成長のため、介護サービスへの需要もまた急速に増え、サービス料金を急速に押し上げているといわれる。(27)の日給は1万円であった。付添婦は、しばしば過重な労働であり、住み込みに近い形で長時間拘束されるものの、女性が高給を稼ぐことのできる数少ない職業である。

コガによれば、付添婦の主流である50代以上の女性が日本へ行く場合には、ブラジルでの生活は基本的に安定しており、これからお金を稼いで事業を始めようという目的をもっている者は少なく、むしろ「一度は日本へ行きたい」、あるいは「自分」のお金を稼いで自由に使いたいという目的をもった人の方が多くみられるという（コガ 1997）。

山中も、日系ブラジル人女性のデカセギ現象について、女性の場合は家族に対する責任を第一に考えるので、必ずしも経済効果のみを追求しないと述べる。シニア女性のうち日系二世は、金銭的

な目的よりも個人的な興味や日本へ旅行する機会としてデカセギに行くこと、自らが高齢であること・ブラジルに残してきた家族への心配があることを理由として2年以内に帰国する者が多いこと、デカセギに関する評価は肯定的で、ブラジルへの愛着が増したことなどを指摘している（山中1999）。デカセギ女性にとって、本当の生活場所はブラジルであり、日本は仕事場でしかないということである。このようなシニア女性のデカセギが、二世だけではなく三世においても増えていくのかどうか。また、若い世代においても出現するのかどうか。今後が注目される。

3点目は、日本語能力の重要性である。前出の(28)は二世であるが、日本語に堪能であることが就職の決め手となっている。同僚に差別される経験もしているが、雇い主には大事にされたという。 (31)もまた、はじめは通訳ではなかったが、日本語能力を買われて通訳の仕事を担当することになり、日系労働者の取りまとめや雇い主との関係調整などが主な業務となった。ラインで働くのに比べれば、ややホワイトカラー的な立場に移行している。また、(25)は専門の通訳ではなかったが、雇用側とデカセギ労働者の仲介役や連絡役として重用された。彼は日本の高校を卒業した一世であり、自分は「日本人」と述べる。従って、自身がデカセギ者であるにもかかわらず、「日本人」として「日本語のわからない日系ブラジル人」の面倒をみたのであった。「後から来た人は日系人だったので日本人との間で結構摩擦あった」と語る。

このように、日本語能力をもつことは、職場における地位を高める、もしくは、安定的なものにすることに大いに貢献しているといえる。だからこそ、(13)の娘に対して、斡旋業者は、日本語を修得して通訳になることをすすめるのである。複数の言語を操れるなら、日本における就労の機会確実に増え、就労の条件もよくなることが期待されるからである。

しかし、デカセギ者が二世、三世によって占められるようになった今、達者な日本語を話すことを彼らに期待するのは難しい。日本語能力の重要性について自覚的な留守家族＝親もいないわけではないが、現状認識として日本語が十分話せないことを知っている、という程度のものであり、日本語能力の習得のために対策を講ずる、ということはない。

日本語能力〈デカセギ帰国者〉

「日本に着いたとたん後悔した。とんでもないところ（に来てしまった）。知らない人ばかりで。日本語わかってもらいに、日本語できない人はつらかったと思う。心寂しさ、頼りなさ、しんから寂しかった」(27)

日本語能力〈留守家族〉

「デカセギは自分で決めて手続きした。高校出てすぐくらい。友達と一緒に。日本語はあまりできなかった」(24)

「ポルトガル語の方が得意なので、日本人の従業員との交流が心配だった。ポルトガル語の方が簡単だから、敬語もないし、子どもはみなポルトガル語を聞いたがる」(34)

「家ではできるだけ日本語を使うようにしている。ポルトガル語で返ってくるけれど。長女が昨年半年日本に行っていたが、そのとき日本語をやっておけばよかったと痛感」「日本語とポルトガル語を両方やらねばならない。この顔をしている限りは、いくらブラジル人だと主張しても日本語はしなければならない。子どもについても気をつけていた。「三つ子の魂百まで」だ」(13)

「孫がきれいな日本語を話すようになってきた」「ポルトガル語は親が教えればよい」(2)

これは、例えば、沖縄における台湾人の生き方とは対照的といえるだろう。野入は沖縄の台湾人

のアイデンティティを「戦略的ハイブリディティ」と呼び、高学歴、高い言語能力、相対的な高所得をその特徴であるとする。彼らは来沖当初から富裕であったわけではなく、大学進学、海外留学、自営を尊ぶハビトゥスに支えられて階層上昇してきた（野入 2004）。福博の一世や70代前後の二世も、ほぼ同様にして、ブラジル社会における自分の地位を築いていったと思われる。ただ、大きく異なるのが、言語習得に対する態度である。両者とも、子どもの大学進学には高い優先順位をつけているが、台湾人においては、貿易業に役立つものとして、日本語や中国語はもちろん、外国語（英語や韓国語）の習得にも高い価値がおかれてきた。

これに対して、福博の一世、高齢の二世においては、言語が生きていく上での「武器」として考えられているわけでは必ずしもなかったと思われる。外国語はおろか「母国語」といえる日本語さえも、自らのアイデンティティを支える大切な基盤とされるのみで、職業において通用可能な日本語能力を若い世代に習得させることに熱心であったとはいえない。そのいちばんの理由として考えられるのは、ここで後継対象とされた仕事が農業中心であったことである。日本語能力をもたないことの不都合・不利益を経験する機会が多くはなかったとすれば、その必要性がそれほど深く考えられなかったとしても理解できよう。日本が親や祖父母の故国であることから観念的には近い国と認識され、日本語を話す親族が身近にいれば、日常生活のなかで日本語を習い覚えることが可能であろうと楽観視されたことも影響していると思われる。ただし、現実には、学校教育がポルトガル語でおこなわれる以上、家庭生活において日本語を使う習慣を堅持するなどしない限りは、若い世代に日本語を習得させることは容易ではなく、結局のところ、子ども世代の十分な日本語習得を断念せざるをえなかったというのが実状といえる²³⁾。

従って、デカセギに向き合うスタンスという点に限っていえば、日本語とポルトガル語を習得したうえで、「架け橋」的存在としての意識をもって両国間を行き来するのではない以上、日本とブラジルを往来する近年のデカセギはストレスフルなものであろうと推察される。

表3-1 デカセギの回数（デカセギ帰国者）（単位：人、%）

	1回	2回	3回	合計
実数	6	13	3	22
構成比	27.3	59.1	13.6	100.0

表3-2 これまでのデカセギでの最長職（デカセギ帰国者）（単位：人、%）

	電機・自動車関連製品生産・加工	食品の製造・加工	繊維・衣料品の生産・加工	建設・土木工事	販売店での販売	飲食店などでの調理師	飲食店などでの配膳・皿洗い	ホテル、ビル、工場などで清掃	事務員	エンジニア	その他	合計
実数	17	2	1	2	0	0	0	1	0	0	1	24
構成比	70.8	8.3	4.2	8.3	0.0	0.0	0.0	4.2	0.0	0.0	4.2	100.0

第2節 留守家族の生計とデカセギ者からの送金

ところで、デカセギ者が不在の間、これらの留守家族はどのように生計を維持しているのだろうか。先に確認したように、デカセギの目的が困窮を脱するためのものとは必ずしもいえないとすると、留守家族の生活がデカセギ者の稼ぎにすべて依存するということは考えにくい。そこで、留守家族の生計手段をみると、彼らも自身の収入手段をもち、基本的にその収入によって生活する体制

となっている。下に例を示したように、その収入手段とは主に自営業、具体的には農業および農業周辺の仕事が多くを占める。

留守家族の生計〈留守家族〉

「四男と卵卸業。夫が死んで養鶏業が維持できなくなったので。会社では通いで15~16人を雇う。土地に住まわせているのは3人。10年近く働いている人たち」(31)

「理髪店経営していたが今は閉めた。畑を10年ほどしたが農業ではうまくゆかず、その後は理髪業を30年」(22)

「長男がBarと雑貨屋、自分がビデオ屋。創業35年以上、40年近くやっている店」(10)

「長男・次男と造園業。2代目。苗木生産。30年になる。使用人5、6人。多いときは20人くらい」(32)

「兄と養鶏業」(34)

「キノコ栽培卸。前はアガリクスをつくっていた」(28)

「農業をリタイア。長男はリウマチ専門医。長女は大学のサンパウロ大学の心臓外科のリハビリスタッフ」(27)

「夫とふたりで専業農家。今は土地の多くを人に貸している」(54)

「長男と苗木栽培販売。市場で週2回売っている」(13)

「リタイア。農地を売却しスザノに転居。60年百姓をしてきたし、もう好きなことをしてもいいのではないか。家を売ったり買ったりはしている」(2)

「苗木を育てている。雇用者もいる」(1)

「農業を10年ほど。健康のためと小遣い稼ぎ。それまではフェーラ」(3)

「野菜をつくりフェーラを出す人に売る。その前はフェーラを40年。畑は4.8ヘクタール。自分が使うのはわずかな部分で、ほとんど貸している」(19)

「野菜栽培。土地を貸している。長男は市役所で働く」(43)

「農業」(14)

「福博でも大きな農家だったが、最近はつくっていない。畑は親戚が使っている」(7)

「農業。以前はフェーラ」(37)

自営業は、雇用者として働くのとは異なり、規模を縮小して続けていくことも可能である。従って、無業状態にある者は極めて少ない。農業の場合、特に、自身の高齢化とデカセギによる農業従事者数の減少により、経営規模の縮小が目立つ。土地の大部分を農地として「貸地」している人も少なからずいる。これは、農地として売却したくとも買い手が見つからないという状況も手伝っていることである。周辺では、元の農地が別荘地として小さな区画で切り売りされるケースも増えており、そうした現状を嘆く以下のような声もきかれた。「福博の低いところは湖でとられて半分しか使えない。別のところで百姓続ける人もいるが。別荘にすることもある。農地を売ることもあるがなかなか売れない」「風景も変わり治安も悪くなった。湖ができて20年。州政府は何もしていない。そこに外人が住みついた。あの日、日本人に売ってればよかった」(13)

では、このように生計を維持している留守家族に対して、デカセギ者からの送金ほどのくらいあるのだろうか。留守家族に、送金の有無を問うた結果は表3-3の通りである。それによると、定期・不定期あわせて送金を受け取っている比率は、約4割であり、意外に少ない。送金がある場合は不定期な送金の方が多くなっている。ただし、「送金」という語はしばしば「生活費を送ること」「持ち帰るのではなく送ること」という意味で受け取られており、それらに該当しない場合「送金なし」との答えになってしまっている。「デカセギの稼ぎからお金が渡されること」という大きな意味で

括り直すならば、送金を受けている数はやや増えるものと思われる。

また、この数字は、現在のデカセギ者からの送金も含めての回答であることに注意が必要である。デカセギ帰国者に送金についてたずねると、定期もしくは不定期で送金していた比率は7割にのぼる(表3-4)。これは、留守家族に対してより重い経済的責任を負う者が、結果として、デカセギからの帰国を促されるということだろうか。

送金の使途としては、生活費の足しにするとの回答は少なく、家の建築・修繕といった特別の出費に充てる、あるいは、小遣いとして使うというものが多い。ただし、送金されたものが留守家族の家を新築する費用の一部として使われている場合でも、その家が送金をした本人にいずれ譲り渡される予定となっており、結局のところ、デカセギ者自身の資産形成となっているケースもみられる(31)。これは、一家の稼ぎ手が家族をブラジルに残してデカセギをする場合とは大いに異なる。例えば、(25)(69歳)は、留守家族であると同時にデカセギ者でもあり、「(自分がデカセギしていたとき)長男がブラジルに残っていたので定期的に送金。ひとりで日本にいた間は15万くらい。長男の学費・生活費・留学費すべて自分の送金でまかなった」と述べている。また、(9)(58歳)は毎月5~10万円を送金していた。それに対して、ここでは、家族帯同であれば、そちらの家族が優先されることが考えられ、独身者に対しては、将来のために自身の収入を計画的に使うことが許される。留守家族の経済生活に対して負っているものはこちらの方がはるかに軽い。

このように、デカセギ者が留守家族における家計担当者=世帯主であるかどうかによって、留守家族の送金への期待、送金に対するデカセギ者自身の義務感および送金の遂行状況は大いに異なってくるといえる。子ども世代に対しては、留守家族は、額の多少についての不服を表明することも少なく、送金という行為があることのみで十分に満足しているように思われる(表3-5)。こうした態度は、親が子どもに頼らずとも生きていけるだけの経済的基盤をもっていることに支えられたものである。しかし、同時に、子どもを自立した存在と認め、親として送金を当然視することには慎重であるべきという自制が働いた結果でもあると推察される。後述のように、親世代は子どもに対して、金銭的な貢献というよりは、むしろ、日常の相互援助的な交流としての関係性を望んでいるように見受けられる。加えて、若者のデカセギに対して「社会見学」としての意義が与えられているとすれば、それが期間限定的な日本体験ツアーととらえられている以上、経済的な見返りが期待されることはなおさらに少ないのかもしれない。

ただし、デカセギが現実的には長期化しつつあることも、また、留守家族にとっては周知の事実である。デカセギ者にできるだけ依存せずに堅実に暮らすことをめざし、送金があれば、家族のつながりの確認として喜び、送金がなくても、自力で生活しているという事実安心する。これが留守家族の経済生活における構えとあってよいであろう。

送金を受けとっているか〈留守家族〉(未・既婚の別はデカセギ時)

◇送金あり

「1ヶ月に6万円。足りない。生活費として使う」(25)・・・妻がデカセギ。次男は離婚して子どもあり

「三男から定期的ではないが合計10000REAL。今、家を建てている。いずれ三男(デカセギ中)にやる予定。自分が家の内装・作りつけの家具代を出し、家をつくる人件費は四男が出す。材料費は三男。家の材料費として十分な額」(31)・・・

長男は家族帯同、三男は独身

「定期的ではないが、お小遣い送ってくれる。残りは日本で貯金しているらしいがよく知らない。自分の好きなものを買う。十分足りる」(22)・・・長男は独身

「定期的ではないが送ってくる。兄弟3人で稼いだお金で家を直し、増築した。額は十分だ」(10)・・・次男は家族帯同、三男は独身

「定期的ではないが送金あり。気を遣って送ってくれるのもあるが、帰国後自分が事業するために送金しておく、というのもある。生活のことは頼る気はないので額はまあまあ十分」(32)・・・長女・次女は日本で結婚

「不定期に送金。小遣いを時々送ってくれる。たまにこちらも送ってあげる。助け合っている。額は十分」(28)・・・長男は家族帯同

「不定期に小遣い送ってくれる。自分のものを買う。十分な額」(29)・・・長女・次女とも家族帯同

「1年に1、2回。車や家に使った。うちはうちで別に稼いでいるので。足しにはなった」(7)・・・弟独身

「不定期、小遣いとして。合計900くらい。妻の手術費用も送金してくれた」(一時帰国した長男によれば月平均5～10万送金)(9)・・・長男・次男・長女3人とも独身

◇送金なし

「送金はなかった。持って行ったお金も使い果たして、親戚からお金借りて帰ってきた。40万持たせたら寮のひとに貸しくしてしまった」(34)・・・長女、次女ともに独身

「送金はなかったが持ち帰った。長女が持って帰ったお金は生活費としてすべて使ってしまった。今、一番行き詰まった時期である」(13)・・・長女・次女ともに独身

「送金なし。帰国の時に、小遣いと言って渡してくれるが全部しまっている」(1)・・・長女は家族帯同、次女・長男は独身

「送金はなし。長男が奥さんには(送金)している。長男が仕事の中心だったから」(3)・・・長男は既婚だが単身デカセギ、次男は家族帯同

「送金なし。送金してもらいたいけれど、家庭持ったし、全然別だ」「7、8年くらい前までは金を持って帰ってきていた。今は金を貯めるのも難しい。それでも300万、400万は持ってくる。それを(犯罪者に)狙われる」(4)・・・長男・次男とも家族帯同

「送金はない。娘は気が利いて時々ちょっとした小遣いを送ってくれる。お金は家の改築に使う。シロアリ被害にあったので」(19)・・・長男は家族帯同、長女もデカセギ中(単身か帯同かは不明)、次女は日本在住

「送金はない。独立しているから」(14)・・・長男は独身

「送金なし。自分でしっかりしてくれることだけが心配。子どもからのお金は期待していない」(24)・・・長男は独身

「送金もらってない。お金は自分で使いなさいと。こっちはやっていると聞いた」(37)・・・長男は1回目独身、2回目家族帯同

表3-3 デカセギに行っている家族から送金あるか(留守家族) (単位:人、%)

	定期的送金あり	不定期送金あり	送金はない	合計
実数	3	14	23	40
構成比	7.5	35.0	57.5	100.0

表3-4 ブラジルの家族に送金していたか(デカセギ帰国者) (単位:人、%)

	定期的送金した	不定期送金した	送金しなかった	合計
実数	7	10	7	24
構成比	29.2	41.7	29.2	100.0

表3-5 送金の金額は十分か(留守家族) (単位:人、%)

	十分だ	まあまあ十分	あまり十分ではない	足りない	合計
実数	7	4	1	1	13
構成比	53.8	30.8	7.7	7.7	100.0

第3節 家族のつながり～留守家族、デカセギ者それぞれの心配

前述のように、留守家族は、デカセギ者を送り出すにあたって、彼らに過大な期待を押しつけることをしていない。しかしながら、それは彼らの行く末について安心していうことではない。留守家族はデカセギ者の生活が順調に築かれることを常に願っている。では、デカセギ者の何について心配しているのだろうか。

表3-6をみると、「健康」と「仕事」が一番の関心事となっており、このふたつをあわせると5割になる。「心配なし」は2割である。「子どもの教育・進学」をあげる者はゼロであるが、このことをもって留守家族が孫の教育問題に関心が薄いと判断するのは早急であろう。なぜなら、再デカセギについて反対の理由を問われたとき、7割以上の留守家族が、「子どもの教育が心配」と回答するからである。ここで孫の教育問題が選択されていないのは、第一に、現在デカセギ中の多くが独身であり、家庭をもっているとしても、子どもがまだ幼いためであろう。デカセギ帰国者の帯同していた子どもも当時は小学生であった。加えて、留守家族が、日本とブラジル双方の教育制度や学習言語の重要性といった問題に疎く、両国の学校教育の接続の可否についての認識が不足していることも一因と思われる。

この他、日本の治安、地震、経済状況を心配する者も存在する。ただし、「任せきりだし、泣き言行ってくるでもなし」(4)、「行ってしまったら心配はない」(19)などと語っており、きりなく不安に苛まれるといったことはないようである。デカセギ生活についての一定の情報が得られているからであろうと考えられる。

一方、デカセギ者不在の間の留守家族自身の生活については何が不安に思われているのだろうか(表3-7)。「心配はない」が4割おり、「健康」「ブラジルの治安」が1割超である他はわずかである。これらは、心配というよりは、留守中の心がけとでもいったものである。「心配はない」としつつ、デカセギ者のきょうだいの存在を慰めとするとの発言には、子どもを遠くへ送り出す親の寂しさや心細さを見て取ることができよう。

これに対して、デカセギ者が留守家族に関して抱く心配ははるかに大きく、「心配はない」は1割未満である。およそ3割が留守家族の健康を案じており、「健康」「ブラジルの治安」「家計」「高齢の親」の合計は8割近くにのぼる(表3-8)。留守家族が親世代中心であるため、高齢化とそれに伴う健康不安が一番の心配となっている。

デカセギ者の不在中の心配〈留守家族〉

「ブラジルの経済状況」(25)

「心配はない。4男がいるので」(31)

「心配ない。ブラジルはどんなに給料もらっても10倍くらいしかもらえない。その金が半分になってしまう。10年以上になるとまた半分。子どもに負担がかかってしまう(のでデカセギにはメリットがある)」(22)

「ブラジルの治安が心配。先週強盗にあつて車を奪われたので」(10)

「寂しいこと。でも息子夫婦がいてくれる」(28)

「ブラジルはあまり障害がないからね。ふだんはさほど心配はないが、息子が海外から戻ったら・・・仲買が入ってくるところは怖い。キイモ・マンジョッカをつくるがたまに盗まれる」(54)

「一番は健康。家業の植木屋のこと。ブラジル経済がよくなること。後継者問題もある。長男がつく予定。大学に入ったが私立だったので(学費が)かさんだ。夜学に移ったが勉強できず1、2年でやめてしまった」(13)

「ホッとしている。心配は何もない」(2)

「子どもがいてもいなくても、治安や加齢は心配だ」(1)

「病気のことがいちばん心配」「三男が近く(スザノ)にいるから。ちよくちよく遊びにも来るから(心配はない)」(3)

「(心配はない) 帰ってこないだろうとは思っている。帰国予定はない。家を買いたいとは言っている。年金がでるようになったら帰りたいとも」(4)

「自分たち(子どもたち)が病気になったらどうなるのかと、例えば、二人では、病気でひとり(ブラジルに)帰ったらどうするかと」(19)

「こちらはこちらで仕事(農業)があるから(心配はない)」(52)

「夫婦だけで特別な不自由はない(ので心配はない)。少し寂しいけれど。子がひとりでもいると家のがらっと変わるから」(9)

「主人いたので心配はない」「主人の姉は、一人息子が日本に10年以上いる。父母2人暮らしだが、息子は帰ってこない。帰ってきてても仕事がない(気の毒だ)」(24)

このように、留守家族はデカセギ者の心配をし、デカセギ者もまた留守家族を案じている。双方をつなぐ手段は主に電話である。留守家族とデカセギ者との連絡頻度をみると、「連絡をまったくとっていない」という回答はなく、半数以上が1ヶ月に1～2回以上の連絡をとっている(表3-9～10)。なお、娘の方が息子よりも頻繁にコミュニケーションがとられているようであった。

デカセギ者との連絡〈留守家族〉

「娘達が主に親を心配してかけてくれる」(32)

「息子はあまりかけてこないが、娘はけっこうかけてくる」(1)

「娘は週1、息子は半年に1回」(19)

連絡の手段としては、ほぼ全員がインターネットをあげている。単身のデカセギ者はインターネットを利用して家族とやりとりをしているが、高齢留守家族についてみると、パソコン操作に不案内である場合や、仕事では使用するが私事では使用しない習慣であるなど、利用頻度は必ずしも高くない。「声を聴くのがいちばんいい」(27)、「字だけじゃ、元気かどうかわからない」(10)という意見も根強い。生活の詳細を知りたいのではなく、元気かどうかを確かめて安堵したいのである。互いの安否を伝えあうことが目的であるならば、今後も電話の地位は不動と思われるが、今後はインターネット利用も増えてくるだろう。

表3-6 デカセギに行った家族について心配なこと(留守家族)(複数回答)

(単位:人、%)

	子どもの教育・進学	健康	仕事	家計	日本の治安	日本の経済状況	日本人との関係	他のデカセギとの関係	その他	心配なことはない	合計
実数	0	21	15	1	1	0	4	2	7	13	64
構成比	0.0	32.4	23.4	1.6	1.6	0.0	6.3	3.1	10.9	20.3	100.0

表3-7 デカセギの間自分たちについて心配なこと(留守家族)(複数回答)

(単位:人、%)

	子どもの教育・進学	健康	仕事	家計	ブラジルの治安	ブラジルの経済状況	高齢の親	その他	心配なことはない	合計
実数	0	8	6	3	7	6	4	2	26	62
構成比	0.0	12.9	9.7	4.8	11.3	9.7	6.5	3.2	41.9	100.0

表3-8 デカセギの間留守家族について心配なこと（デカセギ帰国者）（複数回答）（単位：人、％）

	子どもの教育・進学	健康	仕事	家計	ブラジルの治安	ブラジルの経済状況	高齢の親	その他	心配なことはない	合計
実数	2	13	4	5	11	0	5	1	4	45
構成比	4.4	28.9	8.9	11.1	24.4	0.0	11.1	2.2	8.9	100.0

表3-9 デカセギに行った家族との連絡頻度（留守家族）（単位：人、％）

	毎日	1週間に2、3回	1週間に1回	2週間に1回	1ヶ月に1回	2、3ヶ月に1回	半年に1回	その他	合計
実数	1	1	7	10	14	7	2	1	43
構成比	2.3	2.3	16.3	23.3	32.6	16.3	4.7	2.3	100.0

表3-10 留守家族との連絡頻度（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

	毎日	1週間に2、3回	1週間に1回	2週間に1回	1ヶ月に1回	2、3ヶ月に1回	半年に1回	その他	合計
実数	0	0	5	9	10	0	1	1	26
構成比	0.0	0.0	19.2	34.6	38.5	0.0	3.8	3.8	100.0

第4節 日本に対する好感度

以上みてきたように、デカセギをめぐっては、留守家族、デカセギ者それぞれの期待や心配、願いや諦めが交錯している。そして、デカセギ者を送り出す経験、デカセギ者となる経験をするには、デカセギ先である日本という国に対する好感度を揺るがせる契機ともなる。そこで、デカセギ者の日本の生活満足度を確認してから、両者の日本への好感度をみることにしよう。

はじめに、デカセギ者の生活満足度は表3-11の通りである。「留守家族と離れていること」を除いては、「大変満足」「まあ満足」の合計がおしなべて7割を超す。なかでも、「物質的な豊かさ」「生活上の便利さ」「治安のよさ」に関する評価は高く（9割超）、高い満足度が示されるが、他のブラジル人や日本人との交流についての満足度はそれより低い。同僚あるいは地域の仲間としての交流は、職場環境や地域性など多くの条件によるところが大きいとはいえ、もともと交流への意欲が高かったわけでもなく、満足度もその意欲の低さに対応したものとなっている。

それでは、こうした満足度は、デカセギ者の日本に対する好感度を上げることに成功したのだろうか（表3-12）。「以前から好感をもっているが、デカセギでさらに好感が増した」のは4割である。デカセギ前から好感をもっている者が6割、デカセギによって好感が増した者が6割という見方もできる。ここから、およそ8割は日本に好感をもつ傾向にあると解釈できる。

日本に対する好感度〈デカセギ帰国者〉

「(以前はそうでもなかったが好感増した) 日本に対する特別な気持ちはない。デカセギから帰ってから日本への気持ちは変わった。日本にいた頃は感じなかったが、だんだんこちらが長くなると日本のことが気になるようになる」(25)

「(以前から好感あったが好感増した) いい奥様に会ったので。奥様は、「あなたがブラジルに帰られたら日本のいいイメージ持って帰ってほしい」と言ってくれた」(27)

「(以前から好感あったが好感増した) 生まれたところだったので、懐かしさが。育ったところはまったく変わってしまったが、道が残っていて懐かしかった。当時とあまり変わってなかった。便利になっているが基本はそのまま」(9)

このデカセギ者の日本への好感度を、留守家族の好感度と比べると（表3-13）、留守家族の日本に対する好感度はデカセギによってそれほど変化していないことがわかる。「以前から好感をもっているが、デカセギでさらに好感が増した」と「以前から好感をもっているが、デカセギで好感は変わらなかった」をあわせると8割に達し、彼らの日本への好感が安定していることを示している。

日本に対する好感度（留守家族）

「（以前から好感あったが好感増した）写真を送ってもらって、本人たちもいいところをまわっているのだなと思った。以前は全く知らなかった」（54）

「（以前から好感あったが好感増した）日本のいいところを身につけてきてくれれば（嬉しい）。進んだ技術など」（2）

「（好感は変わらない）好感も嫌悪もない。1977年に遊びに行っ、よくしてくれた」（1）

「（以前はそうでもなかったが好感増した）来た頃はブラジルに来てよかったと思っていた。でも子どもの話で、いい上司の話などきくと。（こちらは）治安も悪いし。先週の日曜も高速強盗に狙われた。（それでも）治安さえよければここは天国」（4）

「（以前から好感あったが好感増した）次女の結婚式で行った。皆働き者（なのでいい印象もった）」（19）

表3-11 日本の生活にどの程度満足していたか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

		大変満足	まあ満足	少し不満	かなり不満	合計
治安のよさ	実数	18	6	1	0	25
	構成比	72.0	24.0	4.0	0.0	100.0
日本人との交流	実数	7	15	3	0	25
	構成比	28.0	60.0	12.0	0.0	100.0
物質的豊かさ	実数	17	7	1	0	25
	構成比	68.0	28.0	4.0	0.0	100.0
生活上の 便利さ	実数	15	8	2	0	25
	構成比	60.0	32.0	8.0	0.0	100.0
文化・習慣 の違い	実数	6	14	4	1	25
	構成比	24.0	56.0	16.0	4.0	100.0
他のブラジル 人との交流	実数	5	14	5	1	25
	構成比	20.0	56.0	20.0	4.0	100.0
留守家族と離 れていること	実数	1	2	13	9	25
	構成比	4.0	8.0	52.0	36.0	100.0
全体として	実数	7	17	0	1	25
	構成比	28.0	68.0	0.0	4.0	100.0

表3-12 日本への好感度はデカセギの前後で変化したか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

	前から好感 さらに好感	前から好感 変化なし	好感無から 好感増	好感無に 変化なし	好感無から さらに減少	合計
実数	10	5	5	4	0	24
構成比	41.7	20.8	20.8	16.7	0.0	100.0

表3-13 日本への好感度は、家族がデカセギに行っで変化したか（留守家族）（単位：人、％）

	前から好感 さらに好感	前から好感 変化なし	好感 減少	好感無から 好感増	好感無に 変化なし	好感無から さらに減少	合計
実数	7	21	2	2	1	1	34
構成比	20.6	61.8	5.9	5.9	2.9	2.9	100.0

第4章 デカセギ者の帰国を待つ・帰国者を迎える/デカセギから帰る

第1節 デカセギの成果と帰国後の仕事

ここまで、デカセギ者が送り出される経緯、デカセギ者の就労状況および彼らが不在の間の留守家族の生活、デカセギをめぐる両者のさまざまな思いなどを探ってきた。それでは、デカセギ帰国者は、デカセギの成果として何を持ち帰ったのだろうか。そして、どのようなタイミングで帰国しようと考えていたのだろうか。そして、留守家族はデカセギ帰国者にどのような生活を望んでいるのだろうか。

デカセギ帰国者に帰国のタイミングをたずねたところ、「お金が貯まったら帰国する」が5割で最多であった(表4-1)。では、彼らは現実に十分な稼ぎを得て帰国したのだろうか。デカセギで何かどの程度達成されたのかを問うた結果をみてみよう(表4-2)。それによると、不動産資金、事業資金、技術技能習得については「十分できた」「まあまあできた」の合計が4～6割にとどまり、生活資金以外の各種資金を十分に稼ぐことは難しかったとの認識であった。これに対して、「ブラジルでの生活資金」を稼ぐことと「日本語や日本の文化」を学ぶことに同様の成果があったと認識する者は8割に届くほどである。「日本人の友人・知人が増えた」についても、「十分」あるいは「まあまあ」の成果を7割が認めている。しかし、7割という数字にもかかわらず、デカセギ帰国者が日本人との交流を実り多いものとして記憶しているとは必ずしもいえない。自らが直接差別の対象とならずとも、日本人については、「ブラジル人のことを自分より下にみる。差別的。ばかにする。よそ者を排除する」といった印象をもつ者も少なくなく、日本で知り合ったデカセギ仲間との交流は帰国後も続くのに対して、日本人とのつながりは帰国後には途切れてしまうケースがほとんどであった(表4-3～4)。

デカセギの成果〈デカセギ帰国者〉

「事業資金(食堂)を貯める目的は十分達成されたが、大工をしていたわけではないので、仕事上の技術が身に付いたわけではない。日本語は既に話せるので今更上達ということはなかった」(25)

「生活資金や住宅資金はまあまあ。日本語はもう知っていた。意地悪多かったので日本人の友人はあまり増えなかった。日本人は警戒的。自分の家を教えてくれない」「ブラジルさん!と呼ぶ」「わかる?話していることわかる?と言う」「日本への印象悪く、帰国後も半年は外に出られなかった。気がゆるみ疲れが出て病気になったほど」(27)

「生活資金、事業資金、仕事の技能、日本語・文化はまあまあ達成。不動産住宅は既にあつたので該当せず。日本の友人・知人はあまりできなかった」(14)

「生活資金、日本語はまあまあ達成。友人はあまりできなかった」(7)

「日本人の友達はたくさんできた。でも、ブラジル人だからと引くひともいた。生活資金、事業資金、不動産資金は思ったよりできなかった」技術については「テクニクの学校出ていたので覚えたという感じではない。むしろ自分が教えていた。」(12)

「日本語・日本文化を学んだのは十分できた」(38)

「貯金もできたし、商売に必要なものも手に入ったし」「元々機械いじりが好きだったので重用された。日立の時は重いものをもっていたのでつらかった。でも、人間関係の方がつらかったかな。職人氣質の人が多く、関係が難しかった」(9)

一方、留守家族におけるデカセギ者の帰国の見通しをみると、家業（農業や商店経営）をもつ場合は、帰国への強い期待がもたれるが、帰国後の仕事を確実に提供できるゆえに、帰国のタイミングにはあまり頓着されない。逆に、帰国後に本人が仕事を探さなければならない場合は、仕事探しの困難さゆえに、「無理して帰らずともよい」と発言される傾向があった。例えば、デカセギ中の息子については、「家を買って（日本に）長く滞在したいと思っているようだ。どうせ長くいるなら20～30年いて、帰ってきてから老後までゆっくりできるくらい稼いでくればよいとは思うけど」（9）という発言がある。留守家族である父親は、既に農地を親族にゆだねて卸業に転業しており、息子に農業を継がせる意図はもっていない。

このように、デカセギが結果的に長期化するかどうかは、帰国後の経済生活の見通しの有無によるところが大きく、それは即ち、帰国後にどのような仕事に就けるか、その内容と確実性が大きな意味をもつということである。先にみたように、留守家族の生計の基本的な部分はデカセギ者に依存しておらず、従って、デカセギ者の持ち帰る稼ぎに対して大きな期待が表明されることはない。デカセギ者に求められることは、原則として、日本で生活し日本を経験するための費用を自分で稼ぐことである。その過程において日本の消費文化が身に付いてしまえば、お金を蓄えて帰国することは難しくなるということをも、留守家族はよく承知しているようである。「4、5年居って金もって帰らん人も多い。車一台買ったなら何にもないって言う親もいる」（3）といった発言がきかれた。

となれば、デカセギ帰国者のために留守家族はいかなる職業を望むのだろうか。表4-5にあるように、「その他」を除いて「自営業」の3割弱がいちばん多い。「農業」を自営業として換算しなおすと、およそ3割が自営業を望むという結果となる。帰国後の職業として自営業が好まれることは、多くの先行研究において指摘されているところであり、福博も例外ではない。この自営業の比率は上昇しつつあるとの報告もある（佐野 1998：19）。

ここで注目されるのは、起業に対して非常に慎重な態度がとられている点である。それは、デカセギで資金を十分に蓄えることの困難性についての共通認識があるからと思われる。実際、例えば（25）は、1991年に「10年は（日本に）いるつもり」であり、「リゾートにペンションを買い、これを人に貸して、日本の年金と家賃で老後を暮らしたい」、それまでは「日本とブラジルを行き来して暮らす予定」と述べていたが（喜多川・藤木・嶋 2002：113）、その後デカセギは7年で切り上げることとなり、15年経った2006年の時点では、フェーラを営み、ペンションを買うには至っていない。デカセギが珍しいことではなくなった今、デカセギの成果やデカセギ帰国者の「その後」をめぐる情報は留守家族にも広くゆきわたっており、デカセギの経済的成果がそれほど大きなものではないことは既知のこととなっていると思われる。

従って、このようなデカセギ帰国者の現実を知るからこそ、帰国者の資金で事業をおこすことへの関心が示されることはない。自営業とはいっても、起業のリスクはできるだけとらずに、家業があるのならばそちらを継いで安定した生活をするのが望まれている。もちろん、家業の多くを占める農業については、経営の先行きが明るくないことは十分に認識されており、経営内容の改善を含め、周辺の起業可能な新事業が模索されているのも事実である。例えば、（31）では、息子の帰国にあわせ、現在未使用の土地を使って水耕栽培の事業を始めることが検討されている。ただし、それはあくまでも可能な範囲のことであって、留守家族としては、デカセギ帰国者が、ブラジルでの生活に無事に軟着陸することが第一の関心事であろう。

このとき、特に家業の後継者が求められているような場合には、娘よりも息子に対する期待が強くもたれているところから、息子の帰国への関心の方が相対的に高かった。そして、複数の息子がデカセギしている場合には、いずれかひとりに対してより高い関心が示され、彼の帰国への期待もより強いものがあるように見受けられた。

息子の帰国が望まれるもうひとつの理由としては治安問題があげられる。夫を亡くした60～70代の女性の独り暮らしや単身での商売は危険であるとの認識が強く、スザノ市中心部への転居が計画される場合もある。その意味で、息子（あるいは息子一家）の帰国は、母親がこの地で暮らし続けるための「要件」でもある。福博のリーダーたちは、「転出者のふるさととしてのムラ」「村内居住者と転出者との連帯シンボルとなるムラ」としての再活性化をうかがっているといわれるが（サンパウロ人文科学研究所 2002：26）、それは、デカセギ者の帰国のありようにかかっているのである。

デカセギ帰国者に望む仕事〈留守家族〉

「期待はあっても資金の面の問題がある。（次男は）たぶん帰ってこないで今の仕事をしっかりしてほしい。帰国後、妻は（仕事）何もしないでしょ」（25）

「こっちに戻ってやる人がない人が多い。新しく事業しても失敗する人多い」「自営業。姪は洗車業を起業して順調だ。現在使っていない土地があるので、四男が、自由に土地使って何かやればいい、と言っている。三男が帰国してここで水耕栽培をすることを考えているようだ。狭いところででき、土でつくったものの倍で売れる。三男の出た学校は農業技師の養成学校。農業する技術ある。家業あるのは幸せ。会社名に四男と三男の名前が入っているのは、いつかふたり一緒に仕事をするかもしれないから。四男は、いつ帰っても自分の好きにできるよ、と言っている。でも、私は、早く帰ってこいとは言わない」（31）

「自営業がいい。小さくても自分で好きにやれる」（22）

「家業。今は、Bar と雑貨屋を長男、ビデオ屋を私。一緒に商売をしたい」（10）

「自営業。個人個人になったので自分（が勝負）。帰る見込みないかもしれない。帰ってきて何やるか考えると難しいし、実際にやっても失敗（するケースが多い）。ほとんど失敗。国が心配するのは、デカセギが送る金額が輸出を上回るほど多いのに、せっかくお金を送ってくれるのに、事業失敗すること。そういうことのないように国が指導してほしい」（32）

「家業。次男の妻はその父の植林業の後継者なので長男が帰国したら一家はそっちへ帰る。家業は長男が継ぐ」（28）

「事業に失敗する人はいる。事業の質による。農業だと難しい」（34）

「何でもよい」（29）

「習ったことが使える会社があればいいが、それがなければ通訳か。今、ブラジルではみんなシナ語習えという。言葉の仕事につければいい。仕事がなければ（家業である）苗木を手伝えればいい」（13）

「本人任せ。できれば大学で習ったことを活かせる仕事をしてほしいが、商売をするなら注意するが、止めはしない。成功する人もいるから」（2）

「今は苗木の栽培をしている。長男に継がせる気はないし、継ぐ気もないらしい。何でもいい」（1）

「長男はトラックの運転手をするという目的があり、資金を蓄えるために行った。あとはできるかどうか。次男が何を考えているのかはわからない。次男は当分帰ってこなさそう。自分の家はある。今は貸している。特に期待はない。長女の夫も化粧品屋をやったが4年で閉めて日本へ行った。今のブラジルでは少々のお金があってもできる仕事はない。店を開けて泥棒が入って閉店、が多い。（今農業をしている土地も本格的に）農業ができるほどの土地ではない。農機具も盗まれるし。もうどうしようもない」（3）

「仕事をすればするほど赤字になるのが現状。今の大統領が辞めない。後4年続くが、その間にブラジルはだめになる。教育で自分より優秀な人が売れると困るという理由で教育が振興されない」（4）

「長男は帰ってきたいと言うが、仕事もないし。孫は高校生、日本の学校。日本語を話す。家を買おうかと言っているがまだそこまではっていない。日本にいる子どもたちは、家族で（ブラジルに）行ったら飛行機代もかかるので、父母に来てほしいと言う」（19）

「本人に任せたい。でも、息子に農業を継いでほしい」（14）

「こっちでやる仕事があるとないとでは違う。事業始めるのは難しい」（24）

「次男はしたいことをしてほしい。農業は嫌いらしいから。コピー、ゼロックスの仕事」（37）

「もともと個人で農業をする風潮がある。（そんな中で）だんだんと耕作地が減っている。子どもが（まだ）農業を継いでいないので、村の人や新しく入ってきた人に（土地を）貸している」（54）

このような留守家族の期待に対し、帰国後なんらかの仕事に就いている帰国者は6割である。デカセギ前に学生であった者が3割いたが、帰国後復学したという回答はなかった。勉学への意欲がデカセギによって中断させられてしまう傾向がみえる。教育熱心という日系ブラジル社会の「伝統」、あるいは、高い教育をおさめることで社会的上昇をはかるという彼らの「戦略」の揺らぎがうかがわれる現象である。一方、帰国後の就業についてみると、やはり自営業の比率が高い（表4-6）。「農業」と「自営業」をあわせると6割になる。具体的には、クレソン栽培、キノコ栽培卸、野菜卸売り、薬剤師（薬局経営、病院勤務）、フェーラ、販売業などがある。病院薬剤師、親戚の経営する店での販売業の他は家業あるいは起業されたものであった。つまり、いずれも私的なルートで得られた職業である（表4-7）。

現在の仕事に関しては、賃金が低いことや貯蓄が難しいことに対する不満もみられるが（表4-8）、総じて不満を表明する者は少なく、8割は転職を望んでいない（表4-9）。これは、帰国後の生活にそれほどの不満がないということである。帰国者の多くは、デカセギにおいて不動産や事業のための資金を十分に稼ぐことができなかつたとしても、生活資金についてはそれなりのものを手に入れたと感じている。デカセギを経て生活水準がいくぶん上昇したと認識する者が増えていることがそれを裏付けよう（表4-10）。デカセギ前は、「中の中」6割、「中の下」3割だったのが、帰国後は、「中の中」7割、「中の下」2割となっている。

周辺の人々が帰国者に示す態度をみても、彼らの関心は「稼ぎの大きさ」に焦点化されているわけではない（表4-11）。「お金」や「技術習得」への関心や羨望を「かなり感じる」あるいは「やや感じる」帰国者は2～3割にすぎない。人々はむしろ、「デカセギ情報」をもち、「日本での生活を経験」し、「日本文化」を見てきたことへの関心を強く示しており、この3項については、関心や羨望を「かなり感じる」「やや感じる」の合計はそれぞれ6割を超える結果となっている。

表4-1 日本にいたとき帰国についてどのように考えていたか（デカセギ帰国者）（単位：人、%）

	何があつてもとにかく帰国	ブラジルの経済状態が改善したら帰国	お金が貯まったら帰国	高齢になったら帰国	とにかく日本に残りたい	よい仕事があつたら日本に残りたい	日本に家族を連れてこられたら残りたい	日本の習慣に慣れたら残りたい	その他	合計
実数	9	1	14	1	0	0	0	0	2	27
構成比	33.3	3.7	51.9	3.7	0.0	0.0	0.0	0.0	7.4	100.0

表4-2 デカセギで次の項目がどの程度達成されたか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

		十分できた	まあまあできた	あまりできなかった	まったくできなかった	合計
ブラジルでの生活費	実数	5	13	4	1	23
	構成比	21.7	56.5	17.4	4.3	100.0
不動産・住宅資金	実数	4	6	7	6	23
	構成比	17.4	26.1	30.4	26.1	100.0
事業資金	実数	2	12	6	3	23
	構成比	8.7	52.2	26.1	13.0	10.0
技術・技能習得	実数	1	11	6	4	22
	構成比	4.5	50.0	27.3	18.2	100.0
日本語・日本文化学ぶ	実数	6	13	4	1	24
	構成比	25.0	54.2	16.7	4.2	100.0
日本人の友人増やす	実数	7	10	5	2	24
	構成比	29.2	41.7	20.8	8.3	100.0

表4-3 日本で知り合ったデカセギ仲間のうち、今でも連絡を取り合っている人はいるか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

	いる	いない	日本で知り合ったデカセギ仲間はいない	合計
実数	17	9	0	26
構成比	65.4	34.6	0.0	100.0

表4-4 日本で知り合ったデカセギ仲間との連絡頻度（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

	毎日	1週間に2、3回	1週間に1回	2週間に1回	1ヶ月に1回	2、3ヶ月に1回	半年に1回	その他	合計
実数	0	0	1	1	5	5	2	5	19
構成比	0.0	0.0	5.3	5.3	26.3	26.3	10.5	26.3	100.0

表4-5 帰国後就いてほしい仕事（留守家族）（単位：人、％）

	公務員	農業	自営業	主婦	学生・生徒	その他	合計
実数	2	1	9	2	1	19	34
構成比	5.9	2.9	26.5	5.9	2.9	55.9	100.0

17選択肢のうち実数がゼロでなかったものについて表示

表4-6 帰国後の現在の仕事（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

	公務員	教員	会社管理職	事務営業	技術職	工員	銀行員	医師	看護師	研究職	農業	店員販売員	自営業	主婦	失業	学生生徒	その他	合計
実数	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	6	0	5	1	1	0	2	18
構成比	0.0	0.0	11.1	0.0	0.0	5.6	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	27.8	5.6	5.6	0.0	11.1	100.0

表4-7 帰国後の現在の仕事にどうやって就いたか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

	仲介業者	ブラジルの日本企業	家族親戚	知人	その他	自分で探した	合計
実数	0	1	4	2	4	4	15
構成比	0.0	6.7	26.7	13.3	26.7	26.7	100.0

表4-8 現在の仕事に不満あるか（デカセギ帰国者）（複数回答）（単位：人、％）

	賃金	労働時間	仕事の内容	仕事の量	仕事の環境	休憩時間の長さや休日の数	人間関係	全体として	不満なし	合計
実数	2	4	0	2	0	1	0	2	6	17
構成比	11.8	23.5	0.0	11.8	0.0	5.9	0.0	11.8	35.3	100.0

表4-9 転職したいか（デカセギ帰国者）

（単位：人、％）

	転職したい	転職望まない	ブラジルで起業したい	日本で起業したい	ブラジル・日本以外で起業	またデカセギに行きたい	合計
実数	0	10	2	0	0	0	12
構成比	0.0	83.3	16.7	0.0	0.0	0.0	100.0

表4-10 デカセギから帰ってからあなたはどの階級に属していると思うか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

	上	中の上	中の中	中の下	下	合計
実数	0	2	18	6	0	26
構成比	0.0	7.7	69.2	23.1	0.0	100.0

表4-11 デカセギから帰ったとき、周囲の人々の反応はどうだったか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

		かなり感じる	やや感じる	あまり感じない	ほとんど感じない	合計
お金への 関心・羨望	実数	5	2	8	8	23
	構成比	21.7	8.7	34.8	34.8	100.0
技術習得への 関心羨望	実数	3	3	11	6	23
	構成比	13.0	13.0	47.8	26.1	100.0
デカセギ情報 への関心	実数	7	9	6	2	24
	構成比	29.2	37.5	25.0	8.3	100.0
外国での苦 勞への同情	実数	5	3	8	6	22
	構成比	22.7	13.6	36.4	27.3	100.0
日本での生 活への関心	実数	8	8	2	5	23
	構成比	34.8	34.8	8.7	21.7	100.0
日本文化 への関心	実数	4	10	4	4	22
	構成比	18.2	45.5	18.2	18.2	100.0
あまり関心 なさそう	実数	3	0	13	3	19
	構成比	15.8	0.0	68.4	15.8	100.0

第2節 再デカセギの可能性

デカセギ帰国後の人生の選択肢には、再デカセギも含まれる。再デカセギの可能性について人々はどのように考えているのだろうか。まず、留守家族についてみてみよう。再デカセギを望むか否かをたずねたところ、「再デカセギしてほしくない」という回答が7割を占めた（表4-12）。2002年「報告書」でもその比率は同じく7割である。

再デカセギはあるか〈留守家族〉

「（次男は）たぶん帰ってこないで今の仕事をしっかりしてほしい。妻は帰国後はもう行かないでしょう」（25）

「もし、孫がデカセギしたいといったら反対する。子どもにも再デカセギしてほしくない」（32）

「長男は帰国したいと思うが、でも家族をおいてまた行くかも」（28）

「行ってほしくない。長女の夫は「もう（日本に）帰らん」と言っている。娘は遊びに帰りたい様子」（29）

「状況による。どういう気持ちで行きたいか。何のために行きたいかによる。生活できるなら行かなくてもよい」（13）

「そのときの年齢にもよる。できたら、二度と行かなくていい状態で帰ってきてほしい」（3）

「行ってほしくないが、（現実としては）あきらめるより他ない」「自分はブラジルにいたい。墓もあるし」（19）

「行ってもいい。自分の気持ちが大変だから」（7）

「自分がしたいことをしてほしい。行ってよいと考えるのは、自分の好きな仕事をしてほしいから」（37）

「デカセギに行ってほしい。子どもは帰って来たいと言うけど。帰ってきても、何するか。何かいい仕事ないかって言うけど。長男もまた日本に行きたいと言っている。今は男が1人しかいないので母親をひとりにして日本に行くことはしない

が、次・三男が帰ってきたらまた行きたいみたいだ」(10)

「子ども(孫)が大きかったら、ブラジルに帰ってきて、また、日本に行きたがるだろう」「ブラジルにいても仕事がない。百姓しても赤字のような百姓だったら、同じ働いてもかわいそうと思う。それなら日本でがんばった方がいい」(46)

留守家族が再デカセギを望むのは、いうまでもなく、帰国者が十分に達成できなかった「資金稼ぎ」にもういちど取り組むためである。現在就業していない人々にとっては、ブラジルの賃金の安さが就業意欲を削ぐ一因となっているといわれ、このことが彼らを再デカセギに向かわせていると考えられる。これに対して、再デカセギを望まない理由は、デカセギという変則的な生活をもたらす影響を考慮したものになっている。具体的に問うた結果は表4-13の通りである。「あてはまる」「ややあてはまる」の合計をみると、「ブラジルで生活できる」「家族が離れて暮らすのはよくない」の2項については9割、「子どもの教育が心配」は7割、「外国で暮らすのは苦痛」が6割であった。具体的には、以下のような発言が得られた。

再デカセギを望まない理由〈留守家族〉

「ブラジルで生活できる。家族が離れて暮らすのはよくない。外国で暮らすのは苦痛」「次男は帰ってこないと言っている。帰ってこないという前提ならいいが、ポルトガル語教えないなら私立。ひとり5万かかる。今は日本の公立の学校に行っている」(25)

「生活できる。離れて暮らすのはよくない。子どもの教育はやや心配。外国で暮らすのが苦痛というのはあまりない」「こちらに仕事あるから行くことない」(31)

「帰ってくると言っている。家族は一緒がいい。ただし、子どもの将来は自分で決めるべき。すぐ帰れとは言えない。(親が)寝付くようになったら帰るとは言っている」(22)

「帰ってこないなら教育の心配はいらぬが、帰国するなら心配だ」「今後孫が日本の学校行けば、もうこちらには戻ってこれない。ポルトガル語は家で使っているから忘れていないが、ブラジル人学校あったらいい」「仕事上のブランクが大きいと不利になる」(32)

「経済的に難しい。どんな仕事でもやるというのがないと難しい」(34)

「家族と離れるのはよくない、孫の教育が心配」(28)

「家族が一緒がよい。子どもは親が責任をもって学校にやらないとだめ。孫は日本の小学校に行っている。家のなかではポルトガル語だが、学校が日本語なのでポルトガル語忘れそう」(29)

「やはり家族が一緒にいるべきだ」(13)

「親がブラジルにいるから。お墓もある」(19)

「家を守ってほしいから」(14)

「家族が離れて暮らすのがよくないから」(23)

「暮らせるからわざわざ行かなくてもよい」(24)

「デカセギは悲劇も多い。結婚して半年も1年も離れてるのは本当じゃない。親として感じる。こと。(単身デカセギから帰国した夫は)自分が日本でおぼえてきたこととブラジルに嫁さんがいてものおぼえないので、位が変わったような気がするんじゃないか」(46)

このように、当事者の意志を尊重しようとしながらも、「家族が離れて暮らすこと」のもたらす負の影響を危惧する意見が多い。デカセギによって今より安楽な生活ができることよりも、家族が一緒にいることの方が重視されている。これは、デカセギを送り出す経験を経て得られた結論とい

える。日本を見聞する機会は既に与えた。経済的成果がそれほど得られないことも経験した。あとは、ブラジルに生活基盤を築いてほしいということであろうか。加えて、後でもふれるように、今後は、高齢化する自分たち親世代を側で支えてほしいという本音もあるように思われる。

これに対して、デカセギ帰国者の再デカセギの意向を探ると、留守家族と同じく、「行きたくない」との回答が圧倒的に多く、8割を超える(表4-14)。理由としては、やはり、ここにおいても、「ブラジルで生活できる」「家族が離れて暮らすのはよくない」という意見が強い(表4-15)。家族と離れることは、ストレスとなると同時に、さまざまな問題が引き起こされる原因となりうると考えられているためである。

前述のように、子ども帯同のデカセギを経験した帰国者はわずか2人しかいないが、そのうちの1人は、帰国後の子どもとの関係は良好であるとしたうえで、ブラジルに帰国してからの子どもについての悩みとして、日本文化ばかり身に付いていること、ブラジルに適應できないこと、勉強についていけないこと、学校に行きたがらないことをあげている。一方、子どもをブラジルに残してデカセギをした経験をもつ者(4人)は、自分の帰国後に子どものことで悩んだことはなく、子どもとの関係も良好であると述べている。しかし、これは、彼らの子どもが全員小学生であり、教育問題についても家族関係についても、まだそれほど難しい年代ではなかったからと考えられる。

この他、年齢の問題もある。再デカセギに行こうと考えている者が20~30代に集中しているところから、年齢の上昇とともに、デカセギ先で納得のいく仕事をみつけることが難しくなるという現実も理由のひとつをなしていると思われる。

再デカセギに行かない理由〈デカセギ帰国者〉

「ブラジルで生活できる。家族が離れて暮らすのはよくない。外国で暮らすのは苦痛。年齢を考えるともうデカセギは無理」(25)

「日本での人間関係は難しい。思っていたよりずっと大変だった。もうたくさんです」(27)

「家族が離れるのはダメ。生活できる。あまり行って帰ることを繰り返すのは意味がない。何とかこっちで生活したいと考えている。最初は違う国を旅行して、その上にお金も稼げる、預金もできる(のがよかった)。そのうち土地を買って農業を続けたい(と思うようになった)」(38)

「家族と離れて暮らすのが嫌だから」(23)

「年齢を考えて」(9)

再デカセギへの意欲が減少する直接的原因は、現地収入とデカセギの送金額との格差解消であるとの説明がある(佐野 1998:21)。しかし、ここでは、経済的な理由よりも「家族と離れること」が強調されている。これは、デカセギの経済的な「うまみ」が減っている状況が既に自明のこととされ、あえてあげられなかったと解釈されるべきだろう。

ところで、再デカセギに関する認識は、「デカセギを経験した者としてデカセギ希望者へどのような助言をするか」という問いへの答えにも見出すことができる。というのも、それらの助言には、彼らが自らのデカセギをどのように総括しているのかが表れているからである。以下にあげた諸々の発言をみると、目的意識をもつことの重要性が唱えられるとともに、目的意識をもち続けることの難しさが指摘され、さらには、そうした意識を無くさないようにとの忠告がなされていることが

わかる。外国で稼ぐことの難しさが強調されており、安易にデカセギすることを戒める内容である。ただし、この助言をしているのが、帰国を選び、帰国することができた人々である点は考慮されるべきだろう。つまり、彼らは自らの選んだ「帰国」という選択を肯定するためにも、目的意識をもって一生懸命稼ぎ、「早々に帰国する」ことを勧めるのであり、また、帰国後の生活が成り立つことを強調するものと思われる。

デカセギ希望者へのデカセギについての助言〈デカセギ帰国者〉

「今のひとは違う。今のひとはデカセギではない。日本をみて楽しむために行く、というのが多い。貯めて何しようかという人は少ない。こちらで計画たてて実行できるかどうかが大変。こっちと生活が違うから。働いたがすぐ金になるからな（日本は）。いつまでも若いつもりでいるとゆきづまっちゃう」（25）

「いい仕事だと信じて行くんじゃないよ。斡旋業者のいうことをそのまま信用するな。日本で苦勞。ピンハネ。パスポートとりあげられる」（27）

「日本でもたくさん日系人いるが、向こうで遊びすぎる人がある。そういう暮らしをするくらいならブラジルにいた方がいい」（12）

「別に心配はないが、頑張れば自分の思い通りになる。だらだらしている人はどこに行っても成功しない」「妻とは1回目のデカセギから帰国してから知り合った。2回目のデカセギに一緒に行ったのは離れているのはよくないと思ったから」（38）

「デカセギはいいと思う。お金を稼ぐには。皆日本に行って家を買うつもりで働いている。家があれば月働きでやっていけるから」（52）

「早くお金をためて帰ってきてほしい。無駄遣いしてはいけない」（23）

「時代が変わったのでアドバイスできることはない。最近の人たちは目的が散漫になってきているので貯めづらくなっている。お金を貯めることが難しくなっている」（9）

「がんばって働いて、がんばっていい仕事して。そこのルールに従うこと」（33）

「目的をはっきりさせて行った方がいい。そんな簡単なものではない」（30）

「できるだけたくさん残業をやって」（21）

「日本人と交流しよう。日本の会話や文化がわかるように」（41）

「ちゃんと職場を調べて行くこと。あせって決めないように」（55）

表4-12 再デカセギに行つてほしいか（留守家族）（単位：人、％）

	行つてほしい	行つてほしくない	合計
実数	7	19	26
構成比	26.9	73.1	100.0

表4-13 再デカセギに行つてほしくないのはなぜか（留守家族）（単位：人、％）

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	合計
ブラジルで生活できる	9 64.3	4 28.6	0 0.0	1 7.1	14 100.0
家族が離れるのはだめ	11 78.6	2 14.3	0 0.0	1 7.1	14 100.0
子どもの教育心配	6 46.2	4 30.8	0 0.0	3 23.1	13 100.0
外国暮らしは苦痛	2 15.4	6 46.2	3 23.1	2 15.4	13 100.0

表4-14 再デカセギに行きたいと考えているか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

	デカセギに行こう と考えている	デカセギには 行きたくない	合計
実数	4	23	27
構成比	14.8	85.2	100.0

表4-15 再デカセギに行かないのはなぜか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	合計
ブラジルで生 活できる	実数	10	5	0	0	15
	構成比	66.7	33.3	0.0	0.0	100.0
家族が離れる のはだめ	実数	11	2	1	0	14
	構成比	78.6	14.3	7.1	0.0	100.0
子どもの教育 心配	実数	5	3	0	4	12
	構成比	41.7	25.0	0.0	33.3	100.0
外国暮らしは 苦痛	実数	5	6	3	1	15
	構成比	33.3	40.0	20.0	6.7	100.0

第5章 デカセギをめぐる問題と今後

第1節 家族関係の再編成～帰国する者・しない者

留守家族においても、デカセギ帰国者においても、再デカセギへの意欲は高くない。しかし、それでも、現実には、何度もデカセギを繰り返す人々がいる。梶田はそれを「デカセギは新たな職業に就く手段というよりは、それ自体が常態化し、デカセギという新たな職業ないしパターンが定着しつつある」（梶田 1998）と分析した。先にも見たように、留守家族にデカセギに対する賛否を問うと、賛成意見が7割を超える。にもかかわらず、再デカセギについては、それを望まないとする者が留守家族で7割、帰国者自身において8割である。このような結果となった理由のひとつは、本調査の対象者の年齢構成にもある。つまり、デカセギ帰国者の半数を40代以上が占めていることである。そのうち3割ほどが60～70代の年配者である。彼らの多くは帰国後10年以上経っており、今後のライフプランにおいて自身の再デカセギという選択肢そのものをもたないと思われる人々である。従って、彼らの再デカセギへの意向を、「現役」のデカセギ候補者のそれと同列に扱うことは難しい。

さて、上記のことをふまえて、デカセギには賛成するが再デカセギを望まない者が多いという状況が何を示すのかを今一度考えてみよう。ここから確認できることは、デカセギ経験の意義を認めつつデカセギが常態化することには否定的な認識が、留守家族とデカセギ帰国者に共通して見受けられるということである。その背景には、2002年「報告書」で指摘されるように、福博全体としての過疎化の問題がある。帰国者が就くべき仕事は十分にはなく、さらに、向老期にある留守家族は、老後生活をどの子どもが支えるかという切実な問題を抱えている。こうしたなかで、デカセギの常態化は、日本との往来の増加というよりは、むしろ、1回の滞在期間の長期化という形で現れている。結果として、そこには、デカセギ者が二分されつつある状況をうかがうことができるのではなからうか。即ち、帰国してブラジルに経済基盤を築くことができ（あるいは築く見通しがあり）、以後ブラジルにとどまることが可能な一部の帰国者と、生活の本拠地を日本とせざるをえない状況

下でデカセギを継続あるいは繰り返す者の固定化である。後者については、その実態としては、日本への定住化が進行すると考えることができるのではないだろうか²⁴⁾。

本調査のデカセギ帰国者においては、1回目のデカセギ、2回目のデカセギとも単身のデカセギ率は約8割であった(表5-1)。1回目のデカセギでは「単身(独身)」が約7割、「有配偶の単身(子どもはいない)」が約1割である。「配偶者と一緒(子どもはいない)」「配偶者と子ども全員と一緒に」はそれぞれわずか4.2%である。これに対して、2回目のデカセギでは有配偶者率が高くなり、「単身(独身)」は5割台まで減り、「有配偶の単身(子どもはいない)」が約2割を占めるようになる。「配偶者と一緒(子どもはいない)」も若干増加して15.4%となるが、「配偶者と子ども全員と一緒に」は7.7%にとどまる。

ここで2002年「報告書」をみると、「報告書」では、デカセギ直前の有配偶者率が5割であり、有配偶者に限ってみると、単身デカセギ率が5割超、家族帯同デカセギ率が約4割であった(サンパウロ人文科学研究所 2002:90)。これと比較すると、本調査に関しては、家族帯同デカセギの経験者が少ないという傾向をみることができる。それはなぜか。家族帯同、特に子ども帯同のデカセギ者の滞日が長期化し、在ブラジルのデカセギ帰国者に占める当該デカセギ経験者の比率が低下していることの表れと解釈することができる。

家族帯同デカセギが増え、帯同した子どもの生活や教育が日本を基盤としたものとなり、あるいは、第3章第1節で掲げた例(デカセギに行ったきょうだい5人が10年以上同じ会社で働き、現在は、きょうだい5人とその配偶者および孫の合計12人がそこで一緒に仕事をしているというケース(46))が示すように、日本で安定した職を継続的に得ることが可能ならば、あえてそうした生活を手放すことは選択されにくいであろう。だからこそ、「1回行ってしまったら、帰ってこなくなるでしょ。行かないのが一番いい」(10)という本音がもれる。

それゆえに、留守家族はデカセギ帰国者を再び送り出すことには慎重にならざるをえない。「(次男や三男が帰国したら)また、(デカセギに)行きたいみたいだね、本人(長男)はね。でも、帰ってきたんだから、ここで一緒に商売してほしい」(10)という発言が示す通りである。つまり、再デカセギは、帰国の契機と留守家族とのつながりに対するリスクととらえられていると考えられる。また、現実として、再デカセギの必要がある程度覚悟されているなかで、デカセギせずに暮らせることが願望として語られている側面もあるだろう。

帰国者当人も、当然のことながら、こうした家族の思いを十分に受けとめていると思われる。留守家族、帰国者ともに再デカセギへの意欲が低いことはこのように理解できよう。先にみたように、デカセギ者からの送金状況をみると、現在デカセギ中の家族をも含めたデカセギ者すべてからの送金受け取りが4割であるのに対して、帰国者においてはその7割が留守家族に対して経済的に貢献したと回答している。帰国を果たした者は、そうでない者と比較すると、留守家族とのより強い結びつきの下にある、あるいはそのように認識しているとみることができるだろう。

また、現在複数の家族がデカセギ中の場合も、特に帰国を期待する者に対しては、留守家族はデカセギの繰り返しを望まない。例えば、(31)においては、子ども帯同でデカセギ中の長男が「ブラジルに住みに来ない」ことは既定のことであり、長男のリピーター化は受け容れられている。帰国期待は単身でデカセギをしている三男に向けられており、「帰ってきたら結婚して、こっちで仕事したらいい」と、帰国後の生活基盤の準備が徐々に始められている。また、(22)では、日本で

結婚した娘ではなく、単身でデカセギ中の息子の帰国（完全帰国）への関心が高く、息子の帰国後の生活についての展望が語られる。この帰国への期待には、自分の老後生活の支え手となってほしいという願望も含まれていると考えることができる。結果として、この願望を託すことのできる子どもが見極められ、その帰国が促されるという側面もあると思われる。

このように、全体として再デカセギに対する積極的な意向はみられないなかで、留守家族あるいはデカセギ当事者としての再デカセギの必要性・可能性の判断や、再デカセギへの期待度・受容度の高低は、非常に個別的・選別的であり、現実として家族関係の再編成を伴うものといえる。デカセギ者と留守家族とのトランスナショナルな関係は多様化し、それが緊密な関係であるか・ないか、言いかえるならば、その拘束力の強弱が、各々のデカセギ者の帰国に影響するであろう。デカセギ者の滞日長期化を促す条件はさまざまあるが、こうした家族関係の再編成もそのひとつといえる。

表5-1 デカセギのとき単身だったか（デカセギ帰国者） (単位：人、%)

		単身	単身 (配偶者有)	配偶者 帯同	配偶者帯同 (子残る)	配偶者と 子全員	配偶者と 子の一部	その他	合計
初めての デカセギ	実数	16	3	1	0	1	0	3	24
	構成比	66.7	12.5	4.2	0.0	4.2	0.0	12.5	100.0
2回目の デカセギ	実数	7	3	2	0	1	0	0	13
	構成比	53.8	23.1	15.4	0.0	7.7	0.0	0.0	100.0

第2節 家族をめぐるジレンマ～デカセギへの助言と老後不安

国を越えた家族関係を経験して、留守家族とデカセギ帰国者は何を思うのか。彼らは自らの経験から助言すべきものをもっている。そのなかに、デカセギをめぐる家族のありようについての彼らの正直な思いを見出すことができるだろう。

まず、留守家族としてデカセギ希望者の家族に伝えたいこととしては、以下のような助言がなされている。

デカセギ希望者への家族についての助言〈留守家族〉

「(デカセギには) あまり期待しないで」(25)

「実際に困っているなら行きなさい。でも何とか出来るなら、そのままここでごんばったらい。そのうち、いいこともある。でも、ここで何もないなら日本へ行けばいい」「2、3年がんばればある程度は(お金が)残る。でも、あんまり期待するな、と言う。年齢がいつている人は仕事をみつけにくい」(9)

「特になし。うちの子も行って楽しんでいる。みんな行っている。仲間がいる。心配しないで大丈夫。安心。こっちは親同士が仲よし。あっちでは子ども同士が仲よし。安心だ」(31)

「子どもを信じて任せよう」(22)

「金儲けのことだけ考えず、体に気をつけて」「日本においとけば心配ない。定期的に収入ある。治安もいい」(10)

「デカセギにはなるべく行かせないよう努力せよ。人がだめになる。大学でもその資格を活かせない」(32)

「うまくいく人はたくさんいるから、行くのはいい。(日本に残る人に対しては) いろいろな問題があるから難しい。送金を奥さんがすべて愛人につぎこんだりするケースもある。家族は一緒にいったほうがいい」(34)

「心配しなくていいよ。まじめにやれば大丈夫、と言ってあげたい」(28)

「よく連絡とりあうことが大事」(29)

「勉強の方が大事だから、まずはそちらをしっかりしなさい」「戻ってきても2、3ヶ月ですぐまた行ってしま。腰を落

ち着けられない（ことを覚悟しておくこと）」(54)

「家族よりも行く人にどういう目的で行くのかを言いたい。行くときは必ず目的を持っていなければならない。お金も稼ぎたいが、あれも（これも）ではいけない。帰国して大学に戻れるか。学年の人と年の差ができる。それを埋めるのは難しい」(13)

「行くならば家族で。分かるといろいろ問題があるから。若いうちは分かっていると相手できてしまったりということも多く聞く。若い夫婦は一緒に行った方がいい。別々になった場合はおまえも行け、と」(2)

「皆が行っているのだから行ってもいいのでは、くらいしかアドバイスできない。いい仕事があればいいけどね、しか言えない」「できれば、家族全部で行った方がいいが、家庭によってはそうできない事情もあるしね」(3)

「別れない。どうこういってもどうしようもない」(4)

「ちょっとだけなら・・・と言っても、4、5年たったら帰ってこない。日本がイヤというのは聞いたことがない」(19)

「家を離れた者に自由にさせてあげてほしい」(43)

「家族をおいていくのは反対。子どもを連れて行った方がいい。自分で行く場合も家族は連れて行く」(7)

「長女も日本にいて（夫と）知り合った。次女も同じ。昔は村の青年会で知り合った。今は（そういう場）ないからね」(52)

「連絡をよくする。体のこと気をつける。さみしいから、よく連絡した方がいい」(24)

これらを一覧すると、「留守家族と連絡をとること」「家族を帯同すること」の2点が特に強調されている。実際には、デカセギ中に転職や転居が繰り返されても留守家族には知らされないなど、留守家族がデカセギ生活の詳細を把握している例は多くはない。であるからこそ、なおさらに、留守家族としては、家族とのつながりがデカセギ者の精神面を支えていると信じるよりほかなく、そうした心許なさが上記のような助言をさせるものと思われる。この他、デカセギにはさまざまなリスクがあり、帰国後の生活が必ずしも安定・安泰なものとなるとは限らないことも併せて指摘されており、デカセギ希望者およびその家族には、相応の覚悟をもってデカセギ者を送り出すことが求められている。

一方、デカセギ帰国者からデカセギ希望者に対する家族関係への助言としては次のようなことがあげられている。帰国者からの助言においても、留守家族と同様に、「留守家族と連絡をとること」「家族を帯同すること」の2点が多くあげられているが、なかでも「家族帯同」を勧める声は強い。

デカセギ希望者への家族についての助言〈デカセギ帰国者〉

「日本にいた人で無責任な人がいる。親を老人ホームに入れて日本に行ってしまうとお金送らず、という若い者がいる。ここに残った家族を見捨てるな。自分が行った頃とは全然違う。行くなら家族全員で行けばよい」(25)

「連絡はマメにして。声きくと安心。家のことがわかる」「夫婦してる人が分かれて行くもんじゃない。さびしいから他の相手を見つけてしまう。一緒に行った方がいい。独身の場合はいいが家族いるなら一緒にいくべき」(27)

「心配になってしまう。遠いし。何が起きているかわからない。ブラジルではクリスマスやお正月一緒にいる。そのときさみしい」(12)

「お金より家族を大切にされた方がよい。行くなら家族一緒の方がよい」(38)

「日本に行ったらしっかり仕事をして早く戻った方がいい。私はブラジルがいい」(52)

「なるべく家族と連絡してほしい」(23)

「家族と離れると心配する。家族と一緒にならもっと安心」(38)

「みんな一緒に行ったらどうか。長い間離れているのはよくない」(33)

「家族と離れるのは簡単ではない。特に最初の半年は難しい」(21)

「離れない方がよい。一緒に行った方がよい」(41)

「家族と離れるのは反対だ。子どもたちと離れるのはよくない」(55)

さて、これらの助言は、いずれも、デカセギを肯定し、そのデカセギを成功させるための方策を示すものであるが、デカセギをめぐる家族関係はひとつ大きな問題を抱えている。それは留守家族の中心を占める親世代の老後問題である。日系社会においては高齢化が進行しており、福博の高齢化率はおよそ20%であり、高齢者を含むあるいは高齢者のみの世帯が半数超を占める（サンパウロ人文科学研究所 2002：61）。留守家族として再デカセギを望む者が少ないことは、デカセギ者のためにそう願うと同時に、留守家族にとってそうであってほしいという願望でもある。上記、老いた親世代への対応についての発言（25）もそれをよく示している。親の老後問題は、若いデカセギ者にとっては関心の外にあるように見受けられるが、上記デカセギ帰国者は60代になっており、自身の老いと向き合うところから、老親の問題に言及することとなったと思われる。

それでは、彼らはどのような老後観をもっているのだろうか。先行研究を参照しよう。サンパウロ人文科学研究所が1995年にとりまとめた調査報告「ブラジル日系高齢者の現状と特徴」によると、ブラジルにおいては、子どもとの同居率は比較的高い。6割が配偶者、4割が息子、2割弱が娘と同居している。さらに、2割が息子の嫁、2割が孫、1割に満たないが娘の婿と同居する場合もある。独り暮らしは8.6%である。単身ないし高齢者夫婦だけの世帯は約4割である。息子およびその配偶者との同居が多いものの、娘が婚姻後も親と同居をする世帯の割合が比較的高い。老後は家族とともに過ごすのが当然という意識が強く、老人ホームに対しては、身寄りのない者や経済的に困窮している者が入居するといった否定的な印象をもたれているため、「入居したいと思わない」とする者が6割、病気で介護が必要になったらという条件付きでも入所を考えているのは2割程度である（玉川 2002）。子どもとの同居率は2002年「報告書」においても6割を超え、同居する子どもとの関係については、「大変良好」と「まあ良好」の合計が9割を超える（サンパウロ人文科学研究所 2002：75）。子どもと同居していない場合でも、7割が比較的近隣に居住し、7割が毎日～週1回顔をあわせている。従って、介護は専ら家族に期待されることとなり、1995年の「調査報告」と同じく、老人ホームに「入居したいと思わない」が6割である（サンパウロ人文科学研究所 2002：79, 81）。このように、高齢者の日常は子ども世代との極めて親密なつながりのなかで営まれている。

従って、福博の留守家族も子どもとの老後生活を想定していると考えられる。それを裏付けるように、将来の居住希望地を問うと、大多数は福博で老後を過ごすことを選択する（表5-2）。自分の老後を子に託したいと明言する親は少なかったものの、施設入所について否定的なメンタリティが主流であるならば、子ども世代への老後期待は大きいと思われる。期待する対象である子どもがデカセギをしているならば、その帰国は大いに期待されるであろう。逆に、老後を託せる子どもが近くにいる場合、親は子どものデカセギに対して非常に寛容になる。例えば、「みんな（日本にいる子ども5人）日本でしっかりやってほしい。親だから（孝行を求める）っていう人も多いが、そういうことは考えない。自分たちが動ける間はこつこつと楽しんで働いて、自分たちが動けなくなったら息子（在ブラジルの長男）らの世話になる」(46) といった発言がある。

ところが、現実においては、デカセギからの帰国時期をはかることは困難である。例えば、デカセギ帯同の子どもを日本の学校に通わせている場合は、学業途中でブラジルに帰国させることが子どものためにならないとの判断が働くことも多い。ブラジル人学校が充実しているわけではない以上、日本の公立学校に通いはじめた時点で、子ども家族の帰国が延期されるかもしれないことを、留守家族である親は承知している。また、デカセギ者が家業を継ぎ将来も現在地で生活できる可能性は、特に農業の場合は決して高いとはいえないのが現実である。

デカセギ者の帰国の見通しと諦め〈留守家族〉

「今後孫が日本の学校行けば、もうこちらには戻ってこれない」「治安問題のニュースみるから帰りたくないという」(32)

「孫は日本の小学校に行っている。家のなかではポルトガル語だが、学校が日本語なのでポルトガル語忘れそう。こっこの学校はもう無理」(29)

「日本に行ってきたひとは農家はしない」(19)

「本当は農業をしてほしかった。しゅうとさんが残してくれた土地をなくすのは申し訳ないという気持ちはある」(54)

「できる限り、親の残してくれた土地を守りたいが・・・」(13)

従って、自分の老後生活についてデカセギに行った子どもがどれほど関わってくれるのか、という点はまったく不明といってよいであろう。現在ブラジルの高齢者が低額の生活費でも家計が維持できている理由として、玉川は、①回答者の8割が住宅を所有しており、家賃負担の必要がなく、それ以外の場合には子どもが家賃を負担している場合が多いこと。②住宅は一戸建てが9割近く、マンションのような共益費を支払う必要がないこと。③「仕送り」以外にも、子どもからの多様な形態の援助がある場合が多いこと。④高齢者の生活スタイルが儉約・質素という一時代前の日本人の生活スタイルを基本としていることを掲げている(玉川 2002)。老後生活は子どもからの多様な援助に支えられているのである。従って、複数の子どもをもち、自営の家業の跡継ぎが確保されているような場合は、その他の子どもの選択について寛容になれるようであるが、頼りにしたい特定の子どもがデカセギで不在ということであれば、加齢とともに不安は増していくと思われる。下に示したのは、老後不安を示す発言である。(54)は自分の描いていた将来像と現実の隔たりについて、土地を所有することが子どもたちとのつながりを強化するのではなく、むしろ自らの移動の自由を妨げるものとなっていることを嘆くのである。

老後不安〈留守家族〉

「親が心配でひとりくらい側にはいないと思っている(はずだが)」(19)

「親が寝付くまでには帰ると言ってるけれど」(22)

「(子どものうちの)誰か呼んでくれたらそこへ行く。ここに残ってられるとは思っていない。最近はブラジル人に頼んで介護してもらう人も多い」(54)

「(将来暮らすために)日本へは行かんとは言わない」(4)

家族帯同は、デカセギ者を支える存在が身近にあるという点において、親世代を安心させるであろう。しかしながら、家族帯同というよりよい状態でデカセギ者を送り出すこと/デカセギに行くことは、場合によっては、留守家族である親世代の老後生活への支え手を失うことにもつながる。

そこに、デカセギをめぐる家族が抱え込まざるをえないジレンマが存在するのであり、そうした状況において、先述のように、デカセギをめぐる家族関係は意図的に営まれている。今後、留守家族の高齢化が進行するにしたがって、国を越えた家族関係の内実や、その関係性に関するそれぞれの世代からの評価は変わっていくものと思われる。

表5-2 将来どこで暮らしたいか（留守家族） （単位：人、％）

	福博	福博以外の ブラジル	日本	日本とブラジル 以外の国	定住せずに日本 とブラジルを往来	合計
実数	30	2	0	0	2	34
構成比	88.2	5.9	0.0	0.0	5.9	100.0

第3節 デカセギのメンタリティ～留守家族とデカセギ者の温度差

福博における留守家族とデカセギ者の関係は、60～70代の親世代と30代前後の子世代から成る世代間関係でもある。留守家族においては、デカセギを経済的手段としてとらえる意識と日本を見聞する機会としてとらえる意識とが並存していた。デカセギは文字通りの「出稼ぎ」であると同時に「社会見学」としてとらえられていた。従って、その場合、日本へ行くことは「一種のブーム」でもあるとされ、「日本へ行って、見て、ついでに遊んでやろう、自由なうちに行ってみよう、という流れ」にのって若者が日本に向かったと説明されてきた。

デカセギがこのように説明されるのは、ひとつには、日本を知らない二世、三世の増加により、日本という国に対する好奇心に発する来日が増えつつあり、実態として上記のような傾向がみられるようになったためである。もうひとつは、日本に「稼ぎに行くこと」を喜ばしいこととはとらえない認識が存在するために、日本行きについて「稼ぎに行くこと」以上の付加価値が必要とされるためであろうと思われる。なぜなら、60～70代の留守家族は、ブラジルを自分の国と呼び、ブラジルで一生を終えるつもりであると述べると同時に、日本に対しては特別な気持ちをもつからである。この日本への思いは、例えば、「言うに言えないものが潜んでいる。これは、何て言ってもいいか知らない、自分でも。潜んでいるわけね、何かがこのなかにね」「血のなかにあるものは争えないということがあるのではないかという気がする」（46）、「日本人の魂ってものがある」（46の妻）と表現され、日本を単なる稼ぎ場として位置づけることには強いためらいがみられる。また、50代後半のデカセギ経験をもつ留守家族（9）（一世）は、「自分の生まれた故郷だからね。懐かしいから帰ってみたいというのはあった」と語る。こうした人々にとっては、「先祖の墓があること」が自分を日本へ引き寄せる大きな力となっている。

つまり、「日本を知るための日本行き」は、日系コロニアを支えてきたと自負する人々、ブラジル社会においてしかるべき社会的地位と経済力を獲得したと自負する人々が選んだひとつの「デカセギストーリー」ということもできる。

デカセギの意味〈留守家族〉

「ここでは困って行ったひとは少ない。今でも生活に困ってという人は少ない。若い人は仕事ないから。ワーキングホリデー的、経験深める。言葉できるのが強み」（28）

「今のひとは違う。今のひとはデカセギではない。日本をみて楽しむために行く、というのが多い。貯めて何しようかとい

う人は少ない」(25)

「いつ帰るかときくと、(答えを)濁す。今は帰るつもりはないらしい。ただ、いつかは帰るつもり。お金のこともあるが何でも買いたくなる。日本を楽しみたい(のだろう)」(13)

日系ブラジル人の教育熱心さはこれまでも指摘されてきたところである。(32)は「自分が学校に行けなかったので子どもは大学にやった」と語る。留守家族の多くを占める親世代自身が、周囲の同年代のブラジル人に比較して、相対的に高い教育程度を誇ってきた側面もある。そして、デカセギ者の学歴をみると、高校以上の教育を受けた者が多く、なかには、農業技師養成学校や農業大学の卒業者、あるいは大学で経営学、芸術、医学、薬学を修めた者・勉強中の者も少なからずいた。であれば、子どもが、高い教育を受けたにもかかわらず、職がないために日本に働きに行かなければならない現状は、親としては、承服しがたいものがあるろう²⁵⁾。そのうえ、日本に行けば、身に付けた教育を活かすことは難しく、差別を受けることもある。また、デカセギ者が送金あるいは持ち帰った経済的成果は日々の暮らしを多少とも潤沢にするかもしれないが、事業を軌道にのせ、経営を維持できるほどのものでは必ずしもない。さらに、こういう形で若い世代が不在となることは地域社会の停滞をもたらす。世代構成ごとに階級意識をまとめると、一世、二世は三世に比して高いところに自分を位置づける傾向がある。成功者としての自信とそれでも子どもを「稼ぐために」送り出さなければならないという現実を前に、親世代の心境は複雑なものであろうと思われる。

デカセギへの複雑な思い〈留守家族〉

「こころは百姓だけだと大変だから、若い人も皆デカセギに変わるね。青年会や女子会がなくなっていくね。なくなるのはあまりよくない。デカセギに行ったらいいようになるかもね」(37)

「勉強に出て遠くの人とつきあうこともあるけど、デカセギで出て行くことで若いもんがおらんもね。ベテランはまだつながりがあるもんね。村にとっては本当はよくないですね」(52)

「(デカセギに行ってしまったのは)子どもに勉強させたせい。農業継がせるために農業学校に行かせたら、米国研修から帰って機械に興味もった(機械への興味が高じてデカセギに行ってしまった)」「デカセギの判断は本人に任せる。親の方があきらめなければならない時代となっている」(54)

「大学でも仕事ない。安い給料。下のクラスなら仕事ある。でも大学出てできる仕事ない(からデカセギに行かざるをえない)」(32)

「仕事がないじゃ仕方ない。どうもこうも反対できない。引き留めることはできない」(29)

「デカセギはいいこともあるし、悪いこともある。悪い点の方が多い。食べ物つくらなきゃ、家も直さなきゃならんと考えれば(デカセギするのは仕方ない)」「こっちいたらよい仕事がない。よい仕事を持っていれば日本に行かないと考える」(19)

「生活のためには日本に行った方がよい。いいあれじゃあるけど、いい反面ちょっと寂しいね。いいところは仕事、お金もうけね。そこがいいとこ。悪いところは皆バラバラになること。勉強も途中にして行く大学生もいるもんね」(52)

「当初の夢もだんだんと変わってきている。7～8年になるが貯蓄もない。かといって、こっちの方がいいから帰ってこい、といえる状況でもない」(9)

こうして、留守家族＝親世代においては、子どもの日本行きは「稼ぐ」という一語で括られることなく、日本の文化にふれる意義、自分のルーツを知る意義、即ち、「社会見学的」な意義をもつ経験でもあると定義される。とりわけ、先にもふれたように、日常的に日本語を使用する世代(一世および高齢の二世)にとって、日本語はアイデンティティの重要なよりどころとなっている。例

えば75歳の二世（46）は、自分が日本人の子どもであるのに日本語を知らないことを「恥ずかしい」と思い、日本語を勉強した思い出を語り、69歳の一世（3）は、滞日中の孫が習いおぼえた日本語で自分に手紙を寄こすことについて、「日本の学校に通うことはプラスの面が大きい」と評価する。日本へ行ったことによって、日本語に親しむだけではなく、祖先への関心や理解が深まるとすれば、それは家族の求心力が高まることにつながる。留守家族にはこうした期待もあろう。そして、社会経験としての日本行きという意味に限って言えば、デカセギを何度もする必要はないということになる。

従って、これからも日本で暮らすであろうことが現実視される子どもに対しても、留守家族である親世代は帰国を待つ気持ちを持ち続けるのである。それをよく示す言葉としては、「帰ってきたら嬉しいよね。家買って、もう帰らないって言ったときはがっくりきたね。子どもは子どもでおるだろうけど、切り離れたような問題だけど、もう帰って来ないってね、ちょっと涙でたね。悲しいってわけでもないんだけど。寂しいってわけではないんだけど」（3）といったものがある。

これに対して、デカセギ帰国者は、親に比べればリアリストである。観念的な日本イメージや、情緒的な日本への感情にとらわれることが少ないように思われる。稼ぐという現実的な理由や消費文化への憧れから日本に出かけていき、日系人として異国で暮らす経験をした結果、デカセギのプラス面とマイナス面を冷静にとらえているように思われる。稼ぎ場としての日本の現実については、批判しつつもそういうものとして受け入れる。と同時に、親や祖父母の故国を見聞し自分のルーツにふれた経験については、それも大事な記憶とする。経済的な必要があれば、再デカセギにも行くであろう。デカセギへの思い入れは留守家族の方が強く、デカセギ観もまた留守家族において硬直的といえるかもしれない。

デカセギの感想〈デカセギ帰国者〉

「日本に行ってみて、違う国の文化を知って、違うところに旅行してみてよかった」（38）

「日本とブラジルは違う。遊びに行くとおっ面しか見えない。仕事しないと日本わからない。仕事して日本を知ってよかった」「親戚の話聞いて日本見てみたくなった。勉強になった」（27）

以上みてきたように、留守家族とデカセギ者では、日本へのデカセギに対する思いには温度差が存在する。この点については住江らによる指摘が示唆的である（住江&フジイ 2005）。それによれば、サンパウロ州、パラナ州の一部の二世、三世の間では、あたらしいRacial Identityとしての「ニホンジン」というのが育ちつつある。これは、ジャポネースとは違うものである。二世、三世は、ブラジル人としてのNational Identityを明確に抱いており、かつ「ジャポネース」であることを拒否するが、「ニホンジン」であることを認める。ニホンジンというのは人種的に解釈されているが、ジャポネースというのは必ずしもそうではない。ジャポネースは日本生まれの一世を指し、それに付随してNational Identityが予想されることから、代わりに「ニホンジン」というアイデンティティが選択され、「人種」的側面が表面に押し出され強調されるとのことである。

この考え方に立てば、二世、三世のデカセギ者にとって、ブラジルは自分のくにであり、日本はニホンジンとしてのルーツのある場所ということになる。デカセギ者は、ニホンジンとしての自分やニホンジンの文化に関心をもって日本に行くのであり、親世代がジャポネースとしてのアイデン

ティティ（あるいはそれに限りなく近いもの）をもっているとすれば、両者のデカセギメンタリティは決定的に違うと考えることができる。留守家族には一世だけではなく二世も含まれるが、60～70代の二世と30代の二世とでは考え方に大きな違いがあり、年長の二世のアイデンティティは一世の影響を強く受けているように思われる。デカセギは、このような世代差、年代差のなかでおこなわれている。

おわりに

以上、福博のデカセギ者・デカセギ帰国者と留守家族について、両者の関係がどのように営まれ、どのように選択されるのか、その一端を考察してきた。デカセギ者と留守家族とが親子関係にある場合が多かったことから、主に世代間の関係としての側面に焦点をあて、インタビューデータを活用することによって、それぞれの立場にある人々の意識や思惑をヴィヴィッドにとらえることを試みた。その際、先行研究においては、デカセギ者自身の意識や動向が主な関心事であったが、本分析ではむしろ留守家族の方に重心がおかれている。この点が大きな特徴といえるだろう。主に在ブラジルの留守家族の眼を通してデカセギあるいはデカセギ者のありようをとらえることによって、デカセギ者がそれぞれに世代間関係や家族生活を営み、そこにおいて日本へのデカセギを選択していること、その選択をめぐるのは世代それぞれの立場に付随する多様な事情があること、そうした事情のなかでデカセギをめぐる世代間の関係性が絶えず調整されていることなどが浮き彫りにされたと考える。

しかし、トランスナショナルな視角からの検討を要する課題はまだ多く残されていることはいうまでもない。最後に、今後検討されるべき課題を整理するならば、以下のようにまとめられるだろう。

1 点目は経済的な側面からみた問題である。ブラジル経済の状況次第では、今後もデカセギという現象は拡大していくだろう。まず、福博村という地域に視点を定めるならば、若い世代が流出した結果、送り出す側の地域が疲弊するという点においては、この村も例外ではないといえる。中心的産業である農業については、栽培する作物の種類や栽培の方法を変える、あるいは、栽培をやめて卸に転換するなどの工夫や努力がなされているものの、村全体としての成果は大きいとはいえず、農業衰退の勢いをとめることは難しい状況にある。従って、デカセギという選択がより身近な選択肢のひとつとなるなかで、帰国者が福博に帰る＝帰郷することを暗黙の前提とし、彼らに地域社会の活性化を託すという期待あるいは思惑が働かざるをえないことも理解できよう。しかしながら、今のところ、そうした期待が実現されているとはいいがたい。

とはいえ、デカセギをめぐる状況は刻々と変化しているのであり、デカセギの長期化・常態化という状況のなかで、福博のデカセギ者が地域に対していかなる働きをもたらす存在となっていくのか、という視角は重要である。家族や親族への送金という個人的な援助だけではなく、例えば、地域が発展していくためのプロジェクトを発案・運営するなど、地域のリーダーとしての貢献の可能性あるいはその兆しがあるとすれば、それはどこに認められるのだろうか。つまり、デカセギが、個人的あるいは家族的事情から主体的に決定・選択・実行されつつ、同時に、地域にとってより公

的な効果をもたらしている（もたらしていきける）とすれば、それはどのようなプロセスを経るものなのか。たしかに、本調査の対象者である帰国者においては、転職して起業を目指したいとする者は2割に満たない。しかし、潜在的な起業志望者はそれよりは多いと推測されることから、そうした下からの動きがどのように成長するのか・しないのか、そして、どのような力を発揮することになるのか・ならないのか、注目されるべき点であろうと思われる。

もちろん、この一連の関心は、デカセギを送り出す「地域」とデカセギ者との関係だけではなく、本調査において主に取り上げた留守家族とデカセギ者との個別的な関係に焦点をあてることによっても検討されなければならない。留守家族が家業として営む自営業（多くは農業関連の事業であるが）の盛衰がその家族をデカセギに送り出すことや帰国させることにどのように関わっているのか。送金への需要がどのように変わり、そのことがブラジルの家族との関係にいかなる影響をもたらすのか。デカセギ者の帰国あるいは滞日延長の希望や意図とどのように関わっているのか。職業あるいは起業の選択をめぐるデカセギ者の主体的・戦略的な意志と留守家族のそれとの対立やずれがあるとしたら、それはどのようなものなのか。こうした課題が検討対象となろう。いずれの問題を取り上げるにせよ、デカセギ者が一枚岩ではないことに留意が必要である。彼らのなかにおける序列化や格差の存在、そして、それを生じさせるメカニズムが解明されることが求められる²⁶⁾。

2点目は社会・文化的な側面に関わる問題である。ここには、アイデンティティや文化的摩擦、世代間の意識の違いなどに関わる問題が含まれる。はじめに、アイデンティティについてみると、本調査をみる限り、デカセギについては、消極的な賛成をも含めれば、7割超が賛成していた。少なくとも、一世あるいは一世から日本の話を聞いて育った二世を親にもつ世代にとっては、「日本文化経験ツアー」としての意味づけは消えないであろう。しかしながら、既に日本語を十分に理解することのできない若い世代がデカセギ者の主流になりつつある。言葉の問題だけではなく、アイデンティティにおいても、祖父母や親とはまったく異なる意識をもつ世代が現れているということである。稼ぎ場としての日本へのルートは今後も「活用」されるにしても、デカセギのメンタリティはさらに大きく転換していくものと思われる。稼ぐことができ、さまざまな知識や技術を身に付けることができるならば、行き先が日本である必要はないのであり、そのなかで日本が選択されるとすれば、そこには「ルーツ」としての日本への関心とは別の要因が働いているということになる。彼らにとって、日本が意味するものは変わらざるをえないと思われる。福博を含め日系社会における日本へのデカセギの意味の変遷を追究することが、今後さらに重要な課題となってくるとと思われる。

また、本調査においては十分なデータを収集することはかなわなかったが、ブラジルと日本というふたつの文化圏を行き来する子どもの教育、言語、アイデンティティの問題を検討することも必要である。彼らのアイデンティティが、どのような社会条件の下に、どのような契機を得て、どのようなプロセスをたどり、どのようなものとして形成されていくのかを探ることが求められよう。さらには、このようなアイデンティティをもつ若い世代がブラジルの中に占める位置や、そうした位置づけの変動も検討の対象となろう。

次いで、世代間の問題としては、高齢化の問題があげられる。過疎化とともに進行する留守家族の高齢化に関しては、増加する日系高齢留守家族の生活実態をとらえるとともに、そこにみられる世代間の意図や情緒関係のありようをとらえること、デカセギの経験がどのようなストーリーとし

て自らの中で再構成され、あるいは、若い世代に語られていくのか、といったことにも関心が寄せられることになる。

注

- 1) 本報告書所収のアンジェロ・イシ論文を参照のこと。
- 2) 日本に居住するブラジル人を対象にした研究については、小内・酒井編著(2001)の序章を参照のこと。また、同書以降の代表的な研究として、池上(2001)、小内編著(2003)、梶田・丹野・樋口(2005)、大久保(2005)などがある。
- 3) 最近、ブラジルのパラナ州クリチーバ市にある「ブラジル出稼ぎ協会(ABD)」が、2003年から2004年に大規模なデカセギに関する実態調査を行っている(ABD/SEBRAE 2005)。これについては、飯田(2006)を参照のこと。
- 4) 日本での調査にもとづく主な成果として、小内・酒井編著(2001)、小内編著(2002)、小内編著(2003)、小内編著(2006)、小内編著(2007)がある。
- 5) すでに述べたように、デカセギに関するブラジル側での調査研究そのものがそれほど多くないため、調査結果の分析自体が価値をもつと考えてもよい。
- 6) スザノ市の2005年現在の人口は、ブラジル地理統計院の推計によると、272,452人(<http://www.ibge.gov.br/cidadesat/>, 2007.1.10)、サンパウロ州データ分析機構の推計によると、270,566人(<http://www.seade.gov.br/produtos/perfil/perfil.php>, 2007.1.10)で、いずれにしても27万人を超えている。
- 7) 2006年8月の現地調査の際、スザノ市役所から入手した資料より。
- 8) 石川県小松市のホームページ参照(<http://www.city.komatsu.ishikawa.jp/gaiyo/gaiyo.asp>, 2007.1.10)。
- 9) 福博村の調査協力者から入手した新聞記事の切り抜き(「変貌する生産地図26」『パウリスタ新聞』1980年3月)参照。
- 10) 『福博村村会議事録』2004年版より。
- 11) 現地での聞き取りによる。
- 12) <http://www.100nen.com.br/ja/fukuhaku/>, 2007.1.10、参照。
- 13) 同上、参照。
- 14) 「明日のスザノ福博村は①」『サンパウロ新聞』1999年6月も参照。
- 15) 「変貌する生産地図(29)」『パウリスタ新聞』1980年4月3日、参照。
- 16) 同上、参照。
- 17) 『福博村村会議事録』1988年版より。
- 18) 福博村会から入手した資料、参照。なお、「デカセギ経験者」とは、資料で使われている表現であり、その年のデカセギ者ではない。
- 19) <http://www.ibge.gov.br/home/estatistica/populacao/>, 2007.1.10、参照。
- 20) 「明日のスザノ福博村は④」『サンパウロ新聞』1999年、6月、参照。
- 21) 『ニッケイ新聞』2002年9月11日付け、参照。
- 22) 1992年の福博村調査の報告(喜多川 1993)をみると、当時の調査においても、留守家族のほ

- とんどが世帯主やその妻であり、デカセギ者の続柄は、世帯主の子が中心であった。また、デカセギ者については、「日系人の最上層と最下層はいかない。中間・中堅層が出かけている」「デカセギ者の総合イメージは、三世を中心とした、若年層の、次世代を担う、独身男女で高学歴者」との記述がみえる。それから15年後の2006年においてもこれらの点に変わりはないといえよう。
- 23) 2002年「報告書」によれば、家庭における使用言語は、ポルトガル語3割、日本語3割、日本とポルトガル語の併用4割となっている。
- 24) デカセギ者と日本との関係をとらえる視角としては、リピーター、長期化、定住化などさまざまな枠組がある。本分析でとりあげたのは留守家族と帰国者であるため、ブラジルからみて「帰国するか、しないか」という視点から検討するにとどめた。従って、帰国していない者のライフスタイルを、リピーターと呼ぶのか、あるいは、定住化としてとらえるのか、その定義は何か、といった問題には踏み込まなかった。いずれにしても、滞日の長期化が強まる傾向にあることは否定できないと思われる。
- 25) ただし、親世代が教育熱心であることと、子どもが実際に身につけた教育歴が高いことは必ずしもイコールではない。これらの教育歴が客観的にみて高いものであるかどうかについては留保が必要である。本調査におけるデカセギ者の教育歴は、小・中学校卒が約3割、高校卒が約4割、大学卒が約1割であった。この数字は梶田（1998）において示されたものとほぼ同じであり、梶田はこの比率について「必ずしも高いとはいえない」と述べている。大学受験に失敗あるいは中退してデカセギに行った者が3割いる一方で、帰国者のなかに復学した者はいないことを考えてみても、日系の若い世代にとっての高等教育の意味が変わりつつあることがわかる。
- 26) 例えば、佐野（1998）は、今後デカセギ希望者と希望しない者との二極化構造へと変化していくであろうことを指摘し、その要因として経済格差（高収入層か否か）をあげている。

参考文献

- ABD/SEBRAE, 2005, *Dekassegui - Empreendedor e Cidadão*. ABD/SEBRAE. (発行地の表記はなし)。
- 浅川和幸, 2007, 「日系ブラジル人労働者の労働と生活——A人材派遣会社を事例に——」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書23 日系ブラジル人の労働—生活世界と地域住民』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室, 15-48。
- 浅野卓夫, 2003, 「アリアンサ移住地・スザノ入植地について」工藤真由美・津田葵編『言語の接触と混交——日系ブラジル人の言語の諸相』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」, 20-2。
- 飯田俊郎, 2006, 「出稼ぎ・帰国・再出稼ぎの現状と問題点」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書21 日系ブラジル人のトランスナショナルな生活世界』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室, 15-22。
- 池上重弘編著, 2001, 『ブラジル人と国際化する地域社会』明石書店。
- イシ、アンジェロ, 2006, 「デカセギ移民へのまなざし—英米とブラジルにおけるデカセギ論—」『ラテンアメリカ研究年報』26, 116-140。
- 梶田孝道, 1998, 「出稼ぎ10年後の日系ブラジル人—1998年の日系労働者アンケート調査に基づく再検証」『国際関係学研究』25, 1-22。

- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人, 2005, 『顔の見えない定住化』名古屋大学出版会。
- 喜多川豊字, 1993, 「日系コロニアにおける出稼ぎの影響と展望——サンパウロ市近郊村の実態調査——」『東洋大学社会学研究所・年報』25, 1-38。
- , 1996, 「浜松市における日系ブラジル人の生活構造と意識——日伯両国調査を踏まえて——」『東洋大学社会学部紀要』34(1), 113-97。
- 喜多川豊字・藤木三千人・嶋澄, 1992, 「日系ブラジル人労働者の実態調査 群馬県大泉町とサンパウロ市郊外スザノ市日系人集団地福博村の調査を通して」『東洋大学社会学部紀要』29(2), 96-133。
- コガ, エウニセ・アケミ・イシカワ, 1992, 「日系ブラジル人のアイデンティティ—象徴の循環的変容—」『ラテンアメリカ・カリブ研究』1, 63-71。
- , 1997, 「国際労働力移動における家族関係の役割及び変容—来日日系ブラジル人の場合—」『Sociology today』8, 1-17。
- 野入直美, 2004, 「沖縄における日系人・定住外国人の国境を越える移動とエスニック・ネットワーク（上）—アメリカ人、台湾人、日系ペルー人、日系ブラジル人の意識調査から—」『琉球大学法文学部紀要 人間科学』14, 271-89。
- 大久保武, 2005, 『日系人の労働市場とエスニシティ』御茶の水書房。
- 小内透編著, 2002, 『調査と社会理論・研究報告書19 外国人多住地域の教育と国際交流活動』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室。
- , 2003, 『在日ブラジル人の教育と保育』明石書店。
- , 2006, 『調査と社会理論・研究報告書22 地域住民の外国人との交流・意識とその変化』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室。
- , 2007, 『調査と社会理論・研究報告書23 日系ブラジル人の労働—生活世界と地域住民』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室。
- 小内透・酒井恵真編著, 2001, 『日系ブラジル人の定住化と地域社会』御茶の水書房。
- 大野盛雄・宮崎信江, 1957, 「大都市周辺農家の成立」泉靖一編『移民——ブラジル移民の実態調査』古今書院。
- 佐野哲, 1998, 「日系人労働者の帰国後と出稼ぎ意識の変化—在ブラジル日系人を対象とした2回のアンケート調査から—」『国際人流』11(12), 17-21。
- サンパウロ人文科学研究所, 2002, 『日系社会実態調査報告書』サンパウロ人文科学研究所。
- Secretaria Municipal de Comunicação Social, 2006, *Centenário da imigração japonesa no brasil* (Suzano, Prefeitura de Suzano).
- 篠塚英子, 1992, 「日系ブラジル付添婦たちの現状と問題」『女性労働』17, 40-51。
- 住江淳司 & エステーラ・オカバヤシ・フジイ, 2005, 「日系ブラジル人のアイデンティティに関する一考察」『名桜大学総合研究』7, 1-14。
- 玉川淳, 2002, 「ブラジルの高齢者—日系ブラジル高齢者の暮らしを中心に—」『生きがい研究』（長寿社会開発センター）7, 104-16。
- 渡辺雅子, 2002, 「日系ブラジル人のデカセギ」『アジア遊学』39, 126-36。
- 山中啓子, 1999, 「日系ブラジル人女性の日本逆流出稼ぎ現象：世帯ストラテジーと「故国」追求」『日米女性ジャーナル』25, 63-88。

【 補足資料 】

補表1 日系何世×どの階級に属していたと思うか（留守家族）（単位：人、%）

		上	中の上	中の中	中の下	下	合計
一世	実数	2	0	5	3	0	10
	構成比	20.0	0.0	50.0	30.0	0.0	100.0
二世	実数	1	3	7	4	1	16
	構成比	6.3	18.8	43.8	25.0	6.3	100.0
三世	実数	0	0	4	2	1	7
	構成比	0.0	0.0	57.1	28.6	14.3	100.0

補表2 日系何世×デカセギに賛成か（留守家族）（単位：人、%）

		賛成	反対	どちらでもない	合計
一世	実数	9	0	1	10
	構成比	90.0	0.0	10.0	100.0
二世	実数	13	5	0	18
	構成比	72.2	27.8	0.0	100.0
三世	実数	4	1	2	7
	構成比	57.1	14.3	28.6	100.0

補表3 日系何世×デカセギによる日本への好感度の変化（留守家族）（単位：人、%）

		前から好感 さらに好感	前から好感、 好感減少 変化なし	好感減少	好感無か ら好感増	好感無に 変化なし	好感無から さらに減少	合計
一世	実数	2	5	1	0	0	0	8
	構成比	25.0	62.5	12.5	0.0	0.0	0.0	100.0
二世	実数	4	9	0	1	1	0	15
	構成比	26.7	60.0	0.0	6.7	6.7	0.0	100.0
三世	実数	0	2	1	1	0	1	5
	構成比	0.0	40.0	20.0	20.0	0.0	20.0	14.3

補表4 日系何世×将来どこで暮らしたいか（留守家族）（単位：人、%）

		福博	福博以外 のブラジ ル	定住せず 日本とブラ ジルを往来	合計
一世	実数	9	0	1	10
	構成比	90.0	0.0	10.0	100.0
二世	実数	13	1	0	14
	構成比	92.9	7.1	0.0	100.0
三世	実数	4	1	1	6
	構成比	66.7	16.7	16.7	100.0

補表5 日系何世×再デカセギに賛成か（留守家族）（単位：人、%）

		デカセギに 行ってほし い	デカセギに は行ってほ しくない	合計
一世	実数	2	4	6
	構成比	33.3	66.7	100.0
二世	実数	3	12	15
	構成比	20.0	80.0	100.0
三世	実数	2	1	3
	構成比	66.7	33.3	100.0

補表6 日系何世×デカセギから帰国後に就いてほしい仕事（留守家族）（単位：人、％）

		公務員	農業	自営業	主婦	学生・生徒	その他	合計
一世	実数	1	0	3	1	0	4	9
	構成比	11.1	0.0	33.3	11.1	0.0	44.4	100.0
二世	実数	1	1	6	0	1	7	16
	構成比	6.3	6.3	37.5	0.0	6.3	43.8	100.0
三世	実数	0	0	0	0	0	4	4
	構成比	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0

補表7 初めてのデカセギのとき単身だったか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

		単身	単身 (配偶者有)	配偶者 帯同	配偶者帯同 (子残る)	配偶者と 子全員	配偶者と 子の一部	その他	合計
実数	実数	16	3	1	0	1	0	3	24
	構成比	66.7	12.5	4.2	0.0	4.2	0.0	12.5	100.0

補表8 日系何世×教育歴（留守家族）（単位：人、％）

		小学校	中学校	高校	大学	その他	合計
一世	実数	4	4	1	0	1	10
	構成比	40.0	40.0	10.0	0.0	10.0	100.0
二世	実数	9	4	2	0	2	17
	構成比	52.9	23.5	11.8	0.0	11.8	100.0
三世	実数	3	0	3	1	0	7
	構成比	42.9	0.0	42.9	14.3	0.0	100.0

補表9 将来どこで暮らしたいか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

		福博	福博以外の ブラジル	日本	日本とブラジル 以外の国	定住せずに日本 とブラジルを往来	合計
実数	実数	15	5	0	1	2	23
	構成比	65.2	21.7	0.0	4.3	8.7	100.0

(本論文の執筆分担は、序章・第1章：小内、第2～5章・おわりに：小野寺)